

きやうなる物を、五頭刻み立て、供養し奉らん講師して、其の佛彼の佛と名を付け奉るなりけり。其れを問ひ聞きて、をかしかりし中にも、同じ功德にもなればと聞きし、怪しものどもこそ、斯く希有の事どもをし侍りけるなり。

(六) 歌よみて被<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>罪事

今は昔、大隅守なる人、國の政をした、め行ひ給ふ間、郡司のしどけなかりければ、召しに遣りて誠めんと云ひて、先々のやうに、しどけなき事有りけるには、罪に任せて、重く軽く誠むる事有りければ、一度にあらず、度々しどけなき事有れば、重く誠めんとて召すなりけり。「此處に召して率て参りたり」と人の申しければ、先々するやうに仕伏せて、尻頭にのぼり居たる人、咎を設けて、打つべき人設けて、先に二人引きはりて、出で來たるを見れば、頭は黒髪も交らず、いと白く年老いたり。見るに打せん事いとほしく覺えければ、何事に付けてか是れを免さんと思ふに、事つくべきこと無し。過ちどを片端より問ふに、唯だ老をがうけにて答へ居る。如何にして是れを免さんと思ひて、「己れはいみじき盗人かな。歌は詠みてんや」と云へば、「はかばかしからず候へども、詠み候ひなん」と申しければ、「さらば仕れ」と云はれて、程も無く、戰慄き聲にて打出だす。

年を経て頭の雪は積れどもしもと見るにぞ身はひえにける

と云ひければ、いみじう哀れがりて、感じて免しけり。人は如何にも情は有るべし。





## (七) 大安寺別當女に嫁する男夢見事

今は昔、奈良の大安寺の別當なりける僧の女の許に、藏人なりける人の忍びて通ふ程に、せめて思はしかりければ、時々晝もとまりけり。或時晝寝したりける夢に、俄に此家の内に、上下の人響みて泣き合ひけるを、如何なる事や有らんと、怪しければ、立ち出で、見れば、舅の僧、妻の尼公より始めて、有りと有る人、皆大きな土器を捧げて泣きけり。如何なれば、此土器を捧げて泣くやらんと思ひて、能く見れば銅の湯を土器毎に盛り。打入りて、鬼の飲ませんにだにも飲むべくも無き湯を、心と泣く飲むなりけり。辛くして飲み果てつれば、又乞ひ添へて飲む者も有り、下廊に至るまでも飲まぬ者無し。我が傍らに臥したる君を、女房来て呼ぶ。起きて往ぬるを、覺東なさにまた見れば、此の女も、大きな銀の土器に、銅の湯を一土器いれて、女房取らすれば、此の女取りて、細くうたけなる聲を差し上げて泣く飲む、目鼻より煙くゆり出づ。あさましと見て立てる程に、又「客人に參らせよ」と云ひて、土器を臺に据えて女房持て來たり。我も斯かる物を飲まんずるかと思ふに、あさましくて、惑ふと思ふ程に夢さめぬ。驚きて見れば、女房食物を持て來たり。舅の方にも物食ふ音して喧騒る。寺の物を食ふにこそ有るらめ。其れが斯くは見ゆるなりと、ゆしく心憂く覺えて、女の思はしさも失せぬ。さて心地の悪しき由を云ひて、物も食はずして出でぬ。其後は、遂に彼處へ行かずなりにけり。

## (八) 博打掣入の事

昔、博打の子の年若きが、目鼻一所に取り寄せたるやうにて、世の人にも似ぬ有りけり。二人の親、是れ如何にして世に有らせんずる、と思ひて有りける所に、長者の家に愛育く女の有りけるに、顔よからん掣とらんと、母の求めけるを傳へ聞きて、「天の下の顔よしと云ふ、掣に成らんとたまふ」と云ひければ、長者喜びて、掣に取らんとて目を取りて契りてけり。其夜になりて、裝束など人に借りて、月は明かりけれど、顔見えぬやうにもてなして、博打ども集まりて有りければ、人々しく覺えて、心にくく思ふ。さて夜々往くに、晝寝べき程に成りぬ。如何がせんと思ひ廻らして、博打一人、長者の家の天井に昇りて、二人寝たる上の天井を、ひし／＼と踏み鳴らして、嚴めしく恐ろしげなる聲にて、「天の下の顔善し」と呼ぶ。家の内の者ども、如何なる事ぞと聞き惑ふ。掣いみじく怖て、「己れをこそ世の人、天の下の顔善し」と云ふと聞け。如何なる事ならん」と云ふに、三度まで呼べば答へつ。「是れは如何に答へつるぞ」と云へば、「心にも有らで答へつるなり」と云ふ。鬼の云ふやう、「此家の女は、我が領して三年に成りぬるを、汝如何に思ひて斯くは通ふぞ」と云ふ。「さる御事とも知らで通ひ候ひつるなり。唯だ御助け候へ」と云へば、鬼「いと憎き事なり。一言して歸らん。汝命と形と何れか惜しき」と云ふ。掣「如何が答ふべき」と云ふに、舅「何ぞの御形ぞ、命だにおはせば、唯だ形をとの給へ」と云へば、教への如く云ふに、鬼「さらば吸ふ」と云ふ時に、掣顔を抱へて、「あら／＼」と云ひて臥し轉ぶ。鬼はあよび歸りぬ。「さて顔は如何が成りたるらん」とて、脂燭をさして人々見れば、目鼻ひとつ所に取り据ゑたるやうなり。掣は泣きて、「唯だ命とこそ



申すべかりけれ。斯かる容貌にて、世の中に在りては何かせん。斯からざりつる前に、顔を一たび見え奉らで、大方は、斯く恐ろしき物に領せられたりける所に参りける過ちなり」とかこちければ、鼻いとほしと思ひて、「此の代りには、我が持ちたる寶を奉らん」と云ひて、めでたく愛護きければ、嬉くてぞ有りける。所の悪きかとて、別に善き家を造りて住ませければ、いみじくてぞ有りける。

宇治拾遺物語 卷第十

(一) 伴大納言應天門を焼く事

今は昔、水の尾の御門（○清和）の御時に、應天門焼けぬ。人の放けたるになん有りける。其れを伴善男と云ふ大納言、「是れは信の大臣の仕業なり」と、朝廷に申しければ、其の大臣を罪せんとせさせ給うけるに、忠仁公（○良房）、世の政は御弟の西三條の右大臣（○良相）に譲りて、白川に籠り居給へる時にて、此事を聞き驚き給ひて、御烏帽子直垂ながら、移の馬に乗り給ひて、乗りながら北の陣までおはして、御前に参り給ひて、「此の事申す人の讒言にも侍らん。大事になさせ給ふ事、いとことやうの事なり。斯かる事は、返すべく能く正して、實虚言あらはして、行はせ給ふべきなり」と奏し給ひければ、實にもと思し召して正させ給ふに、一定もなき事なれば、「免し給ふ由仰せよ」と有る宣旨承りてぞ、大臣は歸り給ひける。左の大 臣は、すぐし「イ本三字つゆ犯し」たる事も無きに、斯かる横さまの罪にあたるを思し歎きて、日の装束して、庭に荒鷹を敷きて、出でて天道に訴へ申し給ひけるに、免し給ふ御使に、頭中將、馬に乗りながら馳せ参でければ、急ぎ罪せらるゝ使ぞと心得て、一家泣き喧騒るに、免し給ふ由仰せかけて歸りぬれば、又喜び泣き夥しかりけり。免され給ひにけれど、「朝廷に仕うまつりては、横さまの罪出で來ぬべかりけり」と云ひて、ことに本のやうに宮仕もし給はざりけり。此事は過ぎにし秋の比、右兵衛の舍人なる者、東の七條に住



みけるが、司に参りて、夜更けて家に歸るとて、應天門の前を通りけるに、人の様子して私語めく。廊の腋に隠れ立ちて見れば、柱よりかゝぐり下るゝ者有り、怪しくて見れば伴大納言なり。次に子なる人下る。又次に雑色とよ清と云ふ者下る。何わざして下るゝにか有らんと、つゆ心もえで見ると、此三人下り果つるまに、走る事限りなし。南の朱雀門さまに走りて往ぬれば、此舎人も家さまに行く程に、二條堀河の程行くに、大内の方に火有りとて大路喧騒る。見返りて見れば、内裏の方と見ゆ。走りかへりたれば、應天門の半ばかり燃えたるなりけり。此有りつる人共は、此火放くるとて昇りたりけるなりと心得て有れども、人の極めたる大事なれば、あへて口より外に出ださず。其後左の大臣のし給へる事とて、罪蒙り給ふべしと云ひ喧騒る。あはれ、したる人の有る物を、いみじき事かなと思へど、云ひ出だすべき事ならねば、いとほしと思ひありくに、大臣免るされぬと聞けば、罪無き事は、遂に遁るゝ者なりけりとなん思ひける。斯くて九月ばかりに成りぬ。斯かる程に、伴大納言の出納の家のをさなき子と、舎人が小童と、争をして、出納のゝしれば、出で、取支へんとするに、この出納同じく出でて見るに、寄りて引き放ちて、我が子をば家に入れて、此の舎人が子の髪を取りて、打伏せて死ぬばかり踏む。舎人思ふやう、我が子も人の子も、共に童部争なり。唯ださては有らで、我が子をしも斯く情無く踏むは、いと悪き事なりと腹立たしうて、「眞人は、如何で情無く幼き者を斯くはするぞ」と問へば、出納云ふやう、「おれは何事云ふぞ、舎人だつる。汝ばかりの官人をば、我が打ちたらんに何事の有るべきぞ。我が君大納言殿のおはしませば、いみじき過ちをしたり

とも、何事の出で来べきぞ。痴言云ふ乞兒かな」と云ふに、舎人大きに腹立ちて、「汝は何事云ふぞ。我が主の大納言をがうけに思ふか。おのが主は、我が口に依りて人にもおはするは知らぬか。我が口開けてば、おのが主は人にては有らんや」と云ひければ、出納は腹立ちさして、家に匍ひ入りにけり。此の争を見るると、里隣の人市をなして聞きければ、如何に云ふ事にか有らんと思ひて、或は妻子に語り、或は次ぎ／＼語り散らして、云ひ騒ぎければ、世に廣／＼りて、朝廷まで聞し召して、舎人を召して問はれければ、始めは争ひけれども、我も罪被りぬべくと云ひければ、有りの件の事を申してけり。其後、大納言も囚れなどして、事顯れて後なん流されける。應天門を焼きて、信の大臣に負せて、彼の大臣を罪せさせて、一の大納言なれば、大臣にならんと構へける事の、かへりて我が身罪せられけん、如何にくやしかりけん。

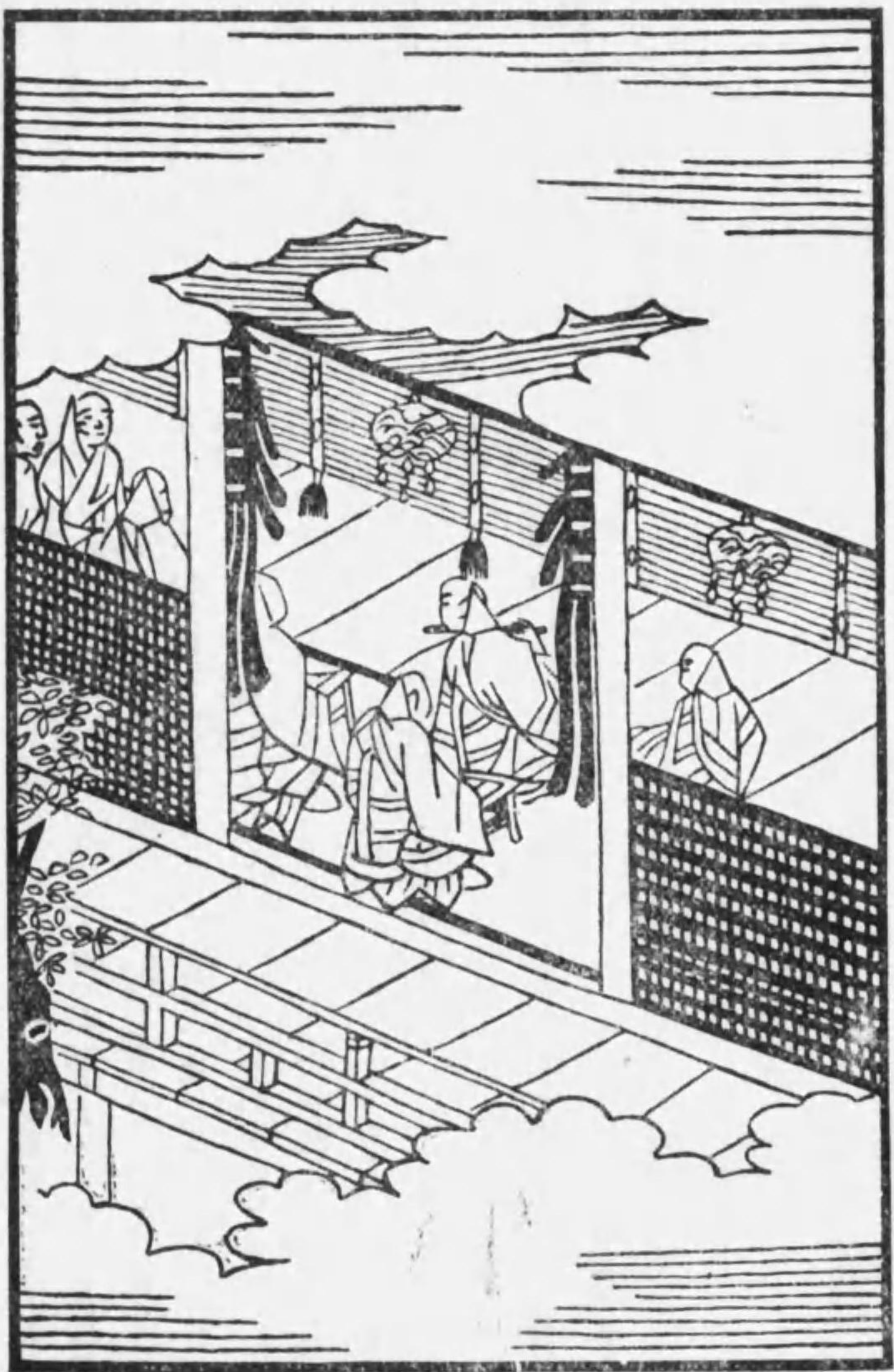
### (二) 放鷹樂明通に是季がならふ事

是れも今は昔、放鷹樂と云ふ樂を、明通已講たゞ一人習ひ傳へたりけり。白河院野の行幸(底本、達ニ誤ル)明後日と云ひけるに、山階寺の三面の僧坊に有りけるが、「今宵は門なさしそ。尋ぬる人有らんものか」と云ひて待ちけるが、案の如く入り來たる人有り。是れを問ふに「是季なり」と云ふ。「放鷹樂習ひにか」と云ひければ、「然なり」と答ふ。即ち坊中に入れて、件の樂を傳へけり。

### (三) 堀河院明通に笛ふかさせ給事

是れも今は昔、堀河院の御時、奈良の僧どもを召して、大般若の御讀經行はれけるに、明通この中に参る。





其時に、主上御笛を遊ばしけるが、やう／＼に調子を替へて吹かせ給ひけるに、明通、調子毎聲に違へずあ  
げければ、主上怪しみ給ひて、此僧を召しければ、明通ひさまづきて庭に候ふ。仰せに依りて、昇りて簀子  
に候ふに、「笛や吹く」と問はせおはしましければ、「かたの如く仕り候ふ」と申しければ、さればこそとて、  
御笛給ひて吹かせられけるに、萬歳樂を、えもいはず吹きたりければ、御感有りて、やがて其笛を給ひてけ  
り。件の笛傳「底本侍トアリ」はりて、今八幡別當幸清が許に有りとか。(件笛幸清進上當今一建保三年也)

(四) 淨藏が八坂坊に強盗入事

是れも今は昔、天曆の頃ほひ、淨藏が八坂の坊に、強盗其の數入り亂れたり。然るに、火を點し、太刀を  
抜き、目を見張りて、各立ち竦みて更にする事無し。斯くて數刻をふ、夜やう／＼明けんとする時、爰に淨  
藏本尊に啓白して、「早く免し遣はすべし」と申しけり。其時に盗人ども、徒らにて逃げ歸りけるとか。

(五) 播磨守佐大夫が事

今は昔、播磨守公行が子に佐大夫とて、五條わたりに在りし者は、此比有る顯宗と云ふ者の父なり。其の佐  
大夫は、阿波守さとなりが供に阿波へ下だりけるに、道にて死にけり。其の佐大夫は、河内前司と云ひし人  
の類にてぞ有りける。其の河内前司が許に、黄班なる牛有りけり。其牛を人の借りて、車掛けて淀へ遣りけ  
るに、樋爪の橋にて、牛飼悪く遣りて、片輪を橋より落したりけるに、引かれて車の橋より下に落ちけるを、  
車の落つると心えて、牛の踏み廣ごりて立てりければ、胸撃かれて、車は落ちて碎けにけり。牛は一つ橋の上



に留まりてぞ有りける。人も乗らぬ車なりければ、傷はるゝ人も無かりけり。えせ牛ならましかば、引かれて落ちて、牛も傷はれまし。いみじき牛の力かなとて、其邊の人云ひ褒めける。斯くて此牛をいたはり飼ふ程に、此牛、如何にして失せたと云ふ事無くて失せにけり。こは如何なる事ぞと、求め騒げど無し。離れて出でたるかとて、近くより遠くまで尋ね求めさすれども、無ければ、いみじかりつる牛を失ひつると歎く程に、河内前司が夢に見るやう、この佐大夫が來たりければ、是れは海に落ち入りて死にけると聞く人は、如何に來たるにかと思ひく／＼出で逢ひたりければ、佐大夫が云ふやう、「我は此の丑寅の隅にあり。其れより日に一度、樋爪の橋の許に罷りて、苦を受へ侍るなり。其れに己れが罪の深くて、身の極めて重く侍れば、乗物の堪へずして、かちより罷るが苦しきに、此の黄斑の御車牛の力の強くて乗りて侍るに、いみじく求めさせ給へば、今五日有りて、六日と申さん巳の時ばかりには返し奉らん。いたくな求め給ひそ」と見て覺めにけり。「斯かる夢をこそ見つれ」と云ひて過ぎぬ。其の夢見つるより六日と云ふ巳の時ばかりに、そゞろに此牛歩み入りたりけるが、いみじく大事したりげにて、苦しげに舌垂れ、汗水にてぞ入りたりける。此の樋爪の橋にて車落ち入り、牛は留まりたりける折なんどに行き合ひて、力強き牛かなと見て、借りて乗りて歩きけるにや有りけん、と思ひけるも恐ろしかりけりと、河内前司語りしなり。

## (六) 吾婦人止三生贖一事

今は昔、山陽道美作國に、中山、高野と申す神おはします。高野は蛇、中山は猿丸にてなんおはする。其

神、年毎の祭に、必ず生贖を奉る。人の女の容貌よく、髪長く色白く、身形をかしげに、姿らうたげなるをぞ、擇び求めて奉りける。昔より今に至るまで、其祭意り侍らず。其れにある人の女、生贖にさし當てられにけり。親ども泣き悲しむ事限りなし。人の親子となることは、前の世の契りなりければ、怪しきをだに疎にやは思ふ。況して萬づにめでたければ、身にも増りて疎かならず思へども、さりとして逃るべからねば、歎きながら月日を過ぐす程に、やう／＼命つゞまるを、親子と逢ひ見ん事、今いくばくならずと思ふに附けて、日を數へて、明暮は唯だ音をのみ泣く。斯かる程に、あづまの人の狩と云ふ事をのみ役として、猪と云ふ物の、腹立ちし「○いノ誤カ」かりたるは、いと恐ろしき物なり。其れをだに何とも思ひたらず、心に任せて殺し取り、食ふ事を役とする者の、いみじう身の力強く、心猛くむくつけき荒武者の、自ら出で來て、其のわたりに立ち廻る程に、此女の父母の許に來にけり。物語する序でに、女の父の云ふやう、「己れが女の唯だ一人侍るをなん、かう／＼の生贖にさし當てられ侍れば、思ひ暮し歎き明してなん、月日を過ぐし侍る。世には斯かる事も侍りけり。前の世に如何なる罪を作りて、此の國に生れて斯かる目を見侍るらん。彼の女子も「心にも有らず、あさましき死にをし侍りなんずるかな」と申す。いと哀れに悲しう侍るなり。さるは、己れが女とも申さじ。いみじう美しくしげに侍るなり」と云へば、東の人「さて其人は、今は死に給ひなんずる人にこそはおはすれ。人は命に勝る事無し。身の爲にこそ神も恐ろしけれ。此の度の生贖を出ださずして、其の女君を自らに預け給ふべし。死に給はんも同じ事にこそおはすれ。如何でか唯だ一人持ち奉り



給へらん御女を、目の前に生きながら臆に作り、切りひろげさせては見給はん、ゆゑしかるべき事なり。さる目見給はんも同じ事なり。唯だ其君を我に預け給へ」と、懇ろに云ひければ、實に目の前に、ゆゑしき様に死なんを見んよりはとて、取らせつ。斯くて東人、此女の許に行きて見れば、容貌姿をかしげなり。愛敬めでたし。物思ひたる姿にて、寄り臥して手習をするに、涙の袖の上に懸かりて濡れたり。斯かる程に、人の氣はひのすれば、髪を顔にふりかゝるを見れば、髪も濡れ顔も涙に洗はれて、思ひ入りたる様なるに、人の來たれば、いと慎しげに思ひたる氣はひして、少し側向きたる姿、誠にらうたげなり。凡そ氣高く品々しう、をかしげなる事、田舎人の子と云ふべからず。東人は是れを見るに、愛なしき事云はん方無し。されば如何にも、我が身無くならばなれ、唯だ是れに代りなんと思ひて、此の女の父母に云ふやう、「思ひ構ふる事こそ侍れ。若し此君の御事に依りて亡びなどし給はば、苦しとや思さるべき」と問へば、「子の爲に、自らは徒らにも成らば成れ、更に苦しからず。生きても何にかはし侍らんずる。唯だ思されんまゝに、如何にも、給へ」と答ふれば、「さらば、此の御祭の御きよめするなり」とて、注連引き廻らして、「如何にも、人な寄せ給ひそ。又是れに自ら侍りと、な人に努々知らせ給ひそ」と云ふ。さて日比籠り居て、此女房と思ひ住む事いみじ。斯かる程に、年比山に使ひ習はしたる犬の、いみじき中に、賢きを二つ撰りて、其れに生きたる猿丸を捕へて、明けくれやく、「やく術カ」と食ひ殺させて習はす。さらぬだに猿丸と犬とは敵なるに、いと斯うのみ習はせば、猿を見ては、跳り懸かりて食ひ殺す事限りなし。さて明けければ、い

らなき太刀を磨き、刀を研ぎ、劔を設けつゝ、唯だ此の妻の君と、談種にするやう、「あはれ、前の世に如何なる契りをして、御命に代りて徒らに成り侍りなんとすらん。されど御代りと思へば、命は更に惜しからず。唯だ別れ聞えなんと思ひ給ふるが、いと心細く哀れなる」など云へば、女も「誠に如何なる人の斯くおはして、思ひものし給ふにか」と云ひ續けられて、悲しう哀れなる事いみじ。さて過ぎ行く程に、其の祭の日に成りて、宮司より始め、萬づの人々こぞり集まりて、迎へに喧騒りきて、新らしき長櫃を、此女の居たる所にさし入れて云ふやう、「例のやうに是れに入れて、其の生贖出だされよ」と云へば、此の東人、「唯だ此度の事は、自らの申さんまゝにし給へ」とて、此櫃に密に入り臥して、左右のそばに、此犬どもを取り入れて云ふやう、「已等、此日比いたはり飼ひつるかひ有りて、此度の我が命に代れ、已れらよ」と云ひて、掻き撫づれば、打うめきて、腋にかいそひて皆伏しぬ。又日比研ぎ磨きつる太刀、刀、皆取り入れつ。さて櫃の蓋をおほひて、布して結ひて封付けて、我が女を入れたるやうに思はせてさし出だしたれば、棒、神、鈴、鏡を振り合はせて、前駆おひ喧騒りて持て参るさまいとみじ。さて女是れを聞くに、我に代りて此男の、斯くしていぬることいと哀れなれと思ふに、又不意に事出で來ば、我が親たち如何におはせんと、かたぐに歎き居たり。されども父母の云ふやうは、「身の爲にこそ神も佛も怖ろしけれ。死ぬる事なれば、今は怖ろしき事も無し。同じ事を、斯くてをなくなりなん、今は亡びんも苦しからず」と云ひ居たり。斯くて生贖を御社に持て参り、神主祝詞いみじく申して、神の御前の戸を開けて、此の長櫃をさし入れて、戸を本



のやうに鎖して、其れより外の方に、宮司を始めて、次々の司ども次第に皆並び居たり。さる程に、この櫃を刀のさきして密に穴を開けて、東人見ければ、誠にえも云はず大きな猿の、長七八尺ばかりなる、顔と尻とは赤くして、むしり綿を著たるやうにいらなく白きが、毛は生ひ上りたるさまにて、横座に居たり。次々の猿ども、左右に二百ばかり並居て、さまざまに顔を赤くなし、眉を上げ、聲々に泣き叫び喧騒る。いと大きなる俎に、長やかなる包丁刀を具して置きたり。めぐりには、酢、酒、鹽入りたる瓶どもなめりに見ゆる數多置きたり。さて暫しばかり有る程に、此の横座に居たるをけ猿寄り來て、長櫃の結緒をときて、蓋を開けんとすれば、次々「一本ニヨリテ補フ」猿ども皆寄らんとする程に、此の男、「犬ども食らへ、おのれ」と云へば、二つの犬跳り出でて、中に大きな猿を食ひて、打ち伏せて引きはりて、食ひ殺さんとする程に、此男髪を亂りて、櫃より跳り出でて、氷のやうなる刀を抜きて、其猿を俎の上に引き伏せて、首に刀を當て、云ふやう、「吾己れが人の命を絶ち、其肉むらを食ひなどするものは斯くぞ有る。己れら「底おのづぎイ本ニ據ル」承れ。確にしやくび切りて、犬に飼ひてん」と云へば、顔を赤く成して、目をしばたたきて、齒を眞白に食ひ出だして、目より血の涙を流して、誠にあさましき顔つきして、手をすり悲しめども、更に許さずして、「己れがそこばくの多くの年比、人の子どもを食ひ、人の種を絶つかはりに、しやくび切りて捨てん事、只今にこそあめれ。己れが身さらば我を殺せ、更に苦しからず」と云ひながら、さすがに首をば頓に切りやらす。さる程に、此二つの犬どもに追はれて、多くの猿ども、皆木の上に逃げ上り、惑ひ騒

ぎ叫び喧騒るに、山も響きて、地もかへりぬべし。斯かる程に、一人の神主に神憑きて云ふやう、「今日より後、更にこの生贄をせじ、長く止どめてん。人を殺す事、懲りとも懲りぬ。命を絶つ事、今より長くし侍らじ。又我を斯くしつとて、此の男とかくし、又今日の生贄に當りつる人のゆかりを、領じ煩はすべからず。あやまりて、其人の子孫の末々に至るまで、我れ守りとならん。唯だ疾くこの度の我が命を乞ひ受けよ。いと悲し、我を助けよ」とのたまへば、宮司神主より始めて、多くの人ども驚きをなして、皆社の内に入りたちて、騒ぎあわて、手を摩りて、「理り自らさぞ侍る。唯だ御神に「にイ无、衍カ」ゆるし給へ。御神もよくぞ仰せらるゝ」と云へども、此の東人「さなゆる「一本すか」されそ。人の命を絶ち殺すものなれば、きやつに物の佗しさ知らせんと思ふなり。我が身こそあなれ。唯だ殺されん「ん、イ本无」苦しからず」と云ひて、更に許さず。斯かる程に、此猿の首は切り放たれぬと見ゆれば、宮司も手まどひして、誠にすべき方無ければ、いみじき誓言どもを立て、祈り申して、「今より後は、斯かる事更にくすべからず」など神も云へば、「さらばよし、今より後は斯かる事なせそ」と言ひ含めてゆるしつ。さて其れより後は、凡て人を生贄にせずなりにけり。さて其男家に歸りて、いみじう男女あひ思ひて、年比の妻夫に成りて過ぐしけり。男はもとより故有りける人の末なりければ、口惜からぬさまにて侍りけり。其後は彼の國に、猪鹿をなん生贄にし侍りけるとぞ。

## (七) 豊前王「底本、主、古本ニヨル」の事



今は昔、柏原の御門の御子の五の御子にて、豊前の大さきと云ふ人有りけり。四位にて、司は刑部卿大和守にてなん有りける。世の事を能く知り、心ばへすなほにて、おほやけの御政をも、善き悪き能く知りて、除目の有らんととも、先づ國の數多あきたる、望む人有るをも、國の程に當てつゝ、「其人は、其國の守にぞなさるらん、其人は道理たて望むとも、えならじ」など、國毎に云ひるたりける事を、人聞きて、除目の朝に、此大君の推しはかり事に云ふ事は、つゆ違はねば、「此大君の、推しはかり除目かしこし」と云ひて、除目の前には、この大君の家に往き集ひてなん「なりぬべし」と云ふ人は、手を摩りて喜び「えならじ」と云ふを聞きつる人と「○と術カ」は「何事云ひをる古大君ぞ。さへの神祭りて狂ふにこそあめれ」など、呟きてなん歸りける。斯くなるべしと云ふ人のならで、不慮に異人成りたるをば、「あしくなされたり」となん、世には誹りける。さればおほやけも、「豊前の大君は、如何が除目をば」誹りける。さればおほやけも豊前の大君は如何が除目をば「○以上二十五字術カ」言ひけるとなん、したしく候ふ人には行きて問へ」となん仰せられける。是れは田村、水尾などの御時になん有りけるにや。

(八) 藏人頓死の事

今は昔、圓融院の御時、内裏焼けにければ、後院「イ本ニヨリテ補フ」になんおはしましける。殿上の臺盤に、人々數多きて物食ひけるに、藏人貞高「○孝カ」、臺「底本「ち」一本ニヨル」盤に額を當て、眠り入りて、斬をするなめりと思ふに、やゝ暫しに成れば、怪しと思ふ程に、臺盤に額を當て、喉をくつく

とくつめくやうに鳴らせば、小野宮大臣殿「○實資」、未だ頭中將にておはしけるが、主殿司に、「其の式部本の寢さまこそ心得ね。其れ起せ」とのたまひければ、主殿司寄りて起すに、竦みたるやうにて動かず。怪しさに掻いさぐりて、「はや死に給ひにたり。いみじきわざかな」と云ふを聞きて、有りと有る殿上人、藏人、物も覺えず物恐ろしかりければ、やがて向きたる方さまに皆走り散る。頭中將、「さりとて有るべき事ならず、是れ諸司の下部召して昇き出でよ」と行ひ給ふ。「何方の陣よりか出だすべき」と申せば、「東の陣より出だすべきなり」との給ふを聞きて、内の人有る限り、東の陣に昇い、「底本「く」一本ニヨル」出で行くを見んとて、集ひ集まりたる程に、たがへて西の陣より、殿上のたゞみながら昇き出でて出でぬれば、人も見ずなりぬ。陣の口昇きいづる程に、父の三「五カ」位來て迎へ取りて去りぬ。「かしこく人々に見あはずなりぬるものかな」となん人々云ひける。さて二十日ばかり有りて、頭中將の夢に、有りしやうにて、いみじう泣きて寄りて物を云ふ。聞けば「いと嬉しく、己れが死の恥を隠させ給ひたる事は、世々に忘れ申すまじ。はかりご底本「う」に誤ル、古本ニヨル」ちて、西より出ださせ給はざらましかば、多くの人に面をこそは見えて、死の恥にて候はましか」とて、泣く／＼手を摩りて喜ぶとなん、夢に見えたりける。

(九) 小槻當平ノ事

今は昔、主計頭小槻當平と云ふ人有りけり。其の子に算博士なるもの有り、名は茂介となん云ひける。主計頭忠臣が父、淡路守大夫史奉親が祖父なり。生きたらば、やんごとなく成りぬべき者なれば、如何でよく



も成りなん、是れが出で立ちなば、主計頭主税頭助大夫史には、異人は軋轢ふべきやうも無かんめり。なりいたはりたる盛りなる上に、才賢く、心ばへもうるせかりければ、六位ながら、世の覚えやうく聞え高く成りもて行けば、無くて有りなんと思ふ人も有るに、此人の家に論しをしたりければ、其の時陰陽師に物を問ふに、いみじく重く慎むべき日どもか「底本」を「古本ニヨル」き出でて、取らせたりければ、其のまゝに門を強く鎖して、物忌して居たるに、敵の人隠れて、陰陽師に死ぬべきわざどもをせさせければ、其の呪咀する陰陽師の云はく、「物忌して居たるは、慎むべき日にこそ有らめ。其日詛ひ合はせばぞ驗し有るべき。されば己れを具して、其家におはして呼び出で給へ。門は物忌ならばよも開けじ。唯だ隙をだに聞きてば、必ず詛ふ驗し有りなん」と云ひければ、陰陽師を具して、其れが家に往きて、門を夥しく叩きければ、下衆出で来て、「誰ぞ、此門叩くは」と云ひければ、某が頼の事にて參れるなり。いみじき堅き物忌なりとも、細目に開けて入れ給へ。大切の事なり」と云はすれば、此の下衆男かへり入りて、「斯くなん」と云へば、「いと理無き事なり。世に有る人の身思はぬやは有る。え入れ奉らじ。更に不用なり。疾く歸り給ひね」と云はすれば、又云ふやう、「さらば門をば開け給はずとも、其遺戸から顔をさし出で給へ。自ら聞えん」と云へば、死ぬべき宿世にや有りけん、「何事ぞ」とて、遺戸から顔をさし出でたりければ、陰陽師其の聲を聞き、顔を見て、すべき限り詛ひつ。此の逢はんと云ふ人は、「いみじき大事云はん」と云ひつれども、云ふべき事も覚えねば、「只今田舎へ罷れば、其由申さんと思ひて參で來つるなり。早や入り給ひ

ね」と云へば、「大事にも有らざりける事により、斯く人を呼び出でて、物も覚えぬ主かな」と云ひて入りぬ。其れよりやがて頭痛く成りて、三日と云ふに死にけり。されば物忌には、聲高くよその人には逢ふまじきなり。かやうに咒咀する人の爲には、其れに付けて斯かるわざをすれば、いと恐ろしき事なり。さて其の咀ひ事せさせし人も、幾程無くて、殃に逢ひて死にけりとぞ。身に負ひけるにや、あさましき事なりとなん人の語りし。

(十) 海賊發心出家の事

今は昔、攝津國に、いみじく老いたる入道の、行ひ打して有りけるが、人の「海賊に逢ひたり」と云ふ物語する序に云ふやう、「我は若かりし折は、誠に裕富くて有りし身なり。著物食物に飽き満ちて、明暮海に浮びて世をば過ぐしなり。淡路の六郎追捕使となん云ひし。其れに安藝の島にて、異舟もことに無かりしに、船一艘近く漕ぎ寄す。見れば、二十五六ばかりの男の清けなるぞ、主と思しくてある。さては若き男二人ばかりにて僅かに見ゆ。さては女どもの善きなど有るべかし。自ら簾の隙より見れば、皮子など數多見ゆ。物はよく積みたるに、はかしくしき人も無くて、唯だこの我が舟につきてありく。屋形の上に、若き僧一人ひて經讀みて有り。下れば同じやうに下り、島へ寄れば同じやうに寄る。泊れば又泊りなどすれば、此舟をえ見も知らぬなりけり。怪しと思ひて、問ひてんと思ひて、「此は如何なる人の、斯く此舟にのみ具しておはするぞ。何處におはする人にか」と問へば、「周防國より急ぐ事有りて罷る。さるべき頼もし



き人も具せねば、恐ろしくて、此の御舟をたのみて、斯くつき申したるなり」と云へば、いと迂愚がましと思ひて、「是れは京に罷るにも有らず、爰に人待つなり。待ち付けて、周防の方へ下らんするは。如何で具しことは有るぞ。京に上らん舟に具してこそおはせめ」と云へば、「さらば明日こそはさも如何にもせめ。今宵は猶御舟に具して有らん」とて、鳥隠れなる所に具して泊りぬ。人々も「只今こそよき時なめれ。いざ此舟移してん」とて、此舟に皆乗る時に、物「底本「お」一本ニヨル」も思えずあきれ惑ひたり。物の有る限り我が舟に取り入「底本「あ」一本ニヨル」れつ。人どもは、皆男女みな海にとり入るゝ間に、主人手をこそくんと摩りて、水精の數珠の緒切れたらんやうなる涙を、はらくとこぼして云はく、「萬づの物は皆取り給へ。唯だ我が命の限りは助け給へ。京に老いたる親の限りに煩らひて、今一度見んと申したれば、夜を晝にてつけにつかはしたれば、急ぎ罷り上るなり」ともえ云ひやらで、我に目を見合せて、手を摩るさまいみじ。「是れ斯くな云はせそ。例の如く疾く」と云ふに、目を見合はせて泣き惑ふさま、いとみじ。哀れに無慙に覺えしかども、さ云ひて如何がせんと思ひなして、海に入れつ。屋形の上に、二十ばかりにて纖弱なる僧の、經袋頸に懸けて夜晝經讀みつるを、取りて海に打入れつ。時に手惑ひして、經袋を取りて水の上に浮びながら、手を捧げて此經を捧げて、浮き出でくする時に、希有の法師の今まで死なぬとて、舟の覆して頭をはたと打ち、背をつき入れなどすれど、浮き出でくしつゝ此經を捧ぐ。怪しと思ひてよく見れば、此僧の水に浮びたるあとまくらに、美しくげなる童の鬘結ひたるが、白き楚を持ちたる二三人ばかり見

ゆ。僧の頭に手を懸け、一人は經を捧けたる腕をとらへたりと見ゆ。傍への者どもに、「あれ見よ、此僧に附きたる童部は何ぞ」と云へば、「何らく、更に人無し」と云ふ。我が目には確に見ゆ。此童部添ひて、あへて海に沈む事無し、浮びて有り。怪しければ見んと思ひて、「是れに取り付きて來」とて、楫をさしやりたれば、取り付きたるを引き寄せたれば、人々「など斯くはするぞ、由無しわざする」と云へど、「さはれ、此僧一人は生けん」とて舟に乗せつ。近くなれば、此童部は見えす。此僧に問ふ、「われは京の人か、何處へおはするぞ」と問へば、「田舎の人に候ふ。法師に成りて、久しく受戒をえ仕らねば、如何で京に上りて受戒せん」と申し、かば、「いざ、我に具して、山に知りたる人の有るに、申し付けてせさせん」と候ひしかば、罷り上りつるなり」と云ふ。「わ僧の頭や腕に取り付きたりつる兒どもは誰ぞ、何ぞ」と問へば、「何時かさる者候ひつる、更に覺えず」と云へば、さて經捧げたりつる腕にも童添ひたりつるは、そもそも何と思ひて、只今死なんとするに、此の經袋をば捧げつるぞ」と問へば、「死なんするは思ひ設けたれば、命は惜しくも有らず。我は死ぬとも、經をしばしが罷も濡らし奉らじ、と思ひて、捧げ奉りしに、腕たゆくも有らず、あまつさへ「底本「あやまりに」一本ニヨル、又一本ハ「あまりに」輕くて、腕も長く成るやうにて、高く捧げられ候ひつれば、御經の驗しところ、死ぬべき心地にも覺え候ひつれ。命生けさせ給はんは、嬉しき事」とて泣くに、此の婆羅門のやうなる心にも、哀れに尊く覺えて、「是れより國へ歸らんとや思ふ。又京に上りて受戒とげんとの心有らば、送らん」と云へば、「更に受戒の心も今は候はず、



唯だ歸り候ひなん」と云へば、是れより返し遣りてんとす。「さて美くしかりつる童部は、何にか斯く見えつる」と語れば、此僧哀れに尊く覺えて、ほろ／＼泣かる。「七つより法華經讀み奉りて、日比も異事無く、物の恐ろしきまゝにも讀み奉りたれば、十羅刹のおはしましけるにこそ」と云ふに、此の波羅門のやうなる者の心に、さは佛經はめでたく尊くおはしますものなりけりと思ひて、此の僧に具して、山寺などへ往なんと思ふ心付きぬ。さて此僧と二人具して、糞少しを具して、残りの者どもは知らず、皆此人々に預けて行けば、人々「物に狂ふか、こは如何に。俄の道心世に有らじ、物の憑きたるか」とて、制し止むれども、聞かで、弓、箠、太刀、刀も皆捨て、此僧に具して、是れが師の山寺なる所に往きて、法師に成りて、其處にて經一部讀み參らせて、行ひ歩りくなり。かゝる罪をのみ造りしが、無慙に覺えて、此男の手を摩りて、はらく／＼と泣き惑ひしを、海に入れしより、少し道心起りにき。其れにいとゞ、此僧に十羅刹の添ひておはしましけると思ふに、法華經の愛でたく讀み奉らま欲しく覺えて、俄にかく成りて有るなり」と語り侍りけり。

## 宇治拾遺物語 卷第十一

## (一) あをつねの事

今は昔、村上の御時、古き宮の御子にて、左京大夫なる人おはしけり。長すこし細高にて、いみじう貴やかなる姿はしたれども、襟體なども迂愚なりけり。頭はしき様ぞしたりける。頭の鍔頭なりければ、纒は背にもつかず、離れてぞ振られける。色は「イ本「露草の」アリ」花をぬりたるやうに青白にて、匪窪く、鼻のあざやかに高く赤し。唇薄くて色も無く、笑めば齒がちなるものゝ、齒肉赤くて、鬚も赤くて長かりけり。聲は鼻聲にて高くて、物云へば一内響きて聞えける。歩めば身を振り、肩を振りてぞ歩りきける。色のせめて青かりければ、青常の君とぞ殿上の君達は付けて笑ひける。若き人達の起居に付けて、安からず笑ひ喧騒りければ、帝聞し召し餘りて、「此をのこどもの、是れを斯く笑ふ便なき事なり。父の御子聞かば、制せずとて、我を怨みざらんや」など仰せられて、眞實やかに誠み給へば、殿上の人々したなきをして、皆笑ふまじき由云ひ合へりけり。さて云ひ合へるやう「斯く誠めば、今より永く起請す。若し斯く起請して後、青常の君と呼びたらん者をば、酒菓物など取り出ださせて、贖ひせん」と云ひ固めて、起請して後いくばくも無くて、堀河殿の殿上人「三字イ本「兼通の大臣の中將」ニ作ル」にておはしけるが、あうなく立ちて行き後手を見て、忘れて「あの青常丸はいづち行くぞ」との給ひてけり。殿上人ども「斯く起請を破りつるは、





いと便無き事なり」とて、「云ひ定めたるやうに、速かに酒菓物取りに遣りて、此の事贖へ」と、集まりて責め暗騒りければ、争ひて、せじとすまひけれど、實やかにく責めければ、「さらば明後日ばかり、青常の君贖ひせん、殿上人藏人、其日集り給へ」と云ひて出で給ひぬ。其日に成りて、堀河中將殿の、青常の君の贖ひすべしとて、参らぬ人無し。殿上人居並びて待つ程に、堀河中將直衣姿にて、形は光るやうなる人の、香はえも云はず香ばしく、愛敬こぼれにこぼれて参り給へり。直衣の長やかに愛でたき裾より、青き打ちたる出袖いだしほして、指貫も青色の指貫を著たり。隨身三人に青き狩衣袴着せて、一人には、青く色どりたる折敷に、青磁の皿に彌猴桃いんげんを盛りて捧げたり。今一人は、竹の枝に、「青、校本アリ」山鳩やまとらを四つ五つばかり付けて持たせたり。又一人には、青磁の瓶に酒を入れて、青き薄葉うすはにて口を包みたり。殿上の前に持ち續きて出でたれば、殿上人ども見て、諍聲しやうせいに笑ひ響む事おびたし。御門開かせ給ひて、「何事ぞ、殿上に夥く聞ゆるは」と問はせ給へば、女房、「兼通が青常よびて候へば、其の事に依りて、男どもに責められて、其罪贖ひ候ふを笑ひ候ふなり」と申しければ、「如何やうに贖ふぞ」とて、日の御座みまに出でさせ給ひて、小部より覗かせ給ひければ、我より始めて、ひた青なる装束にて、青き食物どもを持たせて贖ひければ、是れを笑ふなりけりと御覽じて、え腹立たせ給はで、いみじう笑はせ給ひけり。其後は、眞實まことやかに誠まことむ人も無かりければ、いよくなん笑ひ嘲りける。

(二) 保輔盗人たる事



今は昔、丹後守保昌が弟に、兵衛尉にて冠賜はりて、保輔と云ふ者有りけり。盗人の長にてぞ有りける。家は姊小路の南、高倉の東に居たりけり。家の奥に藏を造りて、下を深う井のやうに掘りて、太刀、鞍、鎧、甲、絹、布など、萬づの寶物を呼び入れて、「云ふまゝに買ひて、價を取らせよ」と云ひて、「奥の藏の方へ具して行け」と云ひければ、價賜はらんとて行きたるを、藏の内へ呼び入れつゝ、掘りたる穴へ突き入れ突き入れして、持て來たる物をば取りけり。此保輔に、物もて入りたる者の、歸り行く無し。此事を、物賣り怪しう思へども、埋み殺しぬれば、此事を云ふ者無かりけり。是れならず、京中おし歩き、盗みをして過ぎけり。此事おろ／＼聞えたりけれども、如何なりけんにか、捕へ搦めらるゝ事も無くてぞ過ぎにける。

## (三) 晴明を心みる僧の事付晴明殺し蛙事

昔、晴明が土御門の家に、老いしらみたる老僧來たりぬ。十歳ばかりなる童部二人具したり。晴明「何ぞの人にておはするぞ」と問へば、「播磨國の者にて候ふ。陰陽師をならはん心ざしにて候ふ。此道に殊に勝れておはします由を承りて、少々ならひ參らせんとて、參りたるなり」と云へば、晴明が思ふやう、此法師は賢き者にこそ有るめれ。我を心みんとて來たる者なり。其れに悪ろく見えては悪ろかるべし。此法師少し引きまさぐらんと思ひて、供なる童は、式神を使ひて來たるなめりかし。式神ならば召し隠せと心の中に念じて、袖の内にて印を結びて、密かに呪を稱ふ。さて法師に云ふやう、「疾く歸り給ひね。後によき日して、習はんとたまはん事どもは教へ奉らん」と云へば、法師「あら尊と」と云ひて、手を摩りて額に當てゝ立ち走りぬ。今はいぬらんと思ふに、法師とまりて、さるべき所々、車宿など覗き歩ききて、又前に寄り來て云ふやう、「此供に候ひつる童の、二人ながら失せて候ふ。其れ給はりて歸らん」と云へば、晴明、「御坊は希有の事云ふ御坊かな。晴明は何の故に、人の供ならん者をば取らんずるぞ」と云へり。法師の云ふやう、「更にあが君、大きな理りに「イ本アリ」候ふ。然りながら唯だ許し給はらん」と佗びければ、「よしよし、御坊の人の心みんとて、式神使ひてくるに「校本アリ」と、やすからぬ「五字、底本「うらやましき」トアリ、イ本ニヨル」事に覺えつるが。こと人をこそさやうには心み給はめ。晴明をば如何でさる事し給ふべき」と云ひて、物讀むやうにして暫しばかり有りければ、外の方より童二人ながら走り入りて、法師の前に出で來ければ、其の折法師の申すやう、「實に心み申しつるなり。使ふ事は安く候ふ。人の使ひたるを隠す事は、更にかなふべからず候ふ。今より偏に御弟子に成りて候はん」と云ひて、懷より名簿ひき出でて取らせけり。

此の晴明、ある時廣澤僧正の御坊に參りて、物申しうけ給はりける間、若き僧どもの晴明に云ふやう、「式神を使ひ給ふなるは、忽ちに人をば殺し給ふや」と云ひければ、「安くはえ殺さじ、刀を入れて殺してん」と云ふ。「さて蟲などをば、少しの事せんにも必ず殺しつべし。さて生くるやうを知らねば、罪をえつべければ、さやうの事由無し」と云ふ程に、庭に蛙の出で來て、五つ六つばかり躍りて、池の方さまへ行きけるを「あれ一つさらば殺し給へ、心みん」と、僧の云ひければ、「罪をつくり給ふ御坊かな。されども心み給



へば、殺して見せ奉らん」とて、草の葉を摘み切りて、物を讀むやうにして、蛙の方へ投げ遣りければ、其の草の葉の蛙の上に懸かりければ、蛙眞平に拉げて死にたりけり。是れを見て、僧どもの色髪りて、恐ろしと思ひけり。家の中に人無きをりは、此式神を遣ひけるにや、人も無きに、葦を上げ下ろし、門を鎖しなどしけり。

## (四) 河内守頼信平忠恆をせむる事

昔、河内守頼信、上野守にて有りし時、坂東に平忠恆と云ふ兵有りき。仰せらるゝ事、なきが如くにする討たんとて、多くの軍おこして、彼れが住家の方へ行き向ふに、入海の遙かにさし入りたる向ひに、家を造りて居たり。此人海を廻るものならば、七八日にめぐるべし。直に渡らば、其日の中に攻めつべければ、忠恆渡の舟どもを皆取り隠してけり。されば渡るべきやうも無し。濱はたに打立ちて、此濱のまゝに廻るべきにこそ有な「一本ニヨル」れと、兵「底本、云ニ誤ル、一本ニヨル」ども思ひたるに、上野守の云ふやう、「此海のまゝに廻」底本「思」一本ニヨル」りて寄せば、日比經なん。其の間ににげもし、又寄せられぬ構もせられなん。今日の内に寄せて攻めんこそ、あの奴は存外にして、あわて惑はんずれ。しかるに舟どもは皆取り隠したる、如何がはずべき」と、軍どもに問はれけるに、軍ども「更に渡し給ふべきやう無し、廻りてこそ寄せさせ給ふべく候へ」と申しければ、「此軍どもの中に、さりとて此道知りたる者は有らん。頼信は、坂東方は此度こそ始めて見れ。されども、我が家の傳へにて聞き置きたる事有り。此海の

中には、堤のやうにて廣さ一丈ばかりして、直に渡りたる道有るなり。深さは馬の太腹に立つと聞く。此程にこそ、其道は當りたるらめ。さりとて此多くの軍どもの中に、知りたるも有らん。さらば先きに立ちて渡せ、頼信續きて渡さん」とて、馬を掻き早めて寄りければ、知りたる者にや有りけん、四五騎ばかり、馬を海に打おろして直渡りに渡りければ、其れに續きて、五六百騎ばかりの軍どもも渡しけり。誠に馬の太腹に立ちて渡る。多くの兵どもの中に、唯だ三人ばかりぞ此道は知りたりける。残りはずも知らざりけり。聞く事だにも無かりけり。しかるに此守殿、此國をば是れこそ始めにておはするに、我には、是れの重代の者どもにて有るに、聞きだにもせず知らぬに、斯く知り給へるは、實に人に勝れたる兵の道かなと、皆私語やき怖て、渡り給ふ程に、忠恆は、海を廻りてぞ寄せ給はんずらん。舟は皆取り隠したれば、淺路をば我ばかりこそ知りたれ。直にはえ渡り給はじ。濱を廻り給はん間には、とかくもし逃げもしてん。さう無くはえ攻め給はじと思ひて、心靜かに軍揃へて居たるに、家のめぐりなる郎等、周章て走り來て云はく、「上野殿は、此海の中に淺き道の候ひけるより、多くの軍を引具して、既に此處へ來給ひぬ。如何がせさせ給はん」と、戰慄き聲に周章て云ひければ、忠恆かねての支度に違ひて、「我れ既に攻められなんす。かやうにしたて奉らん」と云ひて、忽ちに名簿を書きて、文挾に挟みてさし上げて、小船に郎等一人乗せて持たせて、迎へて參らせたりければ、守殿見て、彼の名簿を受け取らせて云はく、「かやうに名簿に意文を添へて出だす、既に來たれるなり。されば、あながちに攻むべきに有らず」とて、此文を取りて、馬を引き返し



ければ、軍ども皆歸りけり。此後より、いと守殿をば、「殊に勝れて、いみじき人におはします」と、いよく云はれ給ひけり。

## (五) 白河法皇北面受領の下りのまねの事

是れも今は昔、白河法皇、鳥羽殿におはしましける時、北面の者どもに、受領の國へ下るまねせさせて御覽有るべしとて、玄蕃頭久孝と云ふ者をなして、衣冠にきぬ出だして、其外の五位どもをば前証せさせ、衛府どもをば籠負にして御覽有るべしとて、各、錦、唐綾を着て劣らじとしけるに、左衛門尉源行遠、心殊に出で立ちて、人にかねて見えなば目馴れぬべしとて、御前近かりける人の家に入り居て、従者を呼びて、「やうれ、御前の邊にて見て來」と見て參らせてけり。無期に見えざりければ、如何に斯うは遅きにかと、辰の時とこそ催しは有りしか。下ると云ふ定、午未の時には渡らんずらん者をと思ひて待ち居たるに、門の方に聲して、「哀れ、ゆゑしかりつるものかな」と云へども、唯だ參る者を云ふらんと思ふ程に、「玄蕃殿の國司委こそをかしかりつれ」と云ふ。「藤左衛門殿は錦を著給ひつ。源兵衛殿は、禮物をして金の文を着けて」など語る。怪しう覺えて、「やうれ」と呼べば、此の見て來とて遣りつる男、笑みて出で來て、「大方斯ばかりの見物候はず。加茂祭も物にても候はず。院の御棧敷の方へ渡し合ひ給ひたりつる様は、目も及び候はず」と云ふ。「さて如何に」と云へば、「早う果て候ひぬ」と云ふ。「こは如何に、來ては告げぬぞ」と云へば、「こは如何なる事にか候ふらん、『參りて見て來』と仰せ候へば、目もたゞかす能く見て候ふぞかは許りてけるとか。

## (六) 藏人得業猿澤池ノ龍の事

是れも今は昔、奈良に藏人得業惠印と云ふ僧あり。鼻大きにて赤かりければ、大鼻の藏人得業と云ひけるを、後ざまには言な「イ本ニテ補フ」しとて、鼻藏人とぞ云ひける、猶後々には鼻藏々々とのみ云ひけり。其れが若かりける時に、猿澤の池のはたに、「其月の其日、此池より龍昇らんずるなり」と云ふ簡を立てけるを、往來の者、若き老いたるさるべき人々「ゆかしき事かな」と私語めき合ひたり。此鼻藏人、をかしき事かな。我がしたる事を、人々騒ぎ合ひたり。迂愚の事かなと、心の中にをかしく思へども、すかしふせんとて、そら知らずして過ぎ行く程に、其月になりぬ。大方大和、河内、和泉、攝津國の者まで、聞き傳へて集ひ合ひたり。惠印、如何に斯くは集る。何か有らんやうの有るにこそ。怪しき事かなと思へども、然り氣なくて過ぎ行く程に、既に其日に成りぬれば、道もさり敢へず薙き集る。其時に成りて、此惠印思ふやう、尋常ごとにも有らじ。我がしたる事なれども、やうの有るにこそと思ひければ、此事さも有らんずらん、行きて見んと思ひて、頭包みて行く。大方近う寄り付くべきにも有らず。興福寺の南大門の壇の上に昇り立ちて、今や龍の登るか／＼と待たれども、何の登らんぞ、日も入りぬ。暗々に成りて、さりとは



斯くて有るべきならねば、歸りける道に、一つ橋に目くらが渡り逢ひたりけるを、この惠印、「あな、あぶなの目くらや」と云ひたりけるを、目くら取りも敢へず、「有らじ、鼻くらなより」と云ひたりける。此の惠印を鼻藏と云ふとも知らざりけれども、目くらと云ふに付きて、「有らじ、鼻くらなり」と云ひたるが、鼻藏に云ひ合はせたるが、をかしき事の一つなりとか。

## (七) 清水寺御帳給はる女の事

今は昔、便無かりける女の、清水にあながちに參る有りけり。年月積りけれども、つゆばかり其驗と覺えたる事無く、いと便無く成りまさりて、はては年比有りける所をも、其事と無くあくがれて、寄り付く所も無かりけるまゝに、泣く／＼觀音を恨み申して、「如何なる前世の報いなりとも、唯だ少しの便り給ひ候はん」と、いりもみ申して、御前に俯伏し／＼たりける夜の夢に、御前よりとて「斯くあながちに申せば、いとほしく思し召せど、少しにても有るべき便りの無ければ、其事を思し召し歎くなり。是れを給はれ」とて、御帳の帷をいとよく熨みて、前に打置かると見て、夢覺めて御燈の光に見れば、夢の如く御帳の帷たまれて、前に有るを見るに、さは是れより外に賜ふべき物の無きにこそ有んなれと思ふに、身の程の思ひ知られて、悲しくて申すやう、「是れ更に給はらじ。少しの便りも候はず、錦をも御帳には縫ひて參らせんとこそ思ひ候ふに、此御帳ばかりを給はりて、罷り出づべきやうも候はず、返し參らせ候ひなん」と申し、夫ふせぎの内にさし入れて置きぬ。又微睡み入りたる夢に、「何と賢しくは有るぞ。唯だ賜ばん物をば

給はらで、斯く返し參らする、怪しき事なり」とて、又給はると見る。さて覺めたるに、又同じやうに前に有れば、泣く／＼返し參らせつ。斯やうにしつゝ、三「底本しニ誤ル、イ本ニヨル」度返し奉るに、猶又返し賜びて、果ての度は、此の度返し奉らんは、無禮「底本むくい、くハラノ訛」なるべきよしを誡められければ、斯かるとも知らざらん寺僧は、御帳の帷を盗みたとや疑はんずらんと思ふも苦しければ、をだ夜深く懷に入れて罷り出でにけり。是れを如何にとすべきならんと思ひて、引き廣げて見て、著るべき衣も無きに、さは是れを衣にして著んと思ふ心付きぬ。是れを衣にして著て後、見と見る男にも有れ女にも有れ、哀れにいとほしき者に思はれて、そぞろなる人の手より物を多く得てけり。大事なる人の愁訴をも、其の衣を著て、知らぬやんごとなき所にも參りて申させければ、必ず成りけり。斯やうにしつゝ、人の手より物を得、善き男にも思はれて、楽しくてぞ有りける。されば其の衣をばをさめて、必ず先途と思ふ事の折にぞ取り出でて著ける。必ず悔ひけり。

## (八) 則光盗人をきる事

今は昔、駿河前司橋季通が父に、陸奥前司則光と云ふ人有りけり。兵家には有らねども、人に所「心一本」おかれ、力などぞいみじう強かりける。世の覺えなど有りけり。若くて衛府の藏人にぞ「一本て」有りける時、殿居所より女の許へ行くとして、太刀ばかりを佩きて、小舎人童を唯だ一人具して、大宮を下りに往きければ、大牆の内に人の立てる氣色のしければ、恐ろしと思ひて過ぎける程に、八九日の夜更けて、月は西



山に近く成りたれば、西の大塙の内は陰にて、人の立てらんも見えぬに、大塙の方より聲ばかりして、「あの過ぐる人罷り止まれ。公達のおはしますぞ。え過ぎじ」と云ひければ、さればこそと思ひて、すゞどく歩みて過ぐるを、「己は、さては罷りなんや」とて、走り懸かりて物の來ければ、俯きて見るに、弓の影は見えず、太刀の燭々として見えければ、木には有らざりけりと思ひて、掻い伏して逃ぐるを、追ひ付きて來れば、頭打割られぬと覺ゆれば、俄に傍らさまにふと寄りたれば、追ふ物の走り早まりて、え止まり敢へず先きに出でたれば、少したて、太刀を抜きて打ちければ、頭を中より打割りたりければ、俯しに走り轉びぬ。能うしつ。「底本ニ誤ル、イ本ニヨル」と思ふ程に「あれは、如何にしつるぞ」と云ひて、又物の走り懸かり來れば、太刀をもえ差し敢へず、脇に挟みて逃ぐるを、「けやけき奴かな」と云ひて、走り懸かりて來るもの、初めのよりは走りの疾く覺えければ、是れはよも有りつるやうには謀られじと思ひて、俄に居たりければ、走り早まりたる者にて、我に蹴躓つきて俯しに倒れたりけるを、ちがひて立ち懸かりて起し立てず、頭を又打割りてけり。今は斯くと思ふ程に、三人有りければ、今一人が「さてはえやらじ。けやけくしてい奴かな」とて、執念く走り懸かりて來ければ、此度は我は過たれなんぞ。神佛助け給へと念じて、太刀を鋒の様に取りなして、走り早まりたる者に、俄にふと立ち向ひければ、はる「らカ」／＼と合せて走り當りにけり。やつも切りけれども、餘りに近く走り當りてければ、きぬだに切れざりけり。鋒のやうに持ちたりける太刀なりければ、受けられて中より通りたりけるを、太刀の束を返しければ、のけさまに倒れたりけるを

切りてければ、太刀持ちたる腕を、肩より打落してけり。さて走りのきて、又人やあると聞きけれども、人の音もせざりければ、走りまひて中御門の門より入りて、柱にかい添ひて立ちて、小舎人童は如何しつらんと待ちければ、童は大宮を上ぼりに、泣く／＼往きけるを呼びければ、喜びて走り來にけり。殿居所にやりて、著替取り寄せて著替へて、もと著たりける上のきぬ、指貫には血の着きたりければ、童して深く隠させて、童の口能く固めて、太刀に血のつきたる洗ひなどしたためて、殿居所にさり氣なく入りて臥しにけり。終夜我がしたるなど聞えや有らんずらんと、胸打騒ぎて思ふ程に、夜明けて後、物ども云ひ騒ぐ。「大宮、大炊御門の邊に、大きな男三人、幾程もへだてず切り伏せたる、あさましく使ひたる太刀かな。互に切り合ひて死にたるかと思れば、同じ太刀の使ひざまなり。敵のしたりけるにや。されど盗人と思しき様ぞしたる」など云ひ喧騒るを、殿上人ども、「いざ、行きて見て來ん」とて、誘ひて行けば、行かじばやと思へども、いかざらんもまた心得られぬ様なれば、澁々にいぬ。車に乗りこぼれて、遣り寄せて見れば、未だともかくもしなきで置きたりけるに、年四十餘りばかりなる男の鬚鬚なるが、無文の袴に、紺の洗ひ晒の襖き、山吹のきぬの衫よく晒されたる著たるが、猪の逆類。「底本さやつかニ誤ル、今昔物語ニヨル。の尻鞆したる太刀佩きて、申の皮の足袋に沓き履きなして、わきをかきおよびをさして、と向き斯う向き物云ふ男立てり。何男にかと見る程に、雑色の寄り來て、「あの男の、盗人かたきに逢ひて、仕うまつりたると申す」と云ひければ、嬉しくも云ふなる男かなと思ふ程に、車の前に乗りたる殿上人の、「かの男召し寄せよ、



子細間はん」と云へば、韃色走り寄りて召しもて來たり。見れば、たかづら髯にて、頤そり鼻さがりたり。赤鬚なる男の血目に見なし、片膝つきて太刀の柄に手を懸けて居たり。「如何なりつる事ぞ」と問へば、「此夜中ばかりに物へ罷るとて、こゝを罷り過ぎつる程に、物の三人「おれは、まさに過ぎなんや」とて、走り續きて參うで來つるを、盗人なめりと思ひ給へて、合へ競べ伏せて候ふなり。今朝見れば、なにがしを便「底本「み」ニ作ル、イ本ニヨル」なしと思ひ給ふべき奴ばらにて候ひければ、敵にて仕りたりけるなめりと思ひ給ふれば、しや頭どもを斬つて、斯く候ふなり」と、立ちぬ居ぬ指をさしなど、語り居れば、人々「さてさて」と云ひて問ひ聞けば、いとど狂ふやうにして語り居る。其の時にぞ人に譲りえて、面ももたげられて見ける。氣しきや著からんと、人知れず思ひたりけれど、我れと名告る者の出で來たりければ、其れに譲りてやみにしと、老「底本思ひニ誤ル、一本ニヨル」いて後に子どもにぞ語りける。

## (九) 空入水したる僧の事

是れも今は昔、桂川に身投げけんずる聖とて、先づ祇陀林寺にして百日讖法行ひければ、近き遠き者ども、道もさり敢へず拜みに行きちがふ。女房車など隙なし。見れば三十餘りばかりなる僧の、細やかなる、目をも人に見合せず、眠り目にて、時々阿彌陀佛を申す。其の間は肩ばかり働くは、念佛なめりと見ゆ。又時時、そこに息を放つやうにして、集ひたる者どもの顔を見渡せば、其の目に見合せんと集ひたる者ども、こちおしあちおし、薙めき合ひたり。さて既に、其日のつとめては堂へ入りて、さきさき入りたる僧ども

多く歩み續きたり。後に雜役車に、此の僧は紙の衣、袈裟など著て乗りたり。何と云ふにか肩働く。人にも見合せずして、時々大息をぞ放つ。行く道に立ち並みたる見物の者ども、打撒きを雲の降るやうになげちらす「底本。なが道すニ誤ル、一本ニヨル」。道すがら「五字技本アリ」聖「いかにかく目鼻に入る、堪へ難し。心ざし有らば紙袋などに入れて、我が居たる所へ送れ」と、時々云ふ。是れを無下の者は、手を摩りて拜む。少し物の心有る者は、「など斯うは此の聖は云ふぞ。只今水に入りなんずるに、祇陀林へやれ、目鼻に入り堪へ難しなど云ふこそ怪しけれ」など私語めく者も有り。さて遣りもて行きて、七條の末に遣り出だしたれば、京よりは勝りて、入水の聖拜まんとて、河原の石よりも多く人集ひたり。河ばたへ車やり寄せて立てれば、聖「只今は何時ぞ」と云ふ。供なる僧ども、「申の下だりになり候ひにたり」と云ふ。「往生の刻限には未だしかんなるは、今少し暮せ」と云ふ。待ち兼ねて「遠くより來たる者は歸りなどして、河原人少なに成りぬ。是れを見はてんと思ひたる者は、猶立てり。其れが中に僧の有るが、「往生には刻限やは定むべき。心得ぬ事かな」と云ふ。とかく云ふ程に、此聖たふさぎにて、西に向ひて、河にさぶりと入る程に、眩なる繩に足を懸けて、つぶりと入らで薙く程に、弟子の聖はづしたれば、倒まに入りてごぶくんとするを、男の川へおり下りて、能く見んとて立てるが、此聖の手を取りて引き上げたれば、左右の手して顔拂ひて、含みたる水を吐き捨てて、此引き上げたる男に向ひて、手を摩りて、「廣大の御恩義さぶらひぬ。この御恩は極樂にて申し候はん」と云ひて、陸へ走り上るを、そこら集まりたる者ども、童部、河原の石を取



りて、撒きかくるやうに打つ。はだかなる法師の河原くだりに走るを、集ひたる者ども、受け取りく打ちければ、頭打ち割られにけり。此法師にや有りけん、大和より瓜を人の許へやりける文の表書に、「よきの入水の上人」と書きたりけるとか。

(十) 日藏上人吉野山にて鬼にあふ事

昔、吉野山の日藏の君、吉野の奥に行ひ歩りき給ひけるに、長七尺ばかりの鬼、身の色は紺青の色にて、髪は火の如くに赤く、頸細く、胸骨は殊にさし出でて苛めき、腹ふくれて脛は細く有りけるが、此の行人に逢ひて、手を束ねて泣く事限り無し。「是れは何事する鬼ぞ」と問へば、此の鬼涙にむせびながら申すやう、「我は、此の四五百年を過ぎての昔人にて候ひしが、人の爲に怨みを残して、今は斯かる鬼の身と成りて候ふ。さて其の敵をば、思ひの如くに取り殺してき。其れが子、孫、曾孫、玄孫に至るまで、残り無く取り殺し果て、今は殺すべき者無く成りぬ。されば猶彼等が生れ代りまかる後までも知りて、取り殺さんと思ひ候ふに、次々の生れ所つゆも知らねば、取り殺すべきやう無し。嗔恚の焰は同じやうに燃ゆれども、敵の子孫は絶え果てたり。我れ一人盡きせぬ嗔恚の焰に燃えこがれて、せん方なき苦みをのみ受け侍り。斯かる心を起さざらましかば、極樂天上にも生れなまし。殊に怨みを留めて斯かる身と成りて、無量億劫の苦を受けんとする事の、せんかたなく悲しく候ふ。人の爲に怨みを残すは、しかしながら我が身の爲にてこそ有りけれ。敵の子孫は盡き果てぬ。我が命は極りも無し。かねて此のやうを知らましかば、斯かる怨みをば残さ





らまし」と云ひ續けて、涙を流して泣く事限り無し。其の間に、上より焔やうく燃え出でけり。さて山の奥さまへ歩み入りけり。さて日藏の君哀れと思ひて、其れが爲に、さまざまの罪亡ぶべき事どもをし給ひけるとぞ。

(十一) 丹後守保昌下向の時致經が父ニ逢ふ事

是れも今は昔、丹後守保昌國へ下りける時、與佐の山に白髪の武士一騎逢ひたり。路の傍らなる木の下に入りて立ちたりけるを、國司の郎等ども、「この翁、など馬より下りざるぞ。奇怪なり。咎め下ろすべし」と云ふ。爰に國司の云はく、「一人當千の馬の立てやうなり。尋常には有らぬ人ぞ。咎むべからず」と制して、打過ぐる程に、三町ばかり行きて、大矢の左衛門尉致經、數多の兵を具して逢へり。國司會釋する間、致經が云はく、「爰に老者一人逢ひ奉りて候ひつらん。致經が父平五大夫に候ふ。堅固の田舎人にて子細を知らず、無禮を現じ候ひつらん」と云ふ。致經過ぎて後、「さればこそ」とぞ云ひけるとか。

(十二) 出家功德の事

是れも今は昔、筑紫にたうさかの道祖と申す齋の神ぞ「底本もニ誤ル、一本ニヨル」まします。其の祠に、修行しける僧の宿りて寝たりける夜、夜中ばかりには成りぬらんと思ふ程に、馬の足音數多して、人の過ぐると聞く程に、「齋はましますか」と問ふ聲す。此宿りたる僧怪しと聞く程に、此祠の内より「侍り」と答ふなり。又あさましと聞けば、「明日、武藏寺にや參り給ふ」と問ふなれば、「さも侍らず。何事の侍るぞ」と

と答ふ。一明日、武藏寺に新佛出で給ふべしとて、梵天帝釋、諸天龍神、集まり給ふとは知り給はぬか」と云ふなれば、「然る事も承らざりけり。嬉しく告げ給へるかな。如何でか參らでは侍らん。必ず參らんず」と云へば、「さらば明日の巳時ばかりの事なり。必ず參り給へ。待ち申さん」とて過ぎぬ。此僧是れを聞きて、希有の事をも聞きつるかな。明日は物へ行かんと思ひつれども、此事見てこそ何處も行かめと思ひて、明くるや遅きと武藏寺に參りて見れども、さる氣色も無し。例よりは、なか／＼靜かに人も見えす。有るや有らんと思ひて、佛の御前に候ひて、巳時を待ち居たる程に、今暫し有らば午時に成りなんぞ、如何なる事にかと思ひ居たる程に、年七十餘りばかりなる翁の、髪もはげて、白きとてもおろ／＼有る頭に、袋の烏帽子をひき入れて、尤も小さきが、いとゞ腰屈りたる杖に縋りて歩む。尻に尻立てり。小さく黒き桶に、何にか有るらん物入れてひきさげたり。御堂に參りて、男は佛の御前にて額二三度ばかりつきて、木鱗子の念珠の、大きに長き押揉みて候へば、尼其の持たる小桶を翁の傍らに置きて、「御房呼び奉らん」といぬ。暫しばかり有れば、六十ばかりなる僧參りて、佛拜み奉りて、「何せんに呼び給ふぞ」と問へば、「今日明日とも知らぬ身にまかり成りにたれば、此白髪の少し残りたるを剃りて、御弟子に成らんと思ふなり」と云へば、僧目おしすりて、「いと尊き事かな。さらば疾く」とて、小桶なりつるは湯なりけり。其湯にて頭洗らひて剃りて戒授けつれば、又佛拜み奉りて罷り出でぬ。其後又こと事無し。さは此翁の法師になるを驚喜して、天衆も集まり給ひて、新佛の出でさせ給ふとは有るにこそ有りけれ。出家隨分の功德とは、今に始めた



る事には有らねども、況して若く盛りならん人のよく道心おこして、随分にせん者の功德、是れにていよいよ推し量られたり。

宇治拾遺物語 卷第十二

(一) 達磨見三天竺僧行二事

昔天竺に一寺有り。住僧尤も多し。達磨和尚此寺に入りて、僧どもの行ひを覗ひ見給ふに、或房には念佛し經を讀み、さまざまに行ふ。或房を見給ふに、八九十ばかりなる老僧の、唯だ一人居て圍碁を打つ。佛も無く經も見えず、唯だ圍碁を打つ外は他事無し。達磨、件の房を出で、他の僧に問ふに、答へて云はく、「此老僧一人、若きより圍碁の外はする事無し。凡て佛法の名をだに聞かず。仍りて寺僧憎みいやしみて、交會すること無し。空しく僧供を受く。外道の如く思へり」と云々。和尚是れを聞きて、定めてやう有らんと思ひて、此老僧が傍らに居て、圍碁うつ有様を見れば、一人は立てり、一人は居たりと見るに、忽然として失せぬ。怪しく思ふ程に、立てる僧は歸り居たりと見る程に、又居る(○衍カ)たる僧失せぬ。見れば又出で來ぬ。さればこそと思ひて、「圍碁の外他事無しとうけ給はるに、證果の上人にこそおはしけれ。其の故を問ひ奉らん」とのたまふに、老僧答へて云はく、「年來、此事より外は他事無し。但し黒勝つ時は我が煩惱勝ちぬと悲しみ、白勝つ時は、甚勝ちぬと喜ぶ。打つに隨ひて煩惱の黒を失ひ、其の白の勝たん事を思ふ。この功德に依りて、證果の身と成り侍るなり」と云ふ。和尚房を出で、他の僧に語り給ひければ、年來僧みいやしみつる人々、後悔して皆貴みけりとなん。



(一) 提婆菩薩參龍樹菩薩許事

昔、西天竺に龍樹りゆうじゆと申す上人まします。智惠ちゑ甚深じんしんなり。又中天竺に提婆だいばと申す上人、龍樹の智惠深き由を聞き給ひて、西天竺に行き向ひて、門外に立ちて案内を申さんとし給ふ所に、御弟子外より來給ひて、「如何なる人にてましますぞ」と問ふ。提婆答へ給ふやう、「大師の智惠深くまします由承りて、嶮難を凌ぎて、中天竺より遙々参りたり。此由申すべき」由のたまふ。御弟子龍樹に申しければ、小箱に水を入れて出ださる。提婆心得給ひて、衣の襟えまより針はりを一つ取り出だして、此水に入れて返し奉る。是れを見て、龍樹大きに驚きて、「早く入れ奉れ」とて、房中を掃はらひ清めて入れ奉り給ふ。御弟子怪しみ思ふやう、水を與へ給ふ事は、遠國より遙々と來たり給へば、疲つかれ給ふらん、喉潤のどうるはさんためと心得たれば、此人針を入れて返し給ふに、大師驚き給ひて、敬うやまつひ給ふ事心得ざる事かなと思ひて、後に大師に問ひ申しければ、答へ給ふやう、「水を與へつるは、我が智惠は小箱の内の水の如し。しかるに、汝萬里を凌しのぎて來たる。智惠を浮べよとて水を與へつるなり。上人そらに其の心を知りて、針を水に入れて返す事は、我が針ばかりの智惠を以て、汝が大海の底を極めんとなり。汝等年來隨逐ずいじゆくすれども、此心を知らずして是れを問ふ。上人は始めて來たれども我が心を知る。是れ智惠の有ると無きとなり云々。」即ち瓶水びんすいをうつす如く法文を習ひ傳へ給ひて、中天竺に歸り給ひけりとなん。

(三) 慈惠僧正延引受戒之日事





慈惠僧正良源（永觀三年正月二日入滅。七十三歳。近江國人也）座主の時、受戒行ふべき定日例の如く催し儲けて、座主の出仕を相待つの所に、途中より俄かに歸り給へば、供の者ども、こは如何にと心得がたく思ひけり。衆徒諸職人も、「是れ程の大事、日の定まりたる事を、今となりてさしたる障も無きに、延引せしめ給ふ事、然かるべからず」と、諍する事限りなし。諸國の沙彌等まで、盡く參り集まりて、受戒すべき由思ひたる所に、横川小綱よこがわこつなを使にて、「今日の受戒は延引なり。重ねたる催しに隨ひて行はるべきなり。」と仰せ下しければ、「何事に依りて止め給ふぞ」と問ふ。使また全く其故を知らず、「唯だ早く走り向ひて、此由を申せとばかりのたまひつるぞ」と云ふ。集れる人々、各心得ず思ひて皆退散しぬ。斯かる程に、未の時ばかりに大風吹きて、南門俄に倒れぬ。其時人々、此事有るべしとかねて悟りて、延引せられけると思ひ合はせけり。受戒行はれましかば、そこばくの人々「四十四字校本ニヨリテ補ス、イ本ハ「そこばくの人々」ナシ」皆うち殺されなましと感あはれしりけり。

## (四) 内記上人破法師陰陽師紙冠事

内記上人寂心じやくしんと云ふ人有りけり。道心堅固の人なり。堂を造り塔を建つる、最上の善根なりとて勸進せられけり。材木をば、播磨國に行きて取られけり。此處に法師陰陽師、紙冠かみかんを着てはかむるを見付けて、あわてて馬より下りて走り寄りて、「何わざし給ふ御房ぞ」と問へば、「破し候ふなり」と云ふ。「何しに紙冠をばしたるぞ」と問へば、「破戸はらどの神達は、法師をば忌み給へば、破する程、暫くして侍るなり」と云ふに、上

人聲を上げて大きに泣きて、陰陽師に取り懸かれれば、陽陰師心得ず仰天して、破をしさして「是れは如何に」と云ふ。破せさする人もあきれて居たり。上人冠を取りて、引き破りて、泣く事限りなし。「如何に知りて、御房は佛弟子と成りて、破戸の神達にくみ給ふと云ひて、如來の忌事を破りて、しばしも無間地獄むげんじやくの業をば作り給ふぞ。誠に悲しき事なり。唯だ寂心を殺せ」と云ひて、取り付きて泣く事夥し。陰陽師の云はく、「仰せらるゝ事尤も道理なり。世の過ぎ難ければ、さりとてはとて、斯くの如く仕るなり。然らずば何業をしてかは、妻子をば養ひ、我が命をも續ぎ侍らん。道心無ければ上人にも成らず、法師の形かたちに侍れど、俗人の如くなれば、後世の事如何がと悲しく侍れど、世の習慣なづかひにて侍れば、斯やうに侍るなり」と云ふ。上人の云ふやう、「其れはさも有れ、如何が三世如來の御首みづかぶに冠をば著給ふ。不幸に堪へずして斯やうの事し給はば、堂造らん料に勸進し集めたる物どもを、汝になん與ふ。一人暮ひとりぼに勸むれば、堂寺造るに勝りたる功德なり。」と云ひて、弟子どもを遣はして、材木取らんとて、勸進し集めたる物を、皆運び寄せて、この陰陽師に取らせつ、さて我身は京に上り給ひにけり。

## (五) 持經者叡實効驗事

昔、閑院大臣殿（冬嗣）三位中將におはしける時、瘧病ちちらみを重く煩ひ給ひけるが、「神名と云ふ所に、叡實と云ふ持經者なん、瘧病はよく行じ「祈りイ本、下同ジ」落し給ふ」と申す人有りければ、この持經者に行ぜんとて行き給ふに、荒見川の程にて早うおこり給ひぬ。寺は近く成りければ、是れより歸るべきやう無しと



て、念じて神名におはして、房の簷に車を寄せて、案内を云ひ入れ給ふに、「近比蒜を食ひ侍り」と申す。然れども「唯だ上人を見奉らん。只今まかり歸る事協ひ侍らじ」と有りければ、「さらば、早入り給へ」とて、房の扉おろし立てたるを取りて、新らしき筵敷きて、「入り給へ」と申しければ入り給ひぬ。持經者沐浴して、とばかり有りて出で逢ひぬ。長高き僧の瘦せさらばひて、見るに尊けなり。僧申すやう、「風重く侍るに、醫師の申すに従がひて、蒜を食ひて候ふなり。其れに斯やうに御座候へば、如何でかはとて参りて候ふなり。法華經は、淨不淨を嫌はぬ經にてましませば讀み奉らん。何條ことか候はん」とて、念珠を押し摺りて、そばへ寄り來たる程、尤も頼もし。御頸に手を入れて、我が膝を枕にせさせ申して、壽量品を打出だして、讀む聲はいと尊し。然ばかり貴き事も有りけりと覺ゆ。少「一本ニテ補フ」鐵枯て、高聲に誦する聲誠に哀れなり。持經者、目より大きな涙をはらくと落して、泣く事限りなし。其時覺めて、御心地いと爽かに、残り無くよくなり給ひぬ。返すく後世まで契りて歸り給ひぬ。其れよりぞ、有驗の名は高く廣まりけるとか。

(六) 穴也上人、臂觀音院僧正祈り直事

昔、空也上人申すべき事有りて、一條「○左脱カ」大臣殿「○實經」に参りて、藏人所に上りて居たり。餘慶僧正又參會し給ふ。物語などし給ふ程に、僧正の給ふ、「其臂は、如何にして折り給へるぞ」と、上人の云はく、「我が母物妬して、幼少の時、片手を取りて投げ侍りし程に、折りて侍るとぞ聞き侍りし。幼稚

の時の事なれば覺え侍らす。かしこく左にて侍る。右手折り侍らましかば」と云ふ。僧正のたまはく、「そこは貴き上人にておはす。天皇の御子とこそ人は申せ。いと忝なし。御臂誠に祈り直し申さんは如何に。」上人云はく、「尤も悦び侍るべし。實に尊く侍りなん。此の加持し給へ」とて近く寄れば、殿中の人々集まりて是れを見る。其の時僧正、頂より黒けふりを出だして加持し給ふに、暫く有りて、曲れる臂はたと鳴りて伸びぬ。即ち右の臂の如くに伸びたり。上人涙を落して三度禮拜す。見る人皆喧呼めき感じ、或は泣きけり。其の日上人、供に若き聖三人具したり。一人は繩を取り集むる聖なり。道に落ちたる古き繩を拾ひて、壁土に加へて、古堂の破れたる壁を塗る事をす。一人は瓜の皮を取り集めて、水に洗ひて獄家に與へけり。一人は反古の落ち散りたるを拾ひ集めて、紙に漉きて經を書寫し奉る。其の反古の聖を、臂直りたる布施に僧正に奉りければ、悦びて弟子に成して、義觀と名づけ給ふ。有難かりける事なり。

(七) 増賀上人參三條宮、振舞の事

昔多武峰に、増賀上人とて貴き聖おはしけり。極めて心武うきびしくおはしけり。偏に名利を厭ひて、頗る物ぐるはしくなんわざと振舞ひ給ひけり。三條大后の宮、尼に成らせ給はんとて、戒師の爲に召しに遣はされければ、「尤も尊きことなり。増賀こそは誠になし奉らめ」とて参りけり。弟子ども、此の御使を願つて、打ち給ひなんどやせんずらんと思ふに、思ひの外に心安く参り給へば、有難き事に思ひ合へり。斯くて宮に参りたる由申しければ、悦びて召し入れ給ひ給て、尼に成り給ふに、上達部、僧ども多く参り集まり、内裏よ



り御使など参りたるに、此の上人は、目は恐ろしげなるが、體も貴げながら、煩はしげになんおはしける。さて御前に召し入れて、御几帳のもとに参りて、出家の作法して、めでたく長き御髮を掻き出だして、此の上人に髪ませらる。御簾中に女房達見て、泣く事限りなし。剪み果て、出でなんとする時、上人高聲に云ふやう、増賀をしも強ちに召すは何事ぞ、心得られ候はず。若し陰莖物を、大きなりと聞し召したるか。人のよりは大きに候へども、今は練衣のやうにくたくと成りたるものを」と云ふに、御簾の内近く候ふ女房たち、外には公卿、殿上人、僧達、是れを聞くにあさましく、目口はだかりて覺ゆ。宮の御心地も更なり、尊さも皆失せて、各身より汗あえて、我にも有らぬ心地す。さて上人罷り出でなんとて、袖かき合はせて、「年まかりよりて風重くなりて、今は唯だ痢病のみつかまつれば、参るまじく候ひつるを、わざと召し候ひつれば、相稱へて候ひつる、堪へ難く成りて候へば、急ぎ罷り出で候ふなり」とて、出でざまに、西の對の簀子に躑居て尻をかゝけて、椽の口より水を出だすやうに、ひりちらす音高く、臭き事限りなし。御前まで聞ゆ。若き殿上人笑ひ喧騒る事おびただし。僧達は、「斯かる物狂を召したる事」と謗り申しけり。斯やうに事に觸れて、物狂にわざと振舞ひけれど、其れに付けても、貴き覺えはいよ／＼まさりけり。

## (八) 聖寶僧正渡二一條大路事

昔東大寺に、上座法師のいみじく富裕き有りけり。つゆばかりも人に物與ふる事をせず、慳貪に罪深く見えければ、其の時聖寶僧正の、若き僧にておはしけるが、此の上座の物を「校本ニアリ」しむ罪のあさましき

にとて、わざと争ひをせられけり。「御房、何事したらんに、大家に僧供ひかん」と云ひければ、上座思「底本鬼ニ誤ル、一本ニヨル」ふやう、物争ひして若し負けたらんに、僧供ひかんも由無し。さりながら衆中にて斯く云ふ事を、何とも答へざらんも口惜しと思ひて、彼れがえすまじき事を思ひめぐらして云ふやう、「加茂祭の日、眞裸にて鬢禪ばかりをして、干鯨太刀に佩きて、搜せたる女牛に乗りて、一條大路を大宮より河原まで、「我は東大寺の聖寶なり」と、高く名告りて渡り給へ。然らば、此の御寺の大家より下部に至るまで、大僧供ひかむ」と云ふ。心中にさりともよもせじと思ひければ、固くあらがふ。聖寶、大家皆催し集めて、大佛の御前にて、鐘打ちて佛に申して去りぬ。其の期近くなりて、一條富小路に棧敷うちて、聖寶が渡らん見んとて、大家皆集まりぬ。上座も有りけり。暫らく有りて、大路の見物の者ども、夥しく喧騒る。何事か有らんと思ひて、頭さし出だして西の方を見やれば、牝牛に乗りたる法師の裸なるが、干鯨を太刀に佩きて、牛の尻をはた／＼と打ちて、尻に百千の童部つきて、「東大寺の聖寶こそ、上座と争ひして渡れ」と高く云ひけり。其年の祭には、是れを證にてぞ有りける。さて大家各寺に歸りて、上座に大僧供ひかせたりけり。此事御門聞し召して、「聖寶は我が身を捨て、人を導く者にこそ有りけれ。今の世に、如何で斯かる貴き人有りけん」とて、召し出だして、僧正まで成しあげさせ給ひけり。上の醍醐は此の僧正の建立なり。

## (九) 穀斷、聖不實露顯事

昔、久しく行ふ上人有りけり。五穀を斷ちて年來に成りぬ。御門聞し召して、神泉に崇め据ゑて、殊に貴



み給ふ。木の葉をのみ食ひける。物笑する若公達集まりて、此聖の心みんとて行き向ひて見るに、いと尊げに見ゆれば、「穀斷幾年ばかりになり給ふ」と問はれければ、「若きより斷ち侍れば、五十餘年に罷り成りぬ」と云ふを聞きて、一人の殿上人の云はく、「穀斷の尿は如何やうにか有るらん。例の人には變りたるらん。いで行きて見ん」と云へば、二三人連れて行きて見れば、穀屎を多く糞り置きたり。怪しと思ひて、上人の出でたるひまに、居たる下を見んと云ひて、疊の下を引きあけて見れば、土を少し掘りて、布袋に米を入れて置きたり。公達見て、手を叩ききて、「穀糞聖々々」と呼はりて、喧騒り笑ひければ、逃げ去りにけり。其後は行きがたも知らず、長く失せにけりとなん。

(十) 季直少將歌の事

今は昔、季直少將と云ふ人有りけり。病づきて後少し癒りて、内に参りたりけり。公忠の辨の掃部助にて、藏人なりける比の事なり。「亂り心地、またよくも癒り侍らねども、心え「因もと」なくて参り侍りつる、後は知らねど、斯くまで侍れば、明後日ばかりに又参り侍らん。よきに申させ給へ」とて罷り出でぬ。三日ばかり有りて、少將のもとより、

悔しくぞ後に逢はんと契りける今日を限りと云はましものを

さて其日亡せにけり。哀れなる事のさまなり。

(十一) 樵夫、小童隱題、歌讀事

今は昔、隱題をいみじく興せさせ給ひける御門の、篋策を詠ませられけるに、人々悪ろく詠みたりけるに、木伐る童の、曉山へ行くとして云ひける、「此の比篋策を詠ませさせ給ふなるを、人のえ詠み給はさんなる、童こそ詠みたれ」と云ひければ、具して行く童部、「あな、負氣なき事な云ひそ。さまにも似ずいまくし」と云ひければ、「何どか、必ずさまに似ることか」とて、

めぐり来る春々毎に櫻花いくたびちりき人に問はばや

と云ひたりける、標にも似ず思ひがけずぞ。

(十二) 高忠、侍歌讀事

今は昔、高忠と云ひける越前守の時に、いみじく不幸なりける侍の、夜晝信實なるが、多なれど帷子をなん著たりける。雪のいみじく降る日、「侍歌詠め。をかしう降る雪かな」と云へば、此侍、「何を題にて仕るべきぞ」と申せば、「裸なる由を詠め」と云ふに、程も無く震ふ膝をさへ上げて詠みあく、

裸なる我身に懸かる白雪は打拂へども消えせざりけり

と詠みければ、守いみじく褒めて、著たりける衣を脱ぎて取らす。北の方も哀れがりて、薄色の衣のいみじう香ばしきを取らせたりければ、二つながら取りて、掻い縮みて脇に挟みて立ち去りぬ。侍に行きたれば、居並みたる侍ども見て、驚き怪しがりて問ひけるに、斯くと聞きてあさましがりけり。さて此侍、其後見えざりければ、怪しがりて守尋ねさせければ、北山に尊き聖有りけり。其處へ行き、此得たる衣を二つなが



ら取らせて云ひけるやう、「年まかり老いぬる身の不幸、年おひてまさる。此の生の事は益も無き身に候ふめり。後生をだに如何でか覺えて、法師に罷り成らんと思ひ侍れど、戒の師に奉るべき物の候はねば、今に過ごし候ひつるに、斯く思ひがけぬ物を給ひたれば、限り無く嬉しく思ひ給へて、是れを布施に參らするなり」とて「法師になさせ給へ」と、涙に噫返りて、泣く／＼云ひければ、聖いみじう尊がりて、法師に成してけり。さてそこより行く方も無くて失せにけり。有り所も知らずなりにけるとか。

(十三) つらゆきうたの事

今は昔、貫之が土佐守になりて、下りて有りける程に、任はての年、七つ八つばかりの子の、えも云はずをかしげなるを、限りなく愛しうしけるが、とかく煩らひて亡せにければ、泣き惑ひて、病づくばかり思ひこがる、程に、月比に成りぬれば、斯くてのみ有るべき事かは、上りなんと思ふに。兒の此處にて、何と有りしはやなど思ひ出でられて、いみじう悲しかりければ、柱に書き付けける。

都へと思ふに付けて悲しきは歸らぬ人の有ればなりけり  
と書き付けたりける歌なん、今まで有りける。

(十四) あづま人歌の事

今は昔、東人の歌いみじう好みけるが、螢を見て、

あなてり「るイ本」や虫のしや尻に火のつきてこ人玉とも見えわたるぞ「団かな」

東人のやうに詠まんとて、實は貫之が詠みたりけるとぞ。

(十五) 河原院に融公ノ靈住ノ事

今は昔、河原院は融の左大臣の家なり。陸奥の鹽籠の形を造りて、潮汲み寄せて、鹽を焼かせなど、さまざまのをかしき事を盡して住み給ひける。大臣亡せて後、宇多院には奉りたるなり。延喜の御門、度々行幸有りけり。まだ院の住ませ給ひけるをりに、夜中ばかりに、西の對の塗籠を開けて、そよめきて人の參るやうに思されければ、見させ給へば、日の装束麗はしくしたる人の、太刀佩き笏取りて、「二間ばかり退きて畏まりて居たり。「あれは誰ぞ」と問はせ給へば、「此處の主候翁なり」と申す。「融の大臣か」と問はせ給へば、「しかに候ふ」と申す。「さはなんぞ」と仰せらるれば、「家なれば住み候ふに、おはしますか忝く、所狭く候ふなり。如何が仕るべからん」と申せば「其れは、いと／＼ことやうの事なり。故大臣の子孫の、我に取らせたれば住むにこそ有れ。我がおし取りて居たらばこそ有らめ。禮も知らず、如何に斯くは恨むるぞ」と、高やかに仰せられければ、極い消つやうに失せぬ。其折の人々、「猶帝は、かた「はたイ本」ことにおはしますものなり。尋常の人は其の大臣に逢ひて、さやうにすくよかには云ひてんや」とぞ云ひける。

(十六) 八歳の童孔子、問答の事

今は昔、もろこしに孔子道を行き給ふに、八つばかりなる童逢ひぬ。孔子に問ひ申すやう、「日の入る所と洛陽と、いづれか遠き」と。孔子答へ給ふやう、「日の入る所は遠し。洛陽は近し。」童の申すやう、「日の



出で入る所は見ゆ。洛陽はまだ見ず。されば日の出づる所は近し、洛陽は遠しと思ふ」と申しければ、孔子賢き童なりと感じ給ひける。孔子には、斯く物問ひかくる人も無きに、「斯く問ひかくる人も無きに」(○)以上十二字衍」斯く問ひけるは、尋常者には有らぬなりけりとぞ人云ひける。

## (十七) 鄭大尉事

今は昔、親に孝する者有りけり。朝夕に木を伐りて親を養ふ。孝養の心空に知られぬ。梶も無き舟に乗りて向ひの島に行くに、朝には南の風吹きて北の島に吹き付けつ。夕には又舟に木を伐りて入れて居たれば、北の風吹きて家に吹き付けつ。斯くの如くする程に、年比になりて、朝廷に聞し召して、大臣に成して召しつかはる。其の名を鄭大尉とぞ云ひける。

## (十八) 貧俗觀佛性富事

今は昔、もろこしの邊州に一人の男有り、家貧しくして財無し。妻子を養ふに力無し。求むれども得る事無し。斯くて年月をふ。思ひわびて、或僧に逢ひて、財を得べき事を問ふ。智恵有る僧にて、答ふるやう、「汝財を得んと思はば、唯だ誠の心を起すべし。然らば財も豊かに、後世は善き所に生れなん」と云ふ。此人「誠の心とは如何が」と問へば、僧の云はく、「誠の心を起すと云ふは、他の事に有らず、佛法を信するなり」と云ふに、又問ひて云はく、「其れは如何に、慥に承りて、心を得て頼み思ひて、二なく信をなし頼み申さん。承るべし」と云へば、僧の云はく、「我が心は是れ佛なり、我が心を離れては佛無しと。然かれば

我が心の裏に佛はいますなり」と云へば、手を摩りて泣く／＼拜みて、其れより此事を心に懸けて、夜晝思ひければ、梵釋諸天來たりて守り給ひければ、はからざるに財出で来て、家の内豊かになりぬ。命終るに、いよく心佛を念じ入りて、淨土に速かに参りてけり。此事を聞き見る人、尊み憐みけるとなん。

## (十九) 宗行、郎等射虎事

今は昔、壹岐守宗行が郎等を、はかなき事に依りて、主の殺さんとしければ、小舟に乗りて逃げて、新羅國へ渡りて隠れて居たりける程に、新羅の金海と云ふ所の、いみじう喧騒り騒ぐ。「何事ぞ」と問へば、「虎の國府に入りて、人を食らふなり」と云ふ。此男問ふ、「虎は幾つばかり有るぞ」と、「唯だ一つ有るが俄に出で来て、人を食ひて逃げて往き／＼するなり」と云ふを聞きて、此男の云ふやう、「あの虎に逢ひて、一矢を射て死なばや。虎かしこくば共にこそ死なめ。唯だ空しうは如何でか食らは「底本さ、今校本ニヨル」れん。此國の人は、兵の道悪ろきにこそは有めれ」と云ひけるを、人聞きて、國の守に「かう／＼の事をこそ、此日本人申せ」と云ひければ、「かしこき事かな。呼べ」と云へば、人來て「召し有り」と云へば参りぬ。「誠にや、此虎の人食ふを、安く射んとは申すなり」と問はれければ、「然か申し候ひぬ」と答ふ。守「如何でかかる事をば申すぞ」と問へば、此男の申すやう、「此國の人は、我が身をば全くして、敵をば害せんと思ひたれば、鬪氣にて、かやうの猛き獸などには、我身の損せられぬべければ、罷り合はぬにこそ候ふめれ。日本の人は、如何にも我身をば失きに成して罷り合へば、善き事も候ふめり。弓矢に携らん者、なにし



かは我が身を思はん事は候はん」と申しければ、守、「さて虎をば必ず射殺してんや」と云ひければ、「我が身の生き生かすは知らず、必ず彼れをば射取り侍りなん」と申せば、「いといみじうかしこき事かな。さらば必ず構へて射よ。いみじき喜びせん」と云へば、男申すやう、「さて何處に候ふぞ。人をば如何やうにて食ひ侍るぞ」と申せば、守の云はく、「如何なる折にか有らん、國府の中に入り來て、一人一人を頭をくらひて、肩に打懸けて去るなり」と、此男申すやう、「さて如何にしてか喰ひ候ふ」と問へば、「人の云ふやう、虎は先づ人を食はんとては、猫の鼠を覘ふやうに平伏して、暫しばかり有りて、大口をあきて飛び懸かり、頭をくひて、肩に打懸けて走り去る」と云ふ。「とてもかくても、さばれ、一矢射てこそは食らはれ侍らめ。其虎の有り所を教へよ」と云へば、「是れより西に、三十四町のきて麻の島有り、其れになん臥すなり。人怖ぢて、敢へて其の邊に行かず」と云ふ。「己れ唯だ知り侍らずとも、そなたをさして罷らん」と云ひて、調度負ひて往ぬ。新羅の人々、「日本の人ははかなし。虎に食はれなん」と、集まりてそしりけり。「二字一本ニヨル」。かくて此男は、虎の有り所聞きて、行きて見れば、實に島遙々と生ひ渡りたり。麻の長四尺ばかりなり。其の中を分け行きて見れば、實に虎臥したり。尖り矢を矧げて、片膝を立てゝゐたり。虎人の香を嗅ぎて、突い平がりて、猫の鼠を覘ふやうにて有るを、男、矢を矧げて、音もせて居たれば、虎大口をあきて、跳りて男の上にかゝるを、男、弓を強く引きて、上にかゝる折に、やがて矢を放ちたれば、頤の下より項に、七八寸ばかり尖り矢を射出だしつ。虎倒まに伏して、仆れてあかくを、雁股を番ひ

二たび腹を射る。二度ながら土に射付けて、遂に殺して、矢をも抜かて國府に歸りて、守にかうく射殺しつる由云ふに、守感じ喧騒りて、多くの人を具して、虎の許へ行きて見れば、眞實に箭三つながら射通されたり。見るにいとみじ。誠に百千の虎おこりて懸かるとも、日本の人十人ばかり、馬にて押向ひて射ば、虎何わざをかせん。此國の人は、一尺ばかりの矢に、雖のやうなる鎌をすけて、其れに毒を塗りて射れば、遂には其の毒の故に死ぬれども、忽ちに其の庭に射伏する事はえせず。日本人は、我が命死なんをもつゆ惜しまず、大きな矢にて射れば、其の庭に射殺しつ。なほ兵の道は、日本の人には當るべくも有らず。さればいよ／＼いみじう、恐ろしく覺ゆる國なりとて怖けり。さて此男をば、猶惜しみ留めていたはりけれど、妻子を戀ひて筑紫に歸りて、宗行が許に行きて、其の由を語りければ、日本の面目おこしたる者なりとて、勘當も許してけり。多くの物ども縁に得たりける、**を**「一本アリ」宗行にも取らす。多くの商人ども、新羅の人の云ふを聞き語りければ、筑紫にも、此國の人の兵は、いみじき者にぞしけるとか。

(二十) 遣唐使の子被食虎事

今は昔、遣唐使にて唐土に渡りける人の、十ばかりなる子を、え見では有るまじかりければ、具して渡りぬ。さて過ぐしける程に、雪のいと高く降りたりける日、歩きもせて居たりけるに、此兒の遊びに出でて往ぬるが、遅く歸らざりければ、怪しと思ひて出で、見れば、足がた後の方から踏みて行きたるに添ひて、大きな犬の足蹟有りて、其れより此兒の足蹟見えす。山さまに行きたるを見て、是れは虎の食ひて往きける



なめりと思ふに、せん方なく悲しくて、太刀を抜きて、足蹟を尋ねて山の方に行きて見れば、岩屋の口に、此兒を食ひ殺して、腹をねぶりに伏せり。太刀を持ちて走り寄れば、え逃げても往かて、搦り屈まりて居たるを、太刀にて頭を打てば、鯉の頭を割るやうに割れぬ。次に又、側ざまに食はんとて走り寄る背中を打てば、背骨を打切りて、くたくとなしつ。さて子をば、死にたれども、脇にかいばさみて家に歸りたれば、其國の人々見て、怖あざむ事限りなし。唐土の人は、虎に逢ひて逃ぐる事だに難きに、かく虎をば打ち殺して、子を取り返して來たれば、唐土の人はいみじき事に云ひて、なほ日本の國には、兵の方は雙無き國なりと感でけれど、子死にければ何にかはせん。

## (二十一) 或上達部中將之時逢召人二事

今は昔、上達部のまだ中將と申しける、内へ参り給ふ道に、法師を捕へて率て往きけるを、「こは何法師ぞ」と問はせければ、「年比使はれて候ふ主を殺して候ふ者なり」と云ひければ、「誠に罪重き業したる者にこそ。心憂き業しける者かな」と、何となく打云ひて過ぎ給ひけるに、此法師赤きまなこなる目の、ゆゝしく悪しげなるして睨み上げたりければ、由無き事をも云ひてけるかなと、氣疎く覺し召して過ぎ給ひけるに、又男を擲めて往きけるに、「是は何事したる者ぞ」と、懲りずまに問ひければ、「人の家に追ひ入れられて候ひつる、男は逃げて罷りぬれば、是れを捕へて罷るなり」と云ひければ、別の事も無き者にこそとて「イ本ニアリ」、其の捕へたる人を見知りたれば、乞ひ許してやり給ふ。大方この心ざまして、人の悲しきめを見

るに従ひて助け給ひける人にて、初めの法師も、事善ろしくは乞ひ許さんとて問ひ給ひけるに、罪の殊の外に重ければ、さのたまひけるを、法師は安からず思ひける。さて程無く大赦の有りければ、法師も許りにけり。さて月明かりける夜、皆人はまかで、あるは寝入りなどしけるを、この中將、月にめで佇み給ひける程に、物の築地を越えて下りけると見給ふ程に、後より掻きすくひて、飛ぶやうにして出でぬ。あきれ惑ひて、如何にも思し分かぬ程に、恐ろしげなる者來集ひて、遙かなる山の嶮しく恐ろしき所へ率て行きて、柴の編みたるやうなる物を、高く造りたるにさし置きて、「さかしらする人は斯くぞする、安き事は「も一本」偏に罪重く云ひ成して、悲しき目を見せしかば、其の答に又り殺さんずるぞ」とて、火を山の如く焚きければ、夢などを見る心地して、若く纖弱なる程にては有り、物覺え給はず。熱さは唯だあつになりて、たゞ片時に死ぬべく覺え給ひけるに、山の上よりゆゝしき鎗矢を射おこせければ、有る者ども、こは如何にと騒ぎける程に、雨の降るやうに射ければ、是れら暫しこの方よりも射けれど、あなたには人の數多く、え射合ふべくも無かりけるにや、火の行方も知らず、射散らされて逃げていにけり。其折男一人出で来て、「如何に怖ろしく思し召しつらん。己れは、其月の其日搦められて罷りしを、御徳に免されて、よに嬉しく、此の御恩報い参らせばやと思ひ候ひつるに、法師の事は悪しく仰せられたりとて、日比伺ひ参らせつるを見て候ふ程に、告げ参らせやばと思ひながら、我が身斯くて候へばと思ひつる程に、あからさまに「一本はアリ」と立ち離れ参らせ候ひつる程に「一本候はず」、斯く候ひつれば、築地を越えて出で候ひつるに、逢ひ参ら



せて候ひつれども、其處にて取り參らせ候はゞ、殿も御斑などもや候はんずらんと思ひて、爰にて斯く射拂ひて、取り參らせ候ひつるなり」とて、其れより馬に掻き乗せ申して、確にもとの所へ送り申してんげり。ほのくくと明るる程にぞ歸り給ひける。年おとなになり給ひて、「斯かる事にこそ逢ひたりしか」と、人に語り給ひけるなり。四條大納言の事と申すは誠やらん。

## (二十二) 陽成院妖物の事

今は昔、陽成院下居させ給ひての御所は、大宮よりは北、西洞院よりは西、油小路よりは東にてなん有りける。イ本「そこは靈すむ所にてなんありける」ノ十五字アリ」大きな池の有りける釣殿に、番の者寝たりければ、夜中ばかりに、細々とある手にて、此男が顔をそとく撫でけり。けむつかしと思ひて、太刀を抜きて片手にて攫みたりければ、淺黄の上下著たる叟の、殊の外に物佗しげなるが云ふやう、「我は是れ昔住みし主なり。浦島が子が弟なり。いにしへより此の所に住みて、千二百餘年になるなり。願はくは免し給へ。此處に社を建て、齋ひ給へ。さらば如何にも守り奉らん」と云ひけるを、「我が心一つにては協はじ。此由を院へ申してこそは」と云ひければ、憎き男の云ひごとかなとて、三度上さまへ蹴あげ蹴あげして、萎えくくたくくと成して、落つる所を口をあきて食ひたりけり。並ての人程なる男と見る程に、夥く大きになりて、此男を一口に食ひてけり。

## (二十三) 水無瀬殿むさ、びの事

後鳥羽院の御時、水無瀬殿に、夜々山より傘程の物の、光りて御堂へ飛び入る事侍りけり。西面北面の者ども、面々に是れを見顯はして高名せんと、心に懸けて用心し侍りけれども、空しくてのみ過ぎけるに、或夜景かた、只一人中島に寢て待ちけるに、例の光物、山より池の上を飛び行きけるに、起きんも心も無く、仰に寝ながら能く引きて射たりければ、手懸へして池へ落ち入る物有りけり。其の後人々に告げて、火を點して面々見ければ、ゆゑしく大きな鬮鼠の、年ふり毛なども禿げ、しぶとげなるにてぞ侍りける。

## (二十四) 一條、棧敷屋鬼の事

今は昔、一條、棧敷屋に或男とまりて、傾城と臥したりけるに、夜中ばかりに、風吹き雨降りてすさまじかりけるに、大路に諸行無常と詠じて過ぐる者有り。何者ならんと思ひて、葎を少しおしあけて見ければ、長は軒と等くて、馬の頭なる鬼なりけり。おそろしさに、葎をかけて奥の方へ入りたれば、此鬼格子押し開けて、顔を差し入れて、「能く御覽じつるな御覽じつるな」と申しければ、太刀を抜き、入らば斬らんと構へて、女をばそばに置いて待ちけるに、「能く御覽せよ」と云ひていにけり。百鬼夜行にて有るやらんと、怖ろしかりける。其れより一條の棧敷には、又も宿らざりけるとなん。



## 宇治拾遺物語 卷第十三

## (一) 上緒、主得、金事

今は昔、兵衛佐なる人有りけり。冠の上緒の長かりければ、世の人「上緒の主」となん付けたりける。西の八條と京極との畠の中に、怪しの小家有り。其の前を行く程に夕立のしければ、此家に馬より下りて入りぬ。見れば女一人有り。馬を引き入れて、夕立を過すとて、平なる小辛櫃のやうなる石の有るに、尻を打懸けて居たり。小石を持ちて、此石を手まさぐりに叩き居たれば、打たれて窪みたる所を見れば、金色に成りぬ。希有の事かなと思ひて、割げたる所に土を塗り隠して、女に問ふやう、「此石は何ぞの石ぞ。」女の云ふやう、「何の石にか侍らん、昔より斯くて侍るなり。昔長者の家なん侍りける。此家は倉どもの跡にて候ふなり」と、誠に見れば、大きな礎の石ども有り。「さて其の尻掛けさせ給へる石は、其の倉の跡を畠に作るるとて畝掘る間に、土の下より掘り出だされて侍るなり。其れが斯く屋の中に侍れば、かきのけんと思ひ侍れど、女は力弱し。かきのくべきやうも無ければ、憎むく斯くて置きて侍るなり」と云ひければ、我れ此石取りてん、後に目撃有る物もぞ見付くと思ひて、女に云ふやう、「此石我れ取りてんよ」と云ひければ、「善き事に侍り」と云ひければ、其邊に知りたる下人を空車を借りて遣りて、積みて出でんとする程に、綿衣を脱ぎて、唯だに取らんが罪得えがましければ、此女に取らせつ。心も得で騒ぎ惑ふ。「此石は、女ども

こそ由無し物と思ひたれども、我が家に持て往きてつかふべきやうの有るなり、されば唯だに取らんが罪得がましければ、斯く衣を取らするなり」と云へば、「思ひがけぬ事なり。不用の石の代りにいみじき寶の御衣の綿のいみじき給はらんものとは、あな恐ろし」と云ひて、竿の有るに懸けて拜む。さて車にかき載せて家に歸りて、打ち缺き打ち缺き賣りて物どもを買ふに、米錢絹綾など數多に賣りえて、夥き徳人に成りぬれば、西の四條よりは北、皇宮門よりは西、人も住まぬうきのゆふくとした「底本「い」一本ニヨル」る、一町ばかりなるうき有り。そこは買ふとも價もせじと思ひて、唯だ少しに買ひつ。主に不用のうきなれど「ば校本」、畠にも作らるまじ、家もえ建つまじ、益なき所と思ふに、價少しにても買はんと云ふ人を、いみじきすき者と思ひて賣りつ。上緒の主、此うきを買ひ取りて津の國に行きぬ。舟四五艘ばかり具して、難波わたりにいぬ。酒粥など多く設けて、鎌又多う設けたり。行きかふ人を招き集めて、「此酒粥參れ」と云ひて、「其代りに此葦刈りて、少しづつ得させよ」と云ひければ、喜びて集まりて、四五束十束二十束など刈りて取らす。斯くの如く三四日刈らすれば、山の如く刈りつ。舟十艘ばかりに積み、京へ上ほる。酒多く設けたれば、上ほるまゝに此下人どもに、「唯だに往かんよりは、此綱手引け」と云ひければ、此酒を飲みつゝ綱手を引きて、いと疾く賀茂河尻に引きつけつ。其れより車借に物を取らせつゝ、其葦にてこのうきにして、下人どもを雇ひて、其上に土はね掛けて、家を思ふまゝに作りてけり。南の町は、大納言源定「底本貞ニ作ル、イ本ニヨル」と云ひける人の家、北の町は、此上緒の主の埋めて造りける家なり。其れを此定



の大納言の買ひ取りて、二町には成したるなりけり。其れいはゆる此の比の西宮なり。斯く云ふ女の家なりける金の石を取りて、其れを本體として作りたりけるなり。

(二) 元輔落馬の事

今は昔、歌詠の元輔内藏助になりて、加茂祭の使しけるに、一條大路渡りける程に、殿上人の車多く並べ立て、物見ける前渡る程に、寛厚にては渡らで、人見給ふにと思ひて、馬をいたく煽りければ、馬狂ひて落ちぬ。年老いたる者の頭を逆まにて落ちぬ。公達、あないみじと見る程に、いと疾く起きぬれば冠脱げにけり。髻つゆ無し。唯だ缶をかづきたるやうにてなん有りける。馬添ひ手惑ひをして、冠を取りて着せさすれど、後ろざまにかきて、「あな騒がし。暫し待て。公達に聞ゆべき事あり」とて、殿上人どもの車の前に歩み寄る。日のさしたるに頭きらきらとして、いみじう見苦し。大路の者市を成して、笑ひ喧騒る事限りなし。車、棧敷の者ども笑ひ喧騒るに、一つの車の方さまに歩み寄りて云ふやう、「公達、此馬より落ちて冠落したるをば、迂愚なりとや思ひ給ふ。然か思ひ給ふまじ。其故は、心ばせ有る人だにも、物に慣き倒るゝ事は常の事なり。況して馬は心有るものに有らず。此の大路はいみじう石高し。馬は口を張りたれば、歩まんと思ふだに歩まれず。と引きかう引き、くるめかせば倒れんとす。馬を悪しと思ふべきに有らず。唐鞍は、さらなる鎧のかくうべくも有らず。其れに馬はいたく慣けば落ちぬ。其れ悪ろからず。又冠の落つる事は、物して結ふ物に有らず、髪を能くかき入れたるに捕へらるゝものなり。其れに髪は失せわたればひたぶ





るに無し。されば落ちん事、冠怨むべきやう無し。又例無きに有らず。何の大官は<sup>たいくわん</sup>大嘗會の御禊に落つ。何の中納言は其時の行幸に落つ。斯くの如くの例もかんがへ「○かぞへカ」やるべからず。然れば案内も知り給はぬ此比の若き君達、笑ひ給ふべきに有らず。笑ひ給はど<sup>たご</sup>迂愚なるべし」とて、車毎に手を折りつゝ數へて云ひ聞かす。斯くの如く云ひ果て、「冠持て來」と云ひてなん、取りてさし入れける。其時に響みて笑ひ喧騒る事限りなし。冠せさすとて寄りて、馬添ひの云はく、「落ち給ふ即ち冠を奉らで、など斯く由無し言は仰せらるゝぞ」と問ひければ、「痴事な云ひそ。斯く道理を云ひ聞かせたらばこそ、此の公達は後々にも笑はざらめ。さらば口さがなき君達は、長く笑ひなんものをや」とぞ云ひける。人笑はする事役にするなりけり。

## (三) 利宜迷神にあふ事

今は昔、三條院の八幡の行幸に、左京<sup>さきやう</sup>屬にて、邦の利宜と云ふ者の供奉したりけるに、長岡に寺戸と云ふ所の程いきけるに、人どもの「此邊には、迷神<sup>まよがみ</sup>あんなる邊ぞかし」と云ひつゝ渡る程に、「利宜も然聞くは」と云ひて行く程に、過ぎもやらで「目も」「イ本ニテ補フ」やうくさがれば、今は山崎のわたりには行き着きぬべきに、怪しう同じ長岡の邊を過ぎて、乙訓河のつらを過ぐと思へば、又寺戸の岸をのぼる。寺戸過ぎて又行きもて行きて、乙訓河のつらに來て渡るぞと思へば、又少し桂川を渡る。やうく日も暮方に成りぬ。後前見れば、供「イ本ニアリ」人一人も見えずなりぬ。後前に遙に打續きたる人も見えず。夜の更けぬれ

ば、寺戸の西の方なる板屋の軒におりて、夜を明して、翌旦思へば、我は左京の官人なり。九條にて宿るべきに、斯うまで來「底本まニ誤ル、イ本ニヨル」つらん、極まりて由なし。其れに同じ所を夜一夜めぐり歩りきけるは、九條の程より迷はかし神の憑きて、率て來るを知らで、斯うしてけるなめりと思ひて、明けて「按本ニアリ」なん西京の家には歸り來たりける。利宜がまさしう語りしことなり。

## (四) 龜を買うてはなす事

昔、天然の人、寶を買はん爲に、錢五十貫を手に持たせてやる。大きな河のはたを行くに、舟に乗りたる人有り。舟の方を見遣れば、舟より龜首をさし出だしたり。錢持ちたる人立ちとまりて、此龜をば「何の料ぞ」と問へば、「殺して物にせんずる」と云ふ。「其龜買はん」と云へば、此舟の人云はく、「いみじき大切の事有りて設けたる龜なれば、いみじき價なりとも賣るまじき」由を云へば、猶強ちに手を摩りて、此五十貫の錢にて龜を買ひ取りて放ちつ。心に思ふやう、親の寶買ひに隣の國へ遣りつる錢を、龜に代へて止みぬれば、親如何に腹立ち給はんずらん。さりとして又親の許へ往かて有るべきに有らねば、親の許へ歸り行くに、道に人の居て云ふやう、「こゝに龜賣りつる人は、此下の渡りにて舟打反して」と「一本ニテ補フ」語るを聞きて、親の家に歸り行きて、錢は龜に代へつる由語らんと思ふ程に、親の云ふやう、「何とて、此錢をば返しおこせたるぞ」と問へば、子の云はく、「ある事無し。其錢にては、云々龜に代へて許しつれば、其の由を申さんとて參りつるなり」と云へば、親の云ふやう、「黒き衣きたる人同じ様なるが、五人各十貫つつ



持ちて來たりつる、是れそなり」とて見せければ、此錢未だ濡れながら有り。はや買ひて放しつる龜の、其錢河に落ち入るを見て、取り持ちて、親の許に子の歸らぬ先きに遣りけるなり。

## (五) 夢買、人の事

昔、備中、國に郡司有りけり。其れが子に、ひきのまき人「○吉備、眞吉備ノ誤カ」と云ふ有りけり。若き男にて有りける時、夢を見たりければ、合せさせんとて、夢解の女の許に行きて、夢合せて後物語して居たる程に、人々あまた聲して來なり。國守の御子の太郎君のおはするなりけり。年は十七八ばかりの男にておはしけり。心ばへは知らず、容貌は清けなり。人四五人ばかり具したり。「是れや夢解の女の許」と問へば、御供の侍、「是れにて候ふ」と云ひて來れば、まき人は上の方の内に入りて、部屋の有るに入りて、穴より覗きて見れば、此君入り給ひて、「夢を云々見つるなり。如何なるぞ」とて語り聞かす。女聞きて、「よにいみじき夢なり。必ず大臣まで成り上がり給ふべきなり。返すくめでたく御覽じて候ふ。あな畏こく、人に語り給ふな」と申しければ、此君嬉しげにて、衣を脱ぎて女に取らせて歸りぬ。其折まき人、部屋より出でて、女に云ふやう、「夢は取ると云ふ事の有るなり。此君の御夢我等に取らせ給へ。國守は四年過ぎぬれば歸り上りぬ。我は國人なれば、いつもながらへて有らんずる上に、郡司の子にて有れば、我をこそ大事に思はめ」と云へば、女「のたまはんまゝに侍るべし。さらばおはしつる君の如くにして入り給ひて、其語られつる夢をつゆも違はず語り給へ」と云へば、まき人喜びて、彼の君の有りつるやうに、入り來て夢語を

したれば、女同やじうに云ふ。まき人いと嬉しく思ひて、衣を脱ぎて取らせて去りぬ。其後文を習ひ讀みたれば、唯だ通りに通りて、才有る人に成りぬ。朝廷聞し召して試みらるゝに、誠に才深く有りければ、唐土へ物よく／＼習へとて遣はして、久しく唐土に有りて、さまざまの事ども習ひ傳へて歸りたりければ、御門賢き者に思し召して、次第になしあげ給ひて、大臣までに成されにけり。されば夢取る事は、實にかしこき事なり。彼の夢取られたりし備中守の子は、司も無き者にて止みにけり。夢を取られざらましかば、大臣までも成りなまし。されば夢を人に聞かすまじきなりと言ひ傳へけり。

## (六) 大井光遠、妹強力の事

今は昔、甲斐國の相撲大井、光遠は、低太にいかめしく、力強く足早く、眉目事からよりはじめて、いみじかりし相撲なり。其れが妹に、年二十六七ばかりなる女の、眉目、ことながら、様子もよく、姿も穢やかなる有りけり。其れは退きたる家に住みけるに、其れが門に人に追はれたる男の、刀を抜きて走り入りて、此女を質に取りて、腹に刀を差當て、居ぬ。人走り行きて兄の光遠に、「姫君は質に取られ給ひぬ」と告げければ、光遠が云ふやう、「其の御許は、薩摩の氏長ばかりこそは質に取らめ」と云ひて、何となく居たれば、告げつる男怪しと思ひて、立ち歸りて物より覗けば、九月ばかりの事なれば、薄色の衣一重に、紅葉の袴を著て、口覆ひして居たり。男は大きな男の恐ろしげなるが、大の刀を逆手に取りて、腹に差當て、足をもて後ろより抱きて居たり。此の姫君、左の手しては顔を塞ぎ泣く。右の手しては、前に矢筈の荒作りたる



が、二三十ばかり有るを取りて、手ずさみに節の本を指にて、板敷に押當てゝにじれば、朽木の柔かなるを押し碎くやうに碎くるを、此盗人目を付けて見るに、あさましくなりぬ。いみじからん兄の主、鐵槌を持ちて打ち碎くとも斯くは有らじ、ゆゑしかりける力かな。此のやうにては、只今の間に我は取り碎かれぬべし。無益なり、逃げなんと思ひて、人目をばかりて飛び出でて逃げ走る、時に末に人ども走り合ひて捕へつ。縛りて、光遠が許へ具して行きぬ。光遠「如何に思ひて逃げつるぞ」と問へば、申すやう、「大きな矢筈の節を、朽木などのやうに押し碎き給ひつるを、あさましと思ひて、恐ろしさに逃げ候ひつるなり」と申せば、光遠打笑ひて、「如何なりとも、其の御許はよも突かれじ。突かんとせん手を取りて、搦り捻ぢて上さまへ突かば、肩の骨は上さまへ出でて、捻ぢられなまし。かしこく己れが脇被かれまじ、宿世有りて、御許は捻ぢざりけるなり。光遠だにも、おれをば手殺に殺してん。脇をば捻ぢて腹胸を踏まん、己れは生きてんや。其れに彼の御許の力は、光遠二人ばかり合はせたる力にておはするものを、さこそ細やかに女めかしくおはすれども、光遠が手戲するに、捕へたる腕を捕へられぬれば、手廣ごりて免しつべきものを、あはれ男子にて有らましかば、逢ふ敵無くてぞ有らまし。口惜く女にて有る」と云ふを聞くに、此の盗人死ぬべき心地す。女と思ひて、いみじき質を取りたると思ひて有れども、其儀は無し。「おれをば殺す」二字一本ニヨル」べけれども、御許の死ぬべくはこそ殺さめ。おれ死ぬべかりけるに、かしこう疾く逃げてのきたるよ。大きな鹿の角を膝に當てゝ、小さき枯木の細きなどを折るやうに折るものを」とて、追ひ放して遣りける。

(七) 或唐人女の羊に生れたる不知して殺す事

今は昔、唐に何にかや云ふ司に成りて、下らんとする者侍りき。名をば慶植と云ふ。其れが女一人有りけり。並びなくをかしげなりし、十餘歳にして失せにけり。父母泣き悲しむ事限り無し。さて二年ばかり有りて田舎に下りて、親しき一家の類はらから集めて、國へ下るべき由を云ひ侍らんとするに、市より羊を買ひ取りて、此の人々に食はせんとするに、其母が夢に見るやう、失せにし女、青き衣を著て、白きさいでして頭を包みて、髪に玉の簪一具をさして來たり。生きたりし折に變らず。母に云ふやう、「我れ生きて侍りし時に、父母我を愛なしうし給ひて、萬づをまかせ給へりしかば、親に申さで物を取り使ひ、又人にも取らせ侍りき。盗みには有らねど、申さでせし罪に依りて、今羊の身を受けたり。來たりて、其の報を盡し侍らんとす。明日、まさに頸白き羊に成りて殺されんとす。願はくは我が命を免し給へ」と云ふと見つ。驚きて、翌旦食物する所を見れば、實に青き羊の頸白き有り。脛背申白くて、頭に二つの斑有り。常の人の簪さす所なり。母是れを見て、「暫し此羊を殺しそ。殿歸りおはしての後に、案内申して免さんずるぞ」と云ふに、守殿物より歸りて、「など人々參物は遅き」とて憤る。「さればこの羊を調じ侍りて装はんとするに、上の御前、暫しな殺しそ。殿に申して免さんとして留め給へば」など云へば、腹だちて「僻言なせそ」とて、殺さんとして釣り付けたるに、此客人ども來て見れば、いとをかしげにて、顔美き女子の十餘歳ばかりな



るを、髪に纏着けて釣り付けたり。此女子の云ふやう、「わらはは此守の女にて侍りしが、羊に成りて侍るなり。今日の命を御前達助け給へ」と云ふに、此人々「あな畏こく、ゆめく殺すな。申して來ん」とて行く程に、此食物する人は例の羊と見ゆ。定めて遅しと腹立ちなんとて打殺しつ。其羊の泣く聲、此の殺す者の耳には、唯だ常の羊の泣く聲なり。さて羊を殺して、煎焼さまぐにしたりけれど、此客人どもは物も食はで歸りにけり。怪しがりて人々に問へば、云々なりと、始めより語りければ、悲しみて感ひける程に、病に成りて死ににければ、田舎にも下り侍らずなりにけり。

(八) 出雲寺、底本守ニ誤ル 別當の鯰に成りたるを知りながら殺して食事

今は昔、王城の北、上つ出雲寺と云ふ寺建て、より後、年久しくなりて、御堂も傾きて、はかぐしう修理する人も無し。此の近う別當侍りき。其名をば上覺となん云ひける。是れぞ前の別當の子に侍りける。相續ぎつ、妻子もたる法師ぞ知り侍りける。いよ／＼寺は毀れて荒れ侍りける。さるは傳教大師の唐土にて、天台宗たてん所を撰び給ひけるに、此寺の所をば繪に書きて遣はしける。「高雄、比叡山、かむつ寺と、三つの中に何れか善かるべき」と有れば、「此寺の地は、人に勝れてめでたけれど、僧なん亂がはしかるべき」と有りければ、其れに由りて止めたる所なり。いとやんごとなき所なれど、如何なるにか、さなりはてゝ惡ろく侍るなり。其れに上覺が夢に見るやう、我が父の前別當いみじう老いて、杖つきて出で來て云ふやう「明後日未の時に大風吹きて、此寺倒れなんとす。然かるに我れ此寺の瓦の下に、三尺ばかりの鯰にてなん。

行方無く水も少なく、狭く暗き所に在りて、あさましう苦しき目をなん見る。寺倒れば、こぼれて庭に倒ひありかば、童部打殺してんとす。其時汝が前に行かんとす。童部に打たせずして賀茂河に放ちてよ。さらば廣き目も見ん。大水に行きて、頼もしくなん有るべき」と云ふ。夢覺めて、「斯かる夢をこそ見つれ」と語れば、「如何なる事にか」と云ひて日暮れぬ。其日になりて、午の時の末より俄に空かき曇りて、木を折り家を破る風出で來ぬ。人々あわてゝ家ども繕ろひ騒げども、風いよ／＼吹き増りて、村里の家ども皆吹き倒し、野山の竹木倒れ折れぬ。此寺まことに未時ばかりに吹き倒されぬ。柱折れ棟壞れてすぢなし。さる程に裏板の中に、年比の雨水溜りけるに、大きな魚ども多かり。其わたりの者ども、桶をさげて皆掻き入れ騒ぐ程に、三尺ばかりなる鯰の、ふた／＼として庭に倒ひ出でたり。夢の如く上覺が前に來ぬを、上覺思ひもあへず、魚の大きに樂しげなるに耽りて、かな杖の大きなるを持ちて、頭につき立て、我が太郎童部を呼びて「是れ」と云ひければ、魚大きにて打取られねば、草刈鎌と云ふ物を持ちて、腰を掻き切りて、物に包ませて家に持ち入りぬ。さてこと魚などしたゝめて桶に入れて、女どもに賜かせて我が坊に歸りたれば、妻の女、「此鯰は夢に見えける魚にこそあめれ。何しに殺し給へるぞ」と心憂がれど、こと童部の殺さましも同じ事、あへなん。「我は」などと云ひて「こと人ませず、太郎次郎童など食ひたらんぞ、故御房は嬉しと思さん」とて、つぶ／＼と切り入れて、煮て食ひて、「怪しう如何なるにか、異鯰よりも味の善きは、故御房の肉むらなれば善きなめり。是れが汁吸れ」など、愛して食ひける程に、大きな骨喉に立て、ゑ



う／＼と云ひける程に、頓に出でざりければ、苦痛して遂に死に侍り。妻はゆゑしがりて、鮫をば食はずなりにけりとなん。

(九) 念佛僧魔往生事

昔、美濃國伊吹山に、久しく行ひける聖有りけり。阿彌陀佛より外の事知らず、他事無く念佛申してぞ年經にける。夜深く佛の御前に念佛申して居たるに、空に聲有りて告げて云はく、「汝戀ろに我を頼めり。今は念佛の數多く積りたれば、明日の未の時に必ず／＼來たりて迎ふべし。ゆめ／＼念佛怠るべからず」と云ふ。其聲を聞きて、限り無く懸ろに念佛申して、水を浴み香をたき花を散らして、弟子どもに念佛諸共に申させて、西に向ひて居たり。やう／＼閃くやうにするもの有り。手を摩りて念佛申して見れば、佛の御身より金色の光を放ちてさし入りたり。秋の月の雲間より顯はれたるが如し。さまざまの花を降らし、白毫の光聖の身を照らす。此時聖尻を逆まになして、拜み入る、數珠の緒も切れぬべし。觀音、蓮臺を差し上げて、聖の前により給ふに、紫雲あつくたなびき、聖前ひ寄りて蓮臺に乗りぬ。さて西の方へ去り給ひぬ。さて坊に残れる弟子ども、泣く／＼貴がりて、聖の後世を訪らひけり。斯くて七八日過ぎて後、坊の下衆法師ばら、念佛の僧に湯わかして浴せ奉らんとて、木伐りに奥山に入りたりけるに、遙なる瀧にさし覆ひたる棺の木有り。其木の梢に叫ぶ聲しけり。怪しくて見上げたれば、法師を裸になして、梢に縛り付けたり。木登り能くする法師の登りて見れば、極樂へ迎へられ給ひし我師の聖を、葛にて縛り付けて置きたり。此法師、





「如何に我が師は、斯かる目をば御學するぞ」とて、寄りて繩を解きければ、「今迎へんずるぞ。其の程驚し斯くて居たれとて、佛のおはしましよをば、何しに斯く解き許すぞ」と云ひけれども、寄りて解きければ、「阿彌陀佛は、我を殺す人あり。をうく」とぞ叫びける。されども法師ばら、數多登りて解き下りして、坊へ具して行きたれば、弟子ども心憂き事なりと歎き惑ひけり。聖は人心も無くて、二日三日ばかり有りて死にけり。智惠無き聖は、斯く天狗に欺かれけるなり。

## (十) 蒸覺大師入三續續城給事

昔、蒸覺大師、佛法を習ひ傳へんとて、唐土へ渡り給ひておはしける程に、會昌年中に、唐武宗佛法を亡して、堂塔を毀ち僧尼を捕へて失ひ、或は還俗せしめ給ふ亂に逢ひ給へり。大師をも捕へんとしける程に、逃げて或堂の内へ入り給ひぬ。其の使堂へ入りて搜しける間、大師すべき方無くて、佛の中に逃げ入りて、不動を念じ給ひける程に、使求めけるに、新らしき不動尊、佛の御中におはしける。其れ怪しがりて、抱き下ろして見るに、大師もとの姿に成り給ひぬ。使驚きて、帝に此由奏す。帝仰せられけるは、「他國の聖なり。速に追ひ放つべし」と仰せければ、放ちつ。大師喜びて他國へ逃げ給ふに、遙なる山を隔て、人の家有り。築地高く築き廻らして一つの門有り。其處に人立てり。悦びをなして問ひ給ふに、「是れは一人の長者の家なり。わ僧は何人ぞ」と問ふ。答へて云はく、「日本國より佛法習ひ傳へんとて渡れる僧なり。然るに斯くあさましき亂に逢ひて、暫し隠れて有らんと思ふなり」と云ふに、「是れは醜氣に人の來たらぬ所なり。暫く

此處におはして、世靜まりて後出で、佛法も習ひ給へ」と云へば、大師喜びをなして内へ入りぬれば、門を鎖し固めて、奥の方に入るに、後に立ちて行きて見れば、さまざまの屋ども造り續けて、人多く騒がし。傍らなる所に据ゑつ。さて佛法習ひつべき所や有ると見歩りき給ふに、佛經僧侶等すべて見え。後の方、山によりて一宅あり。寄りて聞けば、人の呻く聲あまたす。怪しくて垣の隙より見給へば、人を縛りて上より釣り下げて、下に壺どもを据ゑて血を垂し入る。あさましくて故を問へども答もせず、大きに怪しくて、又異所を、聞けば同じく呻ふ音す。覗きて見れば、色あさましう青びれたる者どもの、瘦せげんじたる數多臥せり。一人を招き寄せて、「是れは如何なる事ぞ。斯やうに堪へ難げには如何で有るぞ」と問へば、木の切を持ちて、細き脇を差し出で、土に書くを見れば、「是れは續續城なり。是れへ來たる人には、先づ物云はぬ藥を食はせて、次に肥ゆる藥を食はす。さて其後高き所に釣り下げて、所々を刺し切りて、血を落して、其血にて續續を染めて賣り侍るなり。是れを知らずして斯かる目を見るなり。食物の中に、胡麻のやうにて黒ばみたる物有り。其れは物云はぬ藥なり。さる物參らせたらば、食ふまねをして捨て給へ。さて人の物申さば、呻きのみ呻き給へ。さて後に、如何にもして逃ぐべき支度をして逃げ給へ。門は固く鎖して、醜氣にて逃ぐべきやう無し」と委しく教へければ、有りつる居所に歸り居給ひぬ。さる程に人食物持ちて來たり。教へつるやうに、氣色の有る物中に有り。食ふやうにして、懷ろに入れて後に捨てつ。人來たりて物を問へば、呻きて物ものたまはず。今はしおほせたりと思ひて、肥ゆべき藥をさまざまにして食はすれば、同じく



食ふまねして食はず。人の立ち去りたるひまに、艮しのぶの方に向ひて、「我山の三寶助け給へ」と、手を摩りて祈請し給ふに、大きな六一疋出で来て、大師の御袖を食ひて引く。やう有りと覺えて、引く方に出で給ふに、思ひがけぬ水門の有るより引き出だしつ。外に出でぬれば犬は失せにけり。今は斯うと思して、足の向きたる方へ走り給ふ。遙に山を越えて人里有り。人逢ひて、「是れは何方よりはおはする人の、斯くは走り給ふぞ」と問ひければ、「斯かる所へ行きたりつるが、逃げてまかるなり」とのたまふに、「哀れ、あさましかりける事かな。其れは彌羅城なり。彼處へ行きぬる人の歸る事無し。瞞氣の「一本、おぼろけならぬ。佛の御助けならでは、出づべきやう無し。あはれ貴くおはしける人かな」とて、拜みて去りぬ。其れよりいよいよ逃げのきて、又都へ入りて忍びておはするに、會昌六年に武宗崩じ給ひぬ。翌年中元、宣宗位に即き給ひて、佛法亡すこと止みぬれば、思ひの如く佛法習ひ給ひて、十年と云ふに日本へ歸り給ひて、眞言まことごんを弘め給ひけりとなん。

## (十一) 渡天、僧入穴事

今は昔、唐に有りける僧の天竺に渡りて、他事にあらず、唯だ物のゆかしければ、物見にし歩りきければ、所々見行きけり。或る片山に大きな穴有り。牛の有りけるが、此穴に入りけるを見て、ゆかしく覺えければ、牛の行くに附きて僧も入りけり。遙に行きて明き所へ出でぬ。見まはせば、有らぬ世界と覺えて、見も知らぬ花の色いみじきが咲き亂れたり。牛この花を食ひけり。試みに此花を一房取りて食ひたりければ、甘き事天の甘露も斯く有らんと覺えて、めでたかりけるまゝに多く食ひたりければ、唯だ肥えに肥えふとりけり。心得ず恐ろしく思ひて、有りつる穴の方へ歸り行くに、初めはやすく通りつる穴、身の太く成りて狭くおぼえて、やう／＼として穴の口までは出でたれども、得出でずして堪へ難き事限り無し。前を通る人、「是れ助けよ」と呼ばはりけれども、耳に聞き入るゝ人も無し。助くる人も無かりけり。人の目にも何と見えけるやらん、不思議なり。日比かさなりて死ぬ。後は石に成りて、穴の口に頭をさし出だしたるやうにてなん有りける。玄奘三藏げんざうさんざう天竺に渡り給ひたりける日記にきに、此由記るされたり。

## (十二) 寂照上人飛鉢事

今は昔、三河入道寂照と云ふ人、唐土に渡りて後、唐の王、やんごとなき聖どもを召し集めて、堂を飾りて僧徒を設けて、經を講じ給ひけるに、王のたまはく、「今日の齋筵は、手ながの役あるべからず。各我が鉢を飛ばせ遣りて物は受くべし」とのたまふ。其心は、日本僧を試みるが爲なり。さて諸僧、一ノ座より次第に鉢を飛ばせて物を受く。三河入道末座に著きたり。其の番に當りて、鉢を持って立たんとす。「如何で、鉢をやりてこそ受けめ」とて、人々制し留めけり。寂照申しけるは、「鉢を飛ばす事は、別の法を行ひてする業なり。しかるに寂照、未だ此法を傳へ行はず。日本國においても、此の法行ふ人有りけれど、未だ世には行ふ人無し。如何でか飛ばさん」と云ひてみたるに、「日本の聖、鉢遅し／＼」と責めければ、日本の方に向ひて祈念して云はく、「我が國の三寶神祇助け給へ。恥見せ給ふな」と念じ入りてみたる程に、



鉢獨樂のやうに轉きて、唐の僧の鉢よりも早く飛びて、物を受けて歸りぬ。其時上より始めて、やんごとなき人なりとて、拜みけるとぞ申し傳へたる。

## (十三) 清瀧川聖の事

今は昔、清瀧川の奥に、柴の庵を作りて行ふ僧有りける。水欲しき時は水瓶を飛ばして、汲みに遣りて飲みけり。年經にければ、かばかりの行者は有らじと、時々慢心起りけり。斯かりける程に、我が居たる上さまより、水瓶來て水を汲む。如何なる物の、又斯くはするやらんと、嫉ましく覺えければ、見顯はさんと思ふ程に、例の水瓶飛び來て、水を汲みて行く。其時水瓶に附きて行きて見るに、水上に五六十町上ぼりて庵見ゆ。行きて見れば、三間ばかりなる庵有り。持佛堂別にいみじく造りたり。誠にいみじう尊し。物清く住まひたり。庭に橘の木有り。木の下に行き通ひしたる跡あり。閑伽椰の下に花がら多く積れり。砌に苔むしたり。神さびたる事限りなし。窓の隙より覗けば、机に經多く卷きさしたるなど有り。不斷香の煙滿ちたり。能く見れば、年七八十ばかりなる僧の貴げなる、五銖をにぎり、臨足におし掛かりて眠り居たり。此の聖を試みんと思ひて、やはら寄りて、火界呪を持ちて加持す。火焰俄に起りて庵につく。聖眠りながら散杖を取りて、香水にさし浸して四方に灑ぐ。其時庵の火は消えて、我が衣に火をつけて唯だ焼けに焼く。下の聖大聲を放ちて惑ふ時に、上の聖目を見あげて、散杖を持ちて下の聖の頭に灑ぐ。其の時火消えぬ。上の「一本ニヨリテ補フ」聖の云はく、「何の料に、かかる目をば見すぞ」と問ふ。答へて云はく、「是れは平頃河のつ

らに庵を結びて、行ひ候ふ修行者にて候ふ。此程水瓶の來て水を汲み候ひつる時に、如何なる人のおはしますぞと思ひ候ひて、見顯はし奉らんとて參りたり。ちと心み奉らんとて加持しつるなり。御免し候へ。今日よりは御弟子に成りて仕へ侍らん」と云ふに、聖人は、何事云ふぞとも思はぬ氣にて有りけりとぞ。下の聖、我ばかり尊き者は有らじと、儒慢の心の有りければ、佛の憎みて、まさる聖を設けて、逢はせられけるなりとぞ語り傳へたる。

## (十四) 優婆塞多弟子の事

今は昔、天竺に佛の御弟子、優婆塞多と云ふ聖おはしき。如來滅後百年ばかり有りて、其の聖に弟子有りき。如何なる心ばへをか見給ひたりけん、「女人に近づく事なかれ。女人に近づけば、生死に廻る事車輪の如し」と、常にいさめ給ひければ、弟子の申さく、「如何なる事を御覽して、度々かやうに承はるぞ。我も證果の身にて侍れば、ゆめ／＼女に近づくこと有るべからず」と申す。餘の弟子どもも、此中には殊に貴き人を、如何なれば斯くのたまふらんと、怪しく思ひける程に、此弟子の僧、物へ行くとて河を渡りける時、女人出で來て同じく渡りけるが、唯だ流れに流れて、「あら悲し、我を助け給へ、あの御房」と云ひければ、師のたまひし事有り、耳に聞き入れじと思ひけるが、唯だ流れに浮き沈み流れければ、いとほしくて、寄りて手を取りて引き渡しつつ、手のいと白く豊肥やかにて、いとよかりければ、此手を離しえず。女、今手をはづし給へかし、物怖ろしき物かな、と思ひたる氣色にて云ひければ、僧の云はく、「先世の契り深き事



やらん、極めて志深く思ひ聞ゆ。我が申さん事聞き給へてんや」と云ひければ、女答ふ。「只今死ぬべかりつる命を助け給ひたれば、如何なる事なりとも、何しにかは辭み申さん」と云ひければ、嬉しと思ひて、萩薄の生ひ茂りたる所へ、手を取りて「いざ給へ」とて引き入れつ。抑伏せて、唯だ犯しに犯さんとして、股に挟まりて有る折、此女を見れば、我師の尊者なり。あさましく思ひて、引き退かんとすれば、優婆塞多、股に強く挟みて、「何の料に、此老法師をば斯くはせたむるぞや。これや汝。女犯の心なき證、果の聖者なる」との給ひければ、物覺えず、恥かしくなりて、挟まれたるを逃れんとすれど、「三字按本ニヨリテ補フ」も、すべて強く挟みてはづさず。さて斯く喧騒り給ひければ、道行人集まりて見る。あさましく恥かき事限りなし。かやうに諸人に見せて後、起き給ひて、弟子を捕へて寺へおはして、鐘をつき衆會をなして、大衆に此由語り給ふ。人々笑ふ事限りなし。弟子の僧、生きたるにも有らず、死にたるにも有らず覺えけり。斯くの如く罪を懺悔してければ、阿那含果を得つ。尊者方便を廻らして、弟子をたばかりて、佛道に入らしめ給ひけり。

## 宇治拾遺物語 卷第十四

## (一) 海雲比丘弟子童の事

今は昔、海雲比丘道を行き給ふに、十餘歳ばかりなる童子道に逢ひぬ。比丘童に問ひて云はく、「何の料の童ぞ」とのたまふ。童答へて云はく、「唯だ道罷る者にて候ふ」と云ふ。比丘云はく、「汝は法華經は讀みたりや」と問へば、童の云はく、「法華經と申すらん物こそ、未だ名をだにも聞き候はね」と申す。比丘又云はく、「さらば我が房に具して行きて、法華經教へん」とのたまへば、童「仰せに従ふべし」と申して、比丘の御供に行く。五臺山の房に行き着きて、法華經を教へ給ふ。經を習ふ程に、小僧常に來たりて物語を申す。誰人と知らず。比丘のたまはく、「常に來たる小大德をば童は知りたりや」と、童「知らず」と申す。比丘の云はく、「是れこそ、此山に住み給ふ文殊よ。我に物語しに來給ふなり」と、斯やうに教へ給へども、童は文殊と云ふ事も知らず候ふなり。されば何とも思ひ奉らず。比丘童にのたまふ、「汝ゆめく女人に近づく事勿れ。あたりを拂ひて馴るゝ事なかれ」と、童物へ行く程に、蓋毛なる馬に乗りたる女人の、いみじく假粧して美しくしが道に逢ひぬ。此女の云はく、「われ此馬の口引きて給べ。道のゆゑしく悪くて、落ちぬべく覺ゆるに」と云ひけれども、童耳にも聞き入れずして行くに、此馬荒立ちて、女逆まに落ちぬ。怨みて云はく、「我を助けよ。既に死ぬべく覺ゆるなり」と云ひけれども、猶耳に聞き入れず。我師の



「女人の傍へ寄る事勿れ」とのたまひしにと思ひて、五臺山へ歸りて、女の有りつるやうを比丘に語り申し、  
「されども、耳にも聞き入れずして歸りぬ」と申しければ、「いみじくしたり。其の女は文殊化して、汝  
が心を見給ふにこそ有るなれ」とて褒め給ひけり。さる程に、童は法華經を一部讀み終へにけり。其時比  
丘のたまはく、「汝、法華經を讀み果てぬ。今は法師に成りて受戒すべし」とて、法師に成されぬ。「受戒を  
ばさづくべからず。東京に禪定寺にいまする倫法師と申す人、此の比朝廷の官旨を蒙りて、受戒を行ひ給ふ  
人なり。其人の許へ行きて受くべきなり。但し今は汝を見るまじき事の有るなり」とて、泣き給ふ事限りな  
し。童の「受戒仕りては、則ち歸り參り候ふべし。如何に思し召して、斯くは仰せ候ふぞ」と。又「如何  
なれば、斯く泣かせ給ふぞ」と申せば、「唯だ悲しき事の有るなり」とて泣き給ふ。さて童に、「戒師の許に  
行きたらんに、何方より來る人ぞと問はば、清冷山の海雲比丘の許よりと申すべきなり」と教へ給ひて、  
泣く／＼見送り給ひぬ。童仰せに隨ひて、倫法師の許に行きて、受戒すべき由申しければ、案の如く「何  
方より來る人ぞ」と問ひければ、教へ給ひつるやう申しければ、倫法師驚きて、「貴き事なり」とて禮拜し  
て云はく、「五臺山には、文殊の限り住み給ふ所なり。汝沙彌は海雲比丘の善知識に逢ひて、文殊を能く拜  
み奉りけるにこそ有りけれ」とて、貴ぶ事限りなし。さて受戒して五臺山へ歸りて、日比居たりつる房の在  
所を見れば、すべて人の住みたる氣色無し。泣く／＼一山を尋ね歩りけども、遂に在所無し。此れは優婆塞  
多の弟子の僧、賢けれども心弱く女に近づきけり。是れはいとけなけれども、心強くて女人に近づかず。か

るが故に、文殊是れを賢き者なれば、教化して佛道に入らしめ給ふなり。されば、世の人戒をば破るべから  
ず。

### (二) 寛朝僧正勇力、事

今は昔、遍照寺僧正寛朝と云ふ人、仁和寺をもしりければ、仁和寺の破れたる所修理せさすとて、番匠ども  
數多つどひて作りけり。日暮れて、番匠ども各出でて後に、今日の造作は如何程したるぞとはんと思ひて、  
僧正中結ひ打して、高足駄履きて、唯だ一人歩み來て、あがるくひ「底本」ある侍くい「ト有り。私註。あが  
るくい、今昔物語に麻柱トアリ」ども結ひたる許に立ち廻りて、なま夕暮に見られける程に、黒き裝束した  
る男の烏帽子引き垂れて、顔確にも見えすして、僧正の前に出で來て、蹲居て刀を逆さまに抜き、引き隠  
したるやうに持てなして居たりければ、僧正「かれは何者ぞ」と問ひけり。男片膝をつきて、「佗人に侍り。  
寒さの堪へ難く侍るに、其の奉りたる御衣一つ二つ、下し申さんと思ひ給ふなり」と云ふまゝに、飛び懸か  
らんと思ひたる氣色なりければ、「ことにも有らぬ事にこそ有るなれ。斯く恐ろしげに威さすとも、唯だ乞は  
で、けしからぬ主の心ぎはかな」と云ふまゝに、ちゝに立ちめぐりて、尻をはたと蹴たれば、蹴らるゝまゝ  
に、「二十五字イ本ニヨリテ補フ」男かき消ちて見えすなりにければ、やはら歩み歸りて、坊のもと近く行  
きて、「人や有る」と高やかに呼びければ、坊より小法師走り來にけり。僧正「行きて火點して來よ。こゝ  
に我が衣剃がんとしつる男の、俄に失せぬるが怪しければ、見んと思ふぞ。法師ばら呼び具して來」とのた



まひければ、小法師走り歸りて、「御房引剝に逢はせ給ひたり。御房たち参り給へ」と呼ばはりければ、坊坊に有りとする僧ども、火點し太刀提げて、七八人十人と出で來にけり。「いづくに盜人は候ふぞ」と問ひければ、「こゝに居たりつる盜人の、我が衣を剝がんとしつれば、剝がれては寒かりぬべく覺えて、尻をほうと蹴たれば失せぬるなり。火を高く點して、隠れ居るかと思よ」とのたまひければ、法師ばら「をかしくも仰せらるゝかな」とて、火を打振りつゝ上さまを見る程に、あがるくひの中に落ちつまりて、え働かぬ男有り。「彼處にこそ人は見え侍りけれ。番匠にや有らんと思へども、黒き裝束したり」と云ひて、登りて見れば、あかるくひの中に落ち挟まりて、身じろぐべきやうも無くて、倦じ顔つくりて有り。逆手に抜きたりける刀は未だ持ちたり。其れを見付けて法師ばら寄りて、刀と「底本も、一本ニヨル」警と「底本も、一本ニヨル」腕とを取りて、引き上げておろして率て参りたり。具して坊に歸りて、「今より後、老法師とてな腹りそ。いと便なき事なり」と云ひて、著たりける衣の中に、綿厚かりけるを脱ぎ取らせて、追ひ出だして遣りてけり。

## (三) 經頼地に逢ふ事

昔、經頼と云ひける相撲の家の傍に、ふる河の有りけるが、深き淵なる所有りけるに、夏其川近く木蔭の有りければ、帷子ばかり著て中結ひて、足駄履きて、杖杖と云ふ物つき、小童一人供に具して、とかく歩りきけるが、涼まんとて、其淵の傍の木蔭に居にけり。淵青く恐ろしげにて底も見えず、蘆鷹など云ふ物生ひ

茂りたりけるを見て、汀近く立てりけるに、彼方の岸は六七段ばかりは退きたるらんと見ゆるに、水の漲りて、此方さまに來ければ、何のするにか有らんと思ふ程に、此方の汀近くなりて、蛇の頭をさし出でたりければ、此蛇大きならんかし、外さまに昇らんとするにやと見立てりける程に、蛇頭を擡げてつくつく目守けり。如何に思ふにか有らんと思ひて、汀一尺ばかり退きて、端近く立ちて見ければ、暫しばかり目守目守て、頭を引き入れてけり。さて彼方の岸さまに水漲ると見ける程に、又此方さまに水浪立ちて後、蛇の尾を汀よりさし上げて、我が立てる方さまにさし寄せければ、此の蛇思ふやうの有るにこそとて、任せて立てりければ、猶さし寄せて、經頼が足を三四返ばかり纏ひけり。如何にせんずるにか有らんと思ひて立てる程に、纏ひえてきしくと引きければ、河に引き入れんとするにこそ有りけれと、其折に知りて、踏み強りて立てりければ、いみじう強く引くと思ふ程に、履きたる足駄の齒を踏み折りつ。引き倒されぬべきを、構へて踏み直りて立てれば、強く引くとも疎かなり。引き取られぬべく覺ゆるを、足を強く踏み立てければ、片つらに五六寸ばかり足を踏み入れて立てりけり。能く引くならと思ふ程に、綱などの切るゝやうに、切るまゝに、水中に血のさつと湧き出づるやうに見えければ、切れぬるなりけりとして足を引きければ、蛇引さして「イ本蛇の切れひかされて」上りけり。其の時、足に纏ひたる尾を引きほどきて、足を水に洗ひけれど、蛇のあと失せざりければ、酒にてぞ洗ふと人の云ひければ、酒取りに遣りて洗ひなどして、後に從者ども呼びて、尾の方を引き上げさせたりければ、大きなりなども疎かなり。切口の大きき徑一尺ばかり有らんと





とぞ見えける。頭の方の切れを見せに遣りたりければ、彼方の岸に大きな木の根の有りけるに、頭の方を  
數多かへり纏ひて、尾をさしおこして、足を纏ひて引くなりけり。力の劣りて中より切れにけるなめり。我  
身の切るゝをも知らず引きけん、あさましき事なりかし。其後蛇の力の程、幾人ばかりの力にか有りしと試  
みんとて、大きなる繩を蛇のまきたる所につけて、人十人ばかりして引かせけれども、猶足らずくと云ひ  
て、六十人ばかりかゝりて引きける時にぞ、斯ばかりぞ覺えしと云ひける。其れを思ふに、經頼が力は、  
さは百人ばかりが力を持たるにやと覺ゆるなり。

(四) 魚養の事

今は昔、遣唐使の唐土にある間に、妻を設けて子を産せつ。其子、未だ幼き程に日本に歸る。妻に契りて  
云はく、「異遣唐使往かんに付けて消息やるべし。又この子、乳母離れん程には迎へ取るべし」と契りて歸  
朝しぬ。母、遣唐使の來る毎に、消息や有ると尋ねれど、あへて音も無し。母大きに恨みて、此兒を抱きて  
日本へ向きて、兒の頸に「遣唐使某が子」と云ふ簡を書きて、結びつけて、「宿世有らば、親子の中は行  
き逢ひなん」と云ひて、海に投げ入れて歸りぬ。父或時、難波の浦の邊を行くに、沖の方に、鳥の浮びたる  
やうにて白き物見ゆ。近くなるまゝに、見れば童に見なしつ。怪しければ馬を控へて見れば、いと近く寄り  
來るに、四つばかりなる兒の白くをかしげなる、浪に附きて寄り來たり。馬を打ち寄せて見れば、大きな  
魚の背中に乘れり。從者をもちて抱き取らせて見ければ、頸に札あり、「遣唐使某が子」と書けり。さは我



が子にこそ有りけれ。唐土にて云ひ契りし兒を問はずとて、母が腹立ちて海に投げ入れてけるが、然かるべき縁有りて、斯く魚に乗りて來たるなめりと、哀れに覺えて、いみじう哀しくて養ふ。遣唐使の往きけるに附けて、此由を書き遣りたりければ、母も今ははかなきものに思ひけるに、斯くと聞きてなん希有の事なりと喜びける。さて此子、大人に成るまゝに、手をめでたく書きけり。魚に助けられたりければ、名をば魚養とぞ附けたりける。七大寺の額どもは、是れが書きたるなりけりと。

## (五) 新羅國、后金燭、事

是れも今は昔、新羅國に后おはしけり。其后忍びて密男みそめを設けてけり。御門、此由を聞き給ひて、后を捕へて、髪に繩を附けて上へ釣りつけて、足を二三尺引き上げて置きたりければ、すべきやうも無くて、心中に思ひ給ひけるやう、斯かる悲しき目を見れども、助くる人も無し。傳へて聞けば、此國より東に日本と云ふ國有るなり。其國に長谷觀音と申す佛現じ給ふなり。其の御慈悲、此國まで聞えてはかりなし。額かぶたもと「額イ本」を懸け奉らば、何どかは助け給はざらんとて、目をふさぎて念じ入り給ふ程に、金の燭足しやくそくの下に出で來ぬ。其れを踏へて立てるに、凡て苦しみ無し。人の見るには此燭見えす。日比有りて免さ「底本かニ誤ル一本ニヨル」れ給ひぬ。後に后持ち給へる寶どもを、多く使を差して長谷寺に奉り給ふ。其中に大きな鈴、鏡、金の簾かたびら今に有りとぞ。彼の觀音念じ奉れば、他國の人も臉かほを蒙らずと云ふ事無しとなん。

## (六) 珠の價无量、事

是れも今は昔、筑紫に大夫貞重さだしげと申す者有りけり。此比有る箱崎の大夫則重のりしげが祖父なり。其の貞重京上りしけるに、故宇治殿「〇頼通」に參らせ、又私の知りたる人々にも心ざさんとて、唐人に物を六七千疋が程借るとて、太刀を十腰とこを質ちかに置きける。さて京に上りて宇治殿に參らせ、思ひのまゝに、私の人々に遣りな「底本をニ誤ル、一本ニヨル」として歸り下りけるに、淀よどにて船に乗りける程に、人鬘まゆ應こたしたりければ、御料ごりょう「イ本是れを」食ひなどして居たりける程に、端舟はなふねにて商ひする者ども寄り來て、「其物を買ふ。彼の物を買ふ」など尋ね問ひける中に、「玉をや買ふ」と云ひけるを、聞き入る人も無かりけるに、貞重が舍人に仕りける男おとこ、舟の舳しっぽに立てりけるが、「此處へ持ておはせ。見ん」と云ひければ、袴の腰より眞珠まゆたまの、大きな豆ばかり有りけるを取り出だして取らせたりければ、著たりける水干みづのかわを脱ぎて、「是れに代へてんや」と云ひければ、玉の主ぬしの男、所得しよとくしたりと思ひけるに、惑ひ取りて、舟さし放ちて去にければ、舍人も高く買ひたるにやと思ひけれども、惑ひ去にければ、悔しと思ふく、袴の腰に包みて、こと水干着更へてぞ有りける。斯かる程に日數積りて、博多はくたと云ふ所に行き著きにけり。貞重舟より下るまゝに、物賃ものぢしたりし唐人の許に、「質は少なかりしぞ。物は多く有りし」など云はんとて行きたりければ、唐人も待ち喜びて、酒飲ませなどして物語しける。此玉持たまもちの男、下衆唐人に逢ひて、「玉を買ふ」と云ひて、袴の腰より玉を取り出でて取らせければ、唐人玉を受け取りて、手の上に置きて打振りて見るまゝに、あさましと思ひたる顔氣色にて、「是れはいくら程」と問ひければ、欲しと思ひたる顔氣色を見て、「十貫」と云ひければ、惑ひて



「十貫に買はん」と云ひけり。「誠は二十貫」と云ひければ、其れをも惑ひ買はんと云ひけり。さては價高き物にや有らんと思ひて、「給べ、先づ」と乞ひけるを、惜みけれども、いたく乞ひければ、我にも有らで取らせたりければ、今能く定めて賣らんとて、袴の腰に包みて退きにければ、唐人すべきやうも無くて、貞重に向ひたる船頭が許に来て、其事とも無くさへづりければ、此船頭打領きて貞重に云ふやう、「御從者の中に玉持ちたる者あり。其玉取りて給はらん」と云ひければ、貞重人を呼びて、「此供なる者の中に玉持ちたる者やある。其れ尋ねて呼べ」と云ひければ、此囀る唐人走り出でて、やがて其男の袖をひかへて、「くは、是れぞく」とて引き出でたりければ、貞重「誠に玉や持ちたる」と問ひければ、蓋々にさぶらふ由を云ひければ、「いで、くれよ」と乞はれて、袴の腰より取り出でたりけるを、貞重、郎等してう「と校本」らせけり。其れを取りて、對ひ居たる唐人、手に入れ受取りて、打振りて見て、立ち走り内に入りぬ。何事にか有らんと見る程に、貞重が七拾貫が質におきし太刀どもを、十ながら取らせたりければ、貞重はあきれたるやうにてぞ有りける。古水干一つに換へたる物を、そこばくの物に換へて止みにけん。實にあきれぬべき事ぞかし。玉の價は限り無き物と云ふ事は、今始めたる事には有らず。筑紫に、たうしせうずと云ふ者有り。其れが語りけるは、物へ行きける道に、男の「玉や買ふ」と云ひて、反古の端に包みたる玉を、懐ろより引き出で、取らせたりけるを見れば、木薬子よりも小さき玉にてぞ有りける。「是れはいくら」と問ひければ、「絹二十疋」と云ひければ、あさましと思ひて、物へ行きけるを止て、玉持の男具して家に歸りて、

絹のありけるまゝに、六十疋ぞ取らせたりける。「是れは二十疋のみはすまじき物を、少なく云ふがいとはしさに、六十疋を取らするなり」と云ひければ、男喜びていにけり。其玉を持ちて唐に渡りてけるに、道の程恐ろしかりけれども、身をも放たず、守などのやうに頸に懸けてぞ有りける。悪しき風の吹きければ、唐人は悪しき浪風に逢ひぬれば、船の内に一の寶と思ふ物を海に入るなるに、「此せうずが玉を海に入れん」と云ひければ、せうずが云ひけるやうは、「此玉を海に入れては、生きてもかひ有るまじ。唯だ我身ながら入れば入れよ」とて抱へて居たり。さすがに人を入れるべきやうも無かりければ、とかく云ひける程に、玉失ふまじき報や有りけん、風直りにければ、喜びて入れずなりにけり。其舟の一の船頭と云ふ者も、大きな玉持ちたりけれども、其れは少し平にて、此の玉には劣りてぞ有りける。斯くて唐に行き着きて、玉買はんと云ひける人の許に、船頭が玉を、此せうずが持たせて遣りける程に、道に落してけり。あきれ騒ぎて、歸りもとめけれども、何處にか有らんずと思ひわびて、我が玉を具して、「そこの玉落しつれば、すべき方無し。其れが代りに是れを見よ」とて取らせたれば、「我が玉は是れには劣りたりつるなり。其玉の代りに、此玉を得たらば、罪深かりなん」とて返しけるぞ、さすがに此處の人には違ひたりける。此國の人ならば、取らざらんや。斯くて此失ひつる玉の事を歎く程に、遊女の許に往にけり。二人物話しける序でに、胸を探りて、「など胸は騒ぐぞ」と問ひければ、「云々の人の玉を落して、其れが大事なる事を思へば、胸騒ぐぞ」と云ひければ、「理なり」とぞ云ひける。さて歸りて後二日ばかり有りて、此の遊女の許より、「さした



る事なん云はんと思ふ。今の程時はさず來」と云ひければ、何事か有らんとて、急ぎ行きたりけるを、例の入る方よりは入れずして、隠れの方より呼び入れければ、如何なる事にか有らんと思ふ／＼入りたりければ、「是れは、若し其れに落したりけん玉か」とて、取り出でたるを見れば、違はず其の玉なり。「こは如何に」と、あさましくて問へば、「こゝに玉賣らんとて過ぎつるを、さる事云ひしぞかしと思ひて、呼び入れて見るに「底本ひニ誤ル、一本ニヨル」、玉の大きなりつれば、若しさもやと思ひて云ひ留めて、呼びに遣りつるなり」と云ふに、「ことも疎かなり。いづくぞ、其の珠持ちたりつらん者は」と云へば、「彼處に居たり」と云ふを、呼び取りてやりて、玉の主の許に率て行きて、「是れは云々して、其程に落したりし玉なり」と云へば、え争はで、「其程に見附けたる玉なりけり」とぞ云ひける。聊かなる物取らせてぞ遣りける。さて其玉を返して後、唐綾一つをば、唐には美濃五疋が程にぞ用ゐるなる。せうずが玉をば唐綾五千段にぞ代へたりける。其の價の程を思ふに、此處にては絹六十疋に代へたる玉を、五萬貫に賣りたるにこそ有んなれ。其れを思へば、貞重が七十貫が質を返したりけんも、驚くべくも無き事にて有りけりと、人の語りしなり。

## (七) 北面ノ女雜使六ノ事

是れも今は昔、白河院の御時、北面の雜使に巧者き女有りけり。名をば六とぞ云ひける。殿上人どももてなし興じけるに、雨打そぼふりて、徒然なりける日、或人「六呼びて、徒然慰めん」とて、使をやりて「六呼びて來」と云ひければ、程も無く「六召して參りて候ふ」と云ひければ、「あなたより内の出居の方へ具し

て來」と云ひければ、侍出で來て、「此方へ參り給へ」と云へば、「便無く候ふ」など云へば、侍歸り來て「召し候へば、便無く候ふと申して、恐れ申し候ふなり」と云へば、拒辭て云ふにこそと思ひて、「など斯くは云ふぞ。唯だ來」と云へども「僻言にてこそ候ふらめ。先々も、内御出居などへ參る事も候はぬに」と云ひければ、此多く居たる人々、「唯だ參り候へ。やうぞ有るらん」と責めければ、「筋無き態に候へども、召しにて候へば」とて參る。此主見やりたれば、刑部録「底本祿、今イ本ニヨル」と云ふ廳官、鬢鬚に白髪まじりたるが、木賊の狩衣に、襖袴着たるが、いとこと端正しく、さやく／＼となりて、扇を笏に取りて、少し俯して蹲り居たり。大方如何に云ふべしとも覺えず、物も云はねば、此の廳官、いよく恐れかしこまりて俯したり。主、さて有るべきならねば、「やや、廳にはまだ何者か候ふ」と云へば、「某彼がし」と云ふ。いと實々しくも覺えずして、廳官後ろさまへすべり行く。此主、「斯う宮づかへすること神妙なれ。見參には必ず入れんぞ。疾う罷りね」とこそやりけれ。この六、後に聞きて笑ひけるとか。

## (八) 仲胤僧都連歌ノ事

是れも今は昔、青蓮院の座主の許へ、七ノ宮「〇覺快法親王」渡らせ給ひたりければ、御徒然慰め參らせんとて、若き僧綱有職など、庚申して遊びけるに、上童のいとにくさげなるが、瓶子取りなどしありきけるを、或僧忍びやかに、「上童大童子にも劣りたり」と連歌にしたりけるを、人々しばし案する程に、仲胤僧都其の座に有りけるが、「や、胤早う附けたり」と云ひければ、若き僧たち、如何にと顔をまもり合ひ侍りけ



るに、仲胤、「祇園の御會を待つばかりなり」と附けたりけり。是れを各、「此連歌は如何に附けたるぞ」と、忍びやかに云ひ合ひけるを、仲胤聞きて、「や、我黨、連歌だに繼がぬと附けたるぞかし」と云ひたりければ、是れを聞き傳へたる者ども、一度にはつと響み笑ひけりとか。

## (九) 大將慎事

是れも今は昔、月の大將星を犯すと云ふ勸文を奉れり。よりて近衛大將重く慎み給ふべしとて、小野宮右大將「○實頼」はさまぐの御祈ども有りて、春日社、山階寺などにも、御祈り數多せらる。其時の左大將は、枇杷左大將仲平と申す人にてぞおはしける。東大寺の法藏僧都は、此の左大將の御祈の師なり。定めて御祈の事有りなんと待つに、晋もし給はねば、覺東なき「一本さ」に、京に上りて枇杷殿に参りぬ。殿逢ひ給ひて、「何事にて上られたるぞ」とのたまへば、僧都申しけるやう、「奈良にて承れば、左右大將慎み給ふべしと、天文博士勘へ申したりとて、右大將殿は、春日社、山階寺などに、御祈さまぐに候へば、殿よりも定めて候ひなと思ひ給へて、案内つかうまつるに、「さる事も承らず」と、皆人「イ本々ニ作ル」申し候へ「イ本ニヨリテ補フ」ば、覺東なく思ひ給へて参り候ひつるなり。なほ御祈候はんこそ善く候はめ」と申しければ、左大將のたまふやう、「尤も然るべき事なり。されど己が思ふやうは、大將の慎むべしと申すなるに、己れも慎まば、右大將のために悪しうもこそ有れ。彼の大將は才も賢くいますがり。年も若し。長く朝廷に仕うまつるべき人なり。己れにおきては、させる事も無し。年も老いたり。如何にもなれ、何條ことか有ら

んと思へば、祈らぬなり」とのたまひければ、僧都ほろ／＼「底本いろ／＼ニ作ル、今校本ニヨル」とうち泣きて、「百千の御祈に勝るらん。此の御心の定にては、事のおそり更に候はじ」と云ひて退出ぬ。されば實に事無くて、大臣に成りて、七十餘りまでなんおはしける。

## (十) 御堂關白、御犬晴明等きどくの事

今は昔、御堂關白殿、法成寺を建立し給ひて後は、日毎に御堂へ参らせ給ひけるに、白き犬を愛してなん飼はせ給ひければ、いつも御身を離れず御供しけり。或日例の如く御供しけるが、門を入らんとし給へば、此犬御さきに塞るやうに吠え廻りて、内へ入れ奉らじとしければ、何條とて、車より下りて入らんとし給へば、御衣の裾を食ひて、引き留め申さんとしければ、如何さまやう有る事ならんとて、櫓を召し寄せて御尻を掛けて、晴明に「きと參れ」と、召しに遣はしたりければ、晴明即ち参りたり。「斯かる事の有るは如何が」と尋ね給ひければ、晴明暫し占ひて申しけるは、「是れは、君を呪詛し奉りて候ふ物を道に埋みて候ふ。御越し有らましかば悪しく候ふべき。犬は通力のものにて、告げ申して候ふなり」と申せば、「さて其れは何處にか埋みたる、顯はせ」とのたまへば、「安く候ふ」と申して、暫し占ひて、「此處にて候ふ」と申す所を掘らせて見給ふに、土五尺ばかり掘りたりければ、案の如く物有りけり。土器を二つ打合せて、黄なる紙捻にて十文字に繋げたり。開いて見れば中には物も無し。朱砂にて一文字を土器の底に書きたるばかりなり。「晴明が外には知りたる者候はず。若し道摩法師や仕りたるらん。糺底本、報ニ作ル、イ本ニヨル」し





て見候はん」とて、懐ろより紙を取り出だし、鳥の姿に引き結びて、呪を誦しかけて、空へ投げ上げたれば、忽ちに白鷺に成りて、南を指して飛び行きけり。「此鳥の落ちつかん所を見て参れ」とて、下部を走らするに、六條坊門萬里小路邊に、古りたる家の諸折戸の中へ落ち入りけり。即ち家主老法師にて有りける、掘め取りて参りたり。呪詛の故を問はるゝに、「堀川左大臣顯光公の相談を得て、仕りたり」とぞ申しける。「此上は流罪すべけれども、道摩が咎には有らず」とて、「向後、斯かる業すべからず」とて、本國播磨へ追ひ下だされにけり。此顯光公は、死後に惡靈と成りて、御堂殿邊へは祟を成されけり。惡靈左府と名づく云々。犬はいよく不便にせさせ給ひけるとなん。

(十一) 高階俊平が弟入道竿術事

是れも今は昔、丹後前司高階俊平と云ふ者有りけり。後には法師に成りて、丹後入道とてぞ有りける。其れが弟にて、司も無くて有る者有りけり。其れが主の許に下りて、筑紫に有りける程に、新らしく渡りたりける唐人の、竿いみじくおく有りけり。其れに逢ひて、「竿おく事習はん」と云ひければ、初めは心にも入れで教へざりけるを、少しおかせて見て、「いみじく竿おきつべかりけり。日本に有りては何にかはせん。日本には一本アリ」竿おく道、いとしも賢からぬ所なり。我れに具して唐に渡らんと云はど、教へん」と云ひければ、「能くだに教へて、其の道に賢くだにも成りなば、云はんこそ従はめ。唐に渡りても、用ゐられでだに有りぬべくは、云はん隨ひて、唐にも具せられて往かん」などと、言善く云ひければ、其れになん引



かれて、心に入れて教へける。教ふるに隨ひて、一事を聞きては十事も知るやうになりければ、唐人もいみじくめで、我が國に竿おく者は多かれど、汝ばかり此の道に心得たる者は無きなり。變らず我に具して唐へ渡れ」と云ひければ、「更なり。云はんに隨はん」と云ひけり。「此の竿の道には、病する人をおき止むる術も有り。又病せねども、憎し妬しと思ふ者を、立所におき殺す術など有るも、更に惜しみ隠さじ。君に傳へんとす。確に我に具せんと云ふ誓言立てよ」と云ひければ、まほには立てず、少しは立てなどしければ、「猶人殺す術をば、唐へ渡らん舟の中にて傳へん」とて、他事どもをば能く教へたりけれども、其一事をば控へて教へざりけり。斯かる程に能く習ひ傳へてけり。其れに俄に主の事有りて上りければ、其供に上ほりけるを、唐人開きて留めけれども、「如何で年比の君の斯かる事有りて、俄に上り給はん、送りせでは有らん。思ひ知り給へ。約束をば違ふまじきぞ」など、贈しければ、實にと唐人思ひて、「さは必ず歸りて來よ。今日明日にても唐へ歸らんと思ふに、君の來たらんを待ちつけて渡らん」と云ひければ、其の契りを深くして京に上りにけり。世の中のすさまじきまゝには、やをら唐にや渡りなましと思ひけれども、京に上りにければ、親しき人々に云ひ留められて、俊平入道など聞きて制し留めければ、筑紫へだにえ往かずなりにけり。此の唐人は暫しは待ちけるに、音もせざりければ、わざと使おこせて、文を書きて怨みおこせけれども、「年老いたる親の有るが、今日明日とも知らねば、其れが成らんやう見果て、往かんと思ふなり」と云ひ遣りて、行かずなりにければ、暫しこそ待ちけれども、謀りけるなりけりと思へば、唐人は唐に歸り渡り

て、能く呪ひて行きにけり。初めはいみじく賢かりける者の、唐人に呪はれて後には、いみじく惚けて、物も覺えぬやうにて有りければ、しわびて法師に成りてけり。入道の君とて惚けくとして、させる事無き者にて、俊平入道が許と、山寺などに通ひてぞ有りける。或時、若き女房どもの集まりて庚申しける夜、此入道の君、片隅に惚けたる體にて居たりけるを、夜更けけるまゝにねぶたがりて、中に若く誇りたる女房の云ひけるやう、「入道の君こそ、斯かる人をはかしく物語などもするぞかし。人々笑ひぬべからん物語し給へ。笑ひて目を覺さん」と云ひければ、入道「己れは口手づつにて、人の笑ひ給ふばかり〔底本給中トアリ、按本ニヨル〕の物語はえし侍らじ。さは有りとも、笑はんとだに有らば、笑はかし奉りてん」と云ひければ、「物語はせじ。唯だ笑はかさんと有るは、猿樂をし給ふか。其れは物語よりは勝る事にてこそ有らめ」と、まだしきに笑ひければ、「さも侍らず。唯だ笑はかし奉らんと思ふなり」と云ひければ、「こは何事ぞ、疾く笑はかし給へ。いづらく」と責められて、何にか有らん、物持ちて火の明き所へ出で來たりて、何事せんずるぞと見れば、竿の袋を引き解きて、竿をさらくと出だしければ、是れを見て女房ども、「是れ、をかしき事にて有るか」と、「いざ、笑はん」など嘲るを、答もせで、竿をさらくと置き居たりけり。置き果て、廣さ七八分ばかりの竿の有りけるを、一つ取り出で、手に捧げて、「御前たち、さはいたく笑ひ給ひて佗び給ふなよ。いざ笑はかし奉らん」と云ひければ、「其の竿捧げ給へるこそ、迂愚がましくてをかしけれ。何事にて佗ぶばかりは笑はんぞ」など云ひ合ひたりけるに、其の八分ばかりの竿をおき加ふる



と見れば、有る人皆ながら、漫に笑壺に入りけり。いたく笑ひて留まらんとすれどもかなはず。腹の腸切るゝ心地して、死ぬべく覺えければ、涙をこぼし、すべき方無くて、笑壺に入りたる者ども、物をだにえ云はで、入道に向ひて手を摩りければ、「さればこそ申しつれ。笑ひ飽き給ひぬや」と云ひければ、領き騒ぎて、伏しかへり笑ふく手を摩りければ、能く佗びしめて後に、置きたる竿をさらくとおし毀ちたりければ、笑ひさめにけり。「今暫し有らましかば死なまし。又斯ばかり堪へ難き事こそ無かりつれ」とぞ云ひ合ひける。笑ひ困じて集まり伏して、病むやうにぞしける。斯かれば、人をおき殺し、おき生くる術有りと云ひけるをも、傳へたらましかば、いみじからましとぞ人も云ひける。竿の道は、恐ろしき事にぞ有りけるとなん。

## 宇治拾遺物語 卷第十五

## (一) 清見原天皇與大友皇子合戦の事

今は昔、天智天皇の御子に、大友皇子と云ふ人有りけり。太政大臣に成りて、世の政事を行ひてなん有りける。心の中に、帝失せ給ひなば、次の帝には、我ならんと思ひ給ひけり。清見原天皇「○天武」、其時は春宮にておはしましけるが、此の氣色を知らせ給ひければ、大友皇子は時の政事をし、世の覺えも威勢も猛なり。我は春宮にて有れば、勢も及ぶべからず、あやまたれなんとおそり思ひて、帝病づき給ふ、則ち、「吉野山の奥に入りて、法師に成りぬ」と云ひて籠り給ひぬ。其の時大友皇子に人申しけるは、「春宮を吉野山に籠めつるは、虎に羽を付けて野に放つものなり。同じ宮に据ゑてこそ心のまゝにせめ」と申しければ、實にもと思ひて、軍を整へて迎へ奉るやうにして、殺し奉らんと謀り給ふ。此の大友皇子の妻にては、春宮の御女ましかれば、父の殺され給はん事を悲しみ給ひて、如何で此事告げ申さんと思しけれど、すべきやう無かりけるに、思ひわび給ひて、餅の包焼の有りける腹に、小さく文を書きて、押し入れて奉り給へり。春宮是れを御覺して、さらでだに恐れ思しける事なれば、さればこそとて、急ぎ下家の狩衣袴を著給ひて、藥杵を履きて、宮の人にも知られず、唯だ一人山を越えて、北さまにおはしける程に、山城國田原と云ふ所へ、道も知り給はねば、五六日にぞ辿るくおはし着きにける。其の里人、怪しく氣はひの氣高く覺え





ければ、高坏たかぐさに粟を焼き、又茹茹などで参まらせたり。其の二色の粟を、「思ふ事協ふべくは、生ひ出で、木に成れ」とて、片山の上に埋み給ひぬ。里人は是れを見て、怪しがりて標しるしをさして置きつ。そこを出で給ひて、志摩國さまへ山に添つひて出で給ひぬ。其國の人、怪しがりて問ひ奉れば、「道に迷ひたる人なり。喉乾きたり、水飲ませよ」と仰せられければ、大きな釣瓶つるべに水を汲みて参まらせたりければ、喜びて仰せられけるは、「汝が族うぢに此の國の守とはなさん」とて美濃國へおはしぬ。此國の器もろ候まがの渡わたに、船も無くて立ち給ひたりけるに、女の大きな舟に布入れて洗ひけるに、「此渡、何ともして渡してんや」とのたまひければ、女申しけるは、「一昨日、大友の大おほ臣おみの御使と云ふ者來たりて、渡の船ども皆取り隠させていにかば、是れを渡し奉りたりとも、多くの渡わたえ過ぎさせ給ふまじ。斯く謀まりぬる事なれば、今軍實め來らんずらん。如何がして遁れ給ふべき」と云ふ。「さては如何がすべき」とのたまひければ、女申しけるは「見奉るやう、尋常たにはいませぬ人にこそ。さらば隠し奉らん」と云ひて、湯舟をうつぶしに成して、其下に伏せ奉りて、上に布を多く置きて、水汲み懸けて洗ひ居たり。暫しばかり有りて、兵四五百人ばかり來たり。女に問ひて云はく、「是れより人や渡りつる」と云へば、女の云ふやう、「やごとなき人の、軍千人ばかり具しておはしつる、今は信濃國には入り給ひぬらん。いみじき龍のやうなる馬に乗りて、飛ぶが如くしておはしき。此少勢にては、追ひ付き給ひたりとも、皆殺され給ひなん。是れより歸りて、軍を多く整へてこそ追ひ給はめ」と云ひければ、誠まことに思ひて、大友ノ皇子の兵引き返しにけり。其後女に仰せられけるは、「此邊に軍催さん



に出で來なんや」と聞ひ給ひければ、女走りまどひて、其國の宗と有るものどもを催し語らふに、即ち二三千人兵出で來にけり。其れを引き具して、大友、皇子を追ひ給ふに、近江國大津と云ふ所に追ひ付きて戰ふに、皇子の軍破れて、散りぐに逃げける程に、大友、皇子、遂に山崎にて討たれ給ひて頭を取られぬ。其れより春宮、大和國に歸りおはしてなん位に即き給ひけり。田原に埋み給ひし燒栗茹栗は、形も變らず生ひ出でけり。今に田原の御栗とて奉るなり。志摩の國にて水めさせたる者は、高階氏の者なり。されば其れが子孫國守にては有るなり。其の水召したりし釣瓶は、今に藥師寺に有り。墨俣の女は、不破の明神にてましましけりとなん。

## (二) 頼時が胡人見たる事

今はむかし、胡國と云ふは、唐よりも遙に北と聞くを、奥州の地に續きたるにや有らんとて、宗任法師とて筑紫に有りしが、語り侍りけるなり。此の宗任が父は頼時とて、陸奥國の夷にて、朝廷に従ひ奉らずとて、攻めんとせられける程に、「古より今に至るまで、朝廷に勝ち奉る者無し。我は過ぐさ」二字たすい本」ずと思へども、責をのみ蒙れば、はるくべき方無きを、奥地より北に見渡さるゝ地あんなり。そこに渡りて有様を見て、さてもありぬべき所ならば我に順ふ人の限りを、背率てわたして住まん」と云ひて、先づ舟一つを調へて其れに乗りて行きたりける人々、頼時、厨川の次郎、鳥海の三郎、さては又むつまじき郎等共二十人ばかり、食物酒など多く入れて、舟を出だしてければ、いくばくも走らぬ程に見渡しなりければ、渡り著き

「イ本アリ」けり。左右は遙なる葦原に「イ本ニヨリテ補フ」ぞ有りける。大きな川の湊を見付けて、其の湊にさし入りにけり。人や見ゆると見けれども人げも無し。陸に上りぬべき所や有ると見けれども、葦原にて道踏みたる方も無かりければ、若し人氣する所や有ると、川を上ほりざまに七日まで上りにけり。其れが唯だ同じやうなりければ、あさましきわざかなとて、猶二十日ばかり上りけれども、人の氣はひもせざりけり。三十日ばかり上りけるに、池の響くやうにしければ、如何なる事の有るにかと恐ろしくて、葦原にさし隠れて、響くやうにする方を覗きて見ければ、胡人とて繪に書きたる姿したる者の、赤き物にて頭結ひたるが、馬に乗り連れて打出でけり。是れは如何なる者ぞと見る程、打續き數知らず出で來にけり。河原のはたに集まり立ちて、聞きも知らぬ事を囁り合ひて、河にはらくと打入りて渡りける程に、千騎ばかりや有らんとぞ見え渡る。是れが足音の響にて、遙かに聞えけるなりけり。徒の者をば、馬に乗りたる者の側に引き付けくして渡りけるをば、唯だ徒渡りする所なめりと見けり。三十日ばかり上りつるに、一所も瀬無かりしに「イ本ナシ」川なれば、かれこそ瀬瀬なりけれと見て、人過ぎて後にさし寄せて見れば、同じやうに底ひも知らぬ淵にてなん有りける。馬筏を作りて泳がせけるに、徒人は其れに取り付きて渡りけるなるべし。猶上るともはかりもなく覺えければ、恐ろしくて其れより歸りにけり。さていくばくも無くてぞ頼時は失せにける。されば胡國と日本の東の奥の地とは、さし合ひてぞ有んなんと申しける。

## (三) 賀茂祭のかへり武正兼行御覽の事



是れも今は昔、賀茂祭の供に、下野、武正、秦、兼行つかはしたりけり。其のかへさ、法性寺殿、紫野にて御覽じけるに、武正、兼行、殿下御覽すと知りて、殊に引きつくるひて渡りけり。武正殊に氣色して渡る。次に兼行又渡る。各取りふくに云ひ知らず。殿御覽じて、「今一度北へ渡れ」と仰せ有りければ、又北へ渡りぬ。さて有るべきならねば、又南へ歸り渡るに、この度は兼行先に南へ渡りぬ。次に武正渡らんずらんと人待つ程に、武正や久しく見えず。是は如何にと思ふ程に、向ひに引きたる幔より東を渡るなりけり。如何に／＼と待ちけるに、幔より冠の巾子ばかり見えて、南へ渡りけるを、人々「猶すぢなき者の心際なり」と譽めけりとか。

## (四) 門部府生海賊射返す事

是れも今は昔、門部府生と云ふ舍人有りけり。若く身は貧しくてぞ有りけるに、眞纏を好みて射けり。夜も射ければ、僅なる家の葺板を抜きて燈して射けり。妻も此事をうけず、近邊の人も、「あはれ、よしなき事し給ふものかな」と云へども、「我が家も無くて的射んは、誰も何か苦しかるべき」とて、猶葺板を燈して射る。是れを誇らぬ者一人も無し。斯くする程に、葺板皆失せぬ。はてには椽、椽を削り焼きつ、又後には棟、棟を削り焼きつ。後には桁柱皆削り焼く。「底本き、一本ニヨル」。「是れあさましき物のさまかな」と云ひ合ひたる程に、板敷下桁までも皆削り焼きて、隣の人に宿りけるを、家主、此人の様體を見るに、此家も毀ち焼きなんぞと思ひて、いとへども、「さのみこそ有れ。待ち給へ」など云ひて過ぐる程に、能く射る

由聞え有りて、召し出だされて、賭弓仕うまつるに、めでたく射ければ叡感有りて、はてには相撲の使に下りぬ。よき相撲ども多く催し出でぬ。又數知らず物儲けて上りけるに、かばね島と云ふ所は海賊の集まる所なり。過ぎ行く程に、具したる者の云ふやう、「あれ御覽候へ。あの舟どもは海賊の舟どもにこそ候ふめれ。こは如何がせさせ給ふべき」と云へば、此の門部府生云ふやう、「男な騒ぎそ。千萬の海賊有りとも、今見よ」と云ひて、皮子より賭弓の時著たりける装束取り出で、麗はしく装束きて、冠老懸など有るべき定にしければ、従者ども、「こは物に狂はせ給ふか。叶はぬまでも桶つきなどし給へかし」と、苛めき合ひたり。麗はしく取り付けて、肩ぬぎて、馬手後見まはして、屋形の上に立ちて、「今は四十六歩に寄り來にたるか」と云へば、従者ども「大方とかく申すに及ばず」とて、黄水をつきあひたり。「如何に、斯く寄り來にたるか」と云へば、「四十六歩に近づき候ひぬらん」と云ふ。時に上屋形へ出で、あるべきやうに弓立して、弓をさし鬨して、暫し有りてうちあげたれば、海賊が宗との者、黒ばみたる物著て、赤き扇を開き遣ひて、「疾く／＼漕ぎ寄せて、乗り移りて移し取れ」と云へども、此の府生騒がずして、引き堅めてとるところと放ちて、弓たふして見やれば、この矢目にも見えずして、宗との海賊が居たる所へ入りぬ。はやく左の目に、平題箭立ちにけり。海賊「や」と云ひて、扇を投げ捨て、仰様に倒れぬ。矢を抜きて見るに、うるはしく戦ひなどする時のやうにも有らず、塵ばかりの物なり。是れを此海賊ども見て、「や、是れはうちある矢にも有らざりけり。神箭なりけり」と云ひて、「疾く／＼各漕ぎもどりぬ」とて逃げにけり。其時、



門部府生うす笑ひて、「某等が前には、あぶなく立つ奴ばらかな」と云ひて、袖うち下して小睡はきて居たりけり。海賊騒ぎ逃げゝる程に、袋一つなど、少々物ども落しける、海に浮びたりければ、此府生取りて、笑ひて居たりけるとか。

(五) 土佐判官代通清人違して關白殿に奉合事

是れも今は昔、土佐判官代通清と云ふ者有りけり。歌を詠み、源氏狭衣などを誦べ、花の下月の前とすきありきけり。斯かる好物なれば、後徳大寺左大臣、「大内の花見んずるに必ず」と誘はれければ、通清めでたき事にあひたりと思ひて、やがて破車に乗りて行く程に、後より車二つ三つばかりして人の來れば、疑ひ無き此左大臣のおはすると思ひて、尻の簾をかきあげて、「あなうたて、疾くくおはせ」と、扇を開きて招きけり。はや關白殿「○基通」の物へ御座すなり。招くを見て、御供の隨身馬を走らせて、驅け寄せ、車の尻の簾をかり落してけり。其時ぞ通清あわて騒ぎて、前より轉び落ちける程に、烏帽子落ちにけり。いとく不便なりけりとか。好きぬる者は、少し迂愚にも有りけるにや。

(六) 極樂寺僧施仁王經驗事

是れも今は昔、堀川太政大臣兼通公「底本、兼通公太政大臣トアリ一本ニヨリテ改ム」と申す人、世心地大事に煩ひ給ふ。御祈どもさまざまにせらる。世に有る僧どもの參らぬは無し。參り集ひて御祈どもをす。殿中騒ぐ事限り無し。爰に極樂寺は殿の造り給へる寺なり。其の寺に住みける僧ども、「御祈せよ」と云ふ仰

せも無かりければ、人も召さず。此時に或僧の思ひけるは、御寺に安く住む事は殿の御徳にてこそ有れ。殿失せ給ひなば世に有るべきやう無し。召さずとも參らんとて、仁王經を持ち奉りて、殿に參りて、物騒がしかりければ、中門の北の廊の隅に屈まり居て、つゆ目も見かくる人も無きに、仁王經を他念無く讀み奉る。二時ばかり有りて、殿仰せらるゝやう「極樂寺の僧某の大徳や是れにある」と尋ね給ふに、或人「中門の臨の廊に候ふ」と申しければ、「其れ此方へ呼べ」と仰せらるゝに、人々怪しと思ひ、そこばくのやんごとなき僧をば召さずして、斯く參りたるをだに、由なしと見るたるをしも召しあれば、心もえず思へども、行きて召す由を云へば參る。高僧どもの著き並びたる後ろの縁に屈まりたり。「さて參りたるか」と問はせ給へば、南の簀子に候ふ由を申せば、「内へ呼び入れよ」とて、臥し給へる所へ召し入れらる。無下に物も仰せられず、重くおはしつるに、此僧召す程の御氣色、こよなくよろしく見えければ、人々怪しく思ひけるに、のたまふやう、「寢たりつる夢に、恐ろしげなる鬼どもの、我が身を取りくぐりに打領じつるに、びんづら結ひたる童子の楚持ちたるが、中門の方より入り來て、楚して此鬼どもを打ち拂へば、鬼ども皆逃げ散りぬ」「何ぞの童の斯くはするぞ」と問ひしかば、「極樂寺の某が、斯く煩はせ給ふ事いみじう歎き申して、年來讀み奉る仁王經を、今朝より中門の脇に候ひて、他念なく讀み奉りて祈り申し侍る。其の經の護法の、斯くやませ奉る惡鬼どもを追ひ拂ひ侍るなり」と申すと見て、夢覺めてより、心地の掻い拭ふやうに善ければ、其悦び云はんとて呼びつるなり」とて、手を摩りて拜ませ給ひて、棹に「一本ニヨリテ補フ」懸かりたる御



衣を召してかづけ給ふ。「寺に歸りて猶々御祈よく申す。〔○行カ〕せ」と仰せらるれば、喜びて罷り出づる程に、僧俗の見思へる氣色やんごとなし。中門の脇に、終日に屈み居たりつる、覺え無かりしに、殊の外美しくてぞ罷り出でにける。されば人の祈は、僧の淨不淨には依らぬ事なり。唯だ心に入れたるが驗有るものなり。「母の尼して祈をばすべし」と、昔より云ひ傳へたるも此心なり。

(七) 伊良縁野世恒毘沙門御下文の事

今は昔、越前の國に伊良縁の世恒と云ふ者有りけり。取り分きて仕うまつる毘沙門に、物も食はで物の欲しかりければ、「助け給へ」と申しける程に、門にいとをかしげなる女の、「家主に物云はんと給ふ」と云ひければ、誰にか有らんとて出で逢ひたれば、かはらけに物を一盛「是れ食ひ給へ、物欲しと有りつるに」とて取らせたれば、喜びて取り入れて、唯だ少し食ひたれば、やがて飽き満たる心地して、「二三日は物も欲しからねば、是れを置きて、物の欲しき折毎に、少しづゝ食ひて有りける程に、月ごろ過ぎて、此の物も失せにけり。如何がせんずるとて、又念じ奉りければ、又有りしやうに、人の告げれば、初めにならひて、感ひ出で、見れば、有りし女房のたまふやう、「是れ下文奉らん。是れより北の谷峯百町を越えて中に高き嶺有り。其れに立ちて「なりた」と呼ばば物出で來なん。其れに此文を見せて、奉らん物を受けよ」と云ひていぬ。此下文を見れば、「米二斗渡すべし」と有り。やがて其まゝ行きて見れば、實に高き嶺有り。其れにて「なりた」と呼ばば、恐ろしげなる聲にて答へて出で來たる物あり。見れば、額に角生ひて、目一つ

有る物、赤き鬚鼻禪したる物出で來て、跪きて居たり。「是れ御下文なり。此の米得させよ」と云へば、「さる事候ふ」とて下文を見て、「是れは二斗と候へども、一斗を奉れとなん候ひつるなり」とて、一斗をぞ取らせたりける。其まゝに受け取りて歸りて、其の入れたる袋の米を遣ふに、一斗盡きせざりけり。千萬石取れども、唯だ同じやうにて、一斗は失せざりけり。是れを國守聞きて、此の世恒を召して、「其の袋我に得させよ」と云ひければ、國の内にある身なれば、えいなびずして、「米百石の分奉る」と云ひて取らせたり。一斗取れば、又出できくしてければ、いみじき物儲けたりと思ひて持たりける程に、百石取りはてたれば米失せにけり。袋ばかりになりぬれば、本意なくて返し取らせたり。世恒が許にて、又米一斗出で來にけり。斯くてえも云はぬ長者にてぞ有(○なカ)りける。

(八) 相應和尚上三都卒天事付染殿后奉祈事

今は昔、叡山無動寺に相應和尚と云ふ人おはしけり。比良山の西に、葛川の三瀧と云ふ所にも通ひて行ひ給ひけり。其瀧にて不動尊に申し給はく、「我を負ひて都卒の内院、彌勒尊の御許に率て行き給へ」と、あながちに申しければ、「極めて難き事なれど、強ひて申す事なれば率て行くべし。其尻を洗へ」と仰せければ、瀧の尻にて水浴み、尻能く洗ひて、明王の頭に乗りにて都卒天に登り給ふ。こゝに内院の門の額に、妙法蓮華と書かれたり。明王の給はく、「これ、是れへ參入の者は、此經を誦して入れ。誦せざれば入らず」との給へば、遙に見上げて、相應の給はく、「我れ此經讀みは讀み奉る。誦する事未だ協はず」と。明王「さては口惜



しき事なり。其義ならば參入叶ふべからず。歸りて法華經を誦して後參り給へ」とて、掻き負ひ給ひて葛川へ歸り給ひければ、泣き悲し給ふ事限りなし。さて本尊の御前にて經を誦し給ひて後、本意を遂げ給ひけりとなん。其不動尊は今に無動寺におはします。等身の像にてぞましくける。其の和尚、かやうに奇特の効驗おはしければ、梁殿の后物氣に惱み給ひけるを、或人申しけるは、「慈覺大師の御弟子に、無動寺の相應和尚と申すこそいみじき行者にて侍れ」と申しければ、召しに遣はず。即ち御使に連れて參りて、中門に立てり。人々見れば、長高き僧の鬼の如くなるが、信濃布を衣に著、相の平足駄を履きて、大木櫓子の念珠を持てり。「其體、御前に召し上ぐべき者に有らず、無下の下衆法師にこそ」とて、「唯だ寶子の邊に立ちながら加持申すべし」と各申して、「御階の勾欄の許にて、立ちながら候へ」と仰せ下だしければ、御階の東の脇勾欄に立ちながら、押し懸かりて祈り奉る。宮は寢殿の母屋に臥し給ふ。いと苦しげなる御階、時々御簾の外に聞ゆ。和尚纏に其の聲を聞きて、高聲に加持し奉る。其聲、明王も現じ給ひぬと、御前に候ふ人々、身の毛よだちて覺ゆ。暫し有れば、宮紅の御衣二つばかりにおし包まれて、鞆の如く簾中より轉び出でさせ給うて、和尚の前の寶子に投げおき奉る。人々騒ぎて「いと見苦し。内へ入れ奉りて、和尚も御前に候へ」と云へども、和尚「斯かる乞兒の身にて候へば、如何でか罷り上るべき」とて、更に上らず。はじめ召し上げられざりしを、安からず憤り思ひて、唯だ寶子にて、宮を四五尺あげて打ち奉る。人々しわびて、御几帳どもをさし出だして立て隠し、中門を鎖して人を拂へども、極めて顯露なり。四五度ばかり打ち

奉りて、投げ入れ、祈りければ、もとの如く内へ投げ入れつ。其後和尚罷り出づ。「暫し候へ」と留むれども、「久しく立ちて腰痛く候ふ」とて、耳にも聞き入れずして出でぬ。宮は投げ入れられて後、御物氣さめて、御心地爽かに成り給ひぬ。驗德あらたなりとて、僧都に任ずべき由宣下せらるれども、「かやうの乞兒は、何條僧綱に成るべき」とて返し奉る。其後も召されけれど、「京は人を賤しうする所なり」とて、更に參らざりけるとぞ。

### (九) 仁戒上人往生の事

是れも今は昔、南京に仁戒上人と云ふ人有りけり。山階寺の僧なり。才學寺中に並ぶ輩無し。然かるに俄に道心を起して、寺を出でんとしけるに、其時の別當眞僧都、いみじう惜みて、制し留めて出だし給はず。し佗びて、西の里なる人の女を妻にして通ひければ、人々やうく私語やきたちけり。人に普く知らせんとして、家の門に此女の頭に抱きつきて、後ろに立ち添ひたり。行き通る人見て、あさましがり、心憂がる事限りなし。徒者に成りぬと人に知らせん爲なり。さりながら、此妻と相具しながら、更に近づく事無し。堂に入りて、終夜眠らずして、涙を落して行ひけり。此事を別當僧都聞きて、彌尊みて呼び寄せければ、し佗びて逃げて、葛下郷「郡伊本」の郡司が聲に成りにけり。念珠なども態と持たずして、唯だ心中の道心は彌堅固に行ひけり。こゝに添下郡の郡司、此上人に目を留めて、深く尊み思ひければ、跡も定めず歩きけるしりに立ちて、衣食沐浴等をいとなみけり。上人思ふやう、如何に思ひて此の郡司夫妻は惡





ろに我を訪らふらんとて、其心を尋ねれば、郡司答ふるやう、「何事か侍らん、唯だ貴く思ひ侍れば斯やうに仕るなり。但し一事申さんと思ふ事有り」と云ふ。「何事ぞ」と問へば、「御臨終の時、如何にしてか値ひ申すべき」と云ひければ、上人心に任せたる事のやうに、「いと安き事に有りなん」と答ふれば、郡司手を摩りて喜びけり。さて年比過ぎて、或多雪降りける日、暮方に上人郡司が家に来ぬ。郡司喜びて、例のことなれば、食物下人どもにもいとませず、夫婦手づから自らして召させけり。湯なども浴みて臥しぬ。曉はまた郡司夫婦とく起きて、食物種々に營むに、上人の臥し給へる方香ばしき事限りなし。香ひ一家に充ち満てり。是れは名香など焼き給ふなめりと思ふ。「曉は疾く出でん」とのたまひつれども、夜明くるまで起き給はず。郡司「御粥出できたり。此由申せ」と御弟子に云へば、「腹あしくおはする上人なり。悪しく申して打たれ申さん。今起き給ひなん」と云ひて居たり。さる程に日も出でぬれば、例は斯やうに久しくは寢給はぬに、怪しと思ひて、寄りて音なひけれど音なし。引き開けて見れば、西に向ひ端坐合掌して、早や死に給へり。あさましき事限り無し。郡司夫婦御弟子どもなど、悲しみ泣きみ、且は貴み拜みけり。曉香ばしかりつるは、極樂の迎へなりけりと思ひ合す。終に逢ひ申さんと申し、かば、こゝに来たり給ひてけるにこそと、郡司泣く／＼葬送の事もとり沙汰しけるとなん。

(十) 秦始皇自天竺一來僧禁獄ノ事

今は昔、唐土の秦始皇の代に、天竺より僧渡れり。帝怪しみ給ひて、「是れは如何なる者ぞ。何事に依りて



來たれるぞ。」僧申して云はく、「釋迦牟尼佛の御弟子なり。佛法を傳へん爲に、遙に西天より來たり渡れるなり」と申しければ、帝腹立ち給ひて、「其の姿極めて怪し。頭の髮禿なり。衣の體人に違へり。佛の御弟子と名乗る、佛とは何物ぞ。是れは怪しきものなり。唯だに返すべからず。獄に籠めよ。今より後、斯くの如く怪しき事云はん者を、殺さしむべきものなり」と云ひて、獄に据ゑられぬ。「深く閉ぢ籠めて、重くいましめて置け」と官旨を下されぬ。獄の司の者、官旨のまゝに、重く罪有る者置く所に籠めて置きて、戸に數多じやう鎖しつ。此僧「惡王に逢うて斯く悲しき目を見る、我が本師釋迦牟尼如來、滅後なりともあらたに見給ふらん。我を助け給へ」と念じ入りたるに、釋迦佛丈六の御姿にて、紫磨黄金の光を放ちて、空より飛び來たり給ひて、此の獄門を踏み破りて、此僧を取りて去り給ひぬ。其の序に多くの盜人ども皆逃げ去りぬ。獄の司、空に物の鳴りければ出で見るに、金の色したる僧の光を放ちたるが、大きき丈六なる、空より飛び來たりて、獄の門を踏み破りて、籠められたる天然の僧を取りて行く音なりければ、此由を申すに、御門いみじく恐ぢ懼り給ひけりとなん。其時に渡らんとしける佛法、世下りて、漢には渡りけるなり。

## (十一) 後の千金の事

今は昔、唐土に莊子と云ふ人有りけり。家いみじう貧しくて、今日の食物絶えぬ。隣に監河侯〔底本「かんあとう」下同〕と云ふ人有りけり。其れが許へ、今日食ふべき料の粟を乞ふ。河侯が云はく、「今五日有りておはせよ。千兩の金を得んとす。其れを奉らん。如何でかやんことなき人に、今日參るばかりの粟を奉らん。返すべし己が恥なるべし」と云へば、莊子の云はく、「昨日道を罷りしに、後に呼ばふ聲有り。かへりみれば人無し。唯だ車の輪あとの、窺みたる所に溜りたる少水に、鮒一つふためく、何ぞの鮒にか有らんと思ひて寄りて見れば、少しばかりの水に、いみじう大きな鮒有り。「何ぞの鮒ぞ」と問へば、鮒の云はく、「我は河伯の神の使に江湖へ行くなり。其れが飛び損なひて、此の溝に落ち入りたるなり。喉乾き死なんとす。我を助けよと思ひて呼びつるなり」と云ふ。答へて云はく、「我れ今二三日有りて、江湖もと〇二字衍カ」と云ふ所に遊びしに往かんとす。そこにもて行きて放さん」と云ふに、魚の云はく、「更に其れまで待つまじ。唯だ今日一提ばかりの水を以て喉を潤へよ」と云ひしかば、さてなん助けし。鮒の云ひし事我が身に知りぬ。更に今日の命、物食はずば生くべからず。後の千の金更に益無し」とぞ云ひける。其れより、後の千金と云ふ事名譽せり。

## (十二) 盜跖與三孔子問答の事

是れも今は昔、唐土に柳下惠と云ふ人有りき。世の賢き者にして、人に重くせらる。其弟に盜跖と云ふ者有り。一つの山懐に住みて、諸の悪しき者を招き集めて、己が伴侶として、人の物をば我が物とす。歩りく時は、此悪しき者どもを具する事二三千人なり。道に逢ふ人を亡ぼし、恥を見せ、善からぬ事の限りを好みて過すに、柳下惠道を行く時に、孔子に逢ひぬ「何處へおはするぞ。自ら對面して聞えんと思ふ事の有る



に、かしこくあひ給へり」と云ふ。柳下惠「如何なる事ぞ」と問ふ。「教訓し聞えんと思ふ事は、その舎弟、諸の悪しき事の限りを好みて、多くの人を歎かす、何ぞ制し給はぬぞ。」柳下惠答へて云はく、「己れが申さん事を、敢て用ふべきに有らず。されば歎きながら年月を経るなり」と云ふ。孔子の云はく、「そこ教へ給はずば、我れ行きて教へん。如何が有るべき。」柳下惠云はく、「更におはすべからず。いみじき詞を盡して教へ給ふとも、離くべき者に有らず、却て悪しき事出で來なん。有るべき事に有らず。」孔子云はく、「悪しけれど、人の身を得たるものは、自ら善き事を云ふにつく事も有るなり。其れに悪しかりなん、よも聞かじと云ふ事は僻言なり。よし見給へ、教へて見せ申さん」と、詞を放ちて盜跖が許へおはしぬ。馬より下り門に立ちて見れば、有りと有る物猪鳥を殺し、諸の悪しき事を集へたり。人を招きて、「魯の孔子と云ふ者なん参りたる」と云ひ入るゝに、則ち使歸りて云はく、「音に聞く人なり。何事によりて來たれるぞ。人を教ふる人と聞く。我を教へに來たれるか。我が心に適はば用ひん。適はずば肝膽に作らん」と云ふ。其時に、孔子進み出て、庭に立ちて、先づ盜跖を拜みて昇りて座に著く。盜跖を見れば、頭の髪は上さまにして、亂れたる事蓬の如し。目大きにして見廻轉す。鼻を吹きいからかし、牙を嚙み鬚をそらして居たり。盜跖が云はく、「汝來たれる故は如何にぞ。確に申せ」と、怒れる聲の高く恐ろしげなるをもちて云ふ。孔子思ひ給ふ、豫ても聞きし事なれど、斯くばかり恐ろしき者とは思はざりき。容貌有様、聲まで人とは覺えず、肝心も碎けて震はるれど、思ひ念じて云はく、「人の世に有るやうは、道理をもちて身の飾りとし、心

の控とするものなり。天を戴き地を踏みて、四方を固めとし、公を「底本」に「今一本ニヨル」敬ひ奉る、下を憐れみ、人に情を致す事とするものなり。然るに承れば、心の恣に悪しき事をのみ事とするは、當時は心に適ふやうなれども、終りあしきものなり。されば猶人は善きに隨ふを善しとす。然れば申すに隨ひていきまするべきなり。其事申さんと思ひて参りつるなり」と云ふ。時に盜跖、雷のやうなる聲をして笑ひて云はく、「汝が云ふ事ども一つも當らず。其故は、昔堯舜と申す二人の帝世に尊まれ給ひき。然れども、其子孫世に針さすばかりの所を領らず。又世に賢き人は伯夷叔齊なり。首陽山に臥せり飢え死にき。又その弟子に顔回と云ふ者有りき。賢く教へ奉り「イ本給ひ」しかども、不幸にして命短し。又同じき弟子にて子路と云ふ者有りき。衛「底本れい、イ本ニヨル」の門にして殺されき。然かあれば賢き輩は遂に賢き事も無し。我れ又悪しき事を好めど、災ひ身に來らず。譽めらるゝもの四五日に過ぎず、謗らるゝもの又四五日に「イ本ニヨリテ補フ」過ぎず。悪しき事も善き事も、長く譽められ長く謗られず。然かれば、我が好みに隨ひ振舞ふべきなり。汝又木を折りて冠にし、皮をもちて衣とし、世をおそり、公におち奉るも、二たび魯に遷され、跡を衛にけづらる。など賢からぬ。汝が云ふ所實に愚かなり。速かに走り歸りね。一つも用ゐるべからず」と云ふ。時に孔子又云ふべき事覺えずして、座を立ちて急ぎ出で、馬に乗り給ふに、よく隠しけるにや、轡を二たび取りはづし、鐙を頻りに踏みはづす。是れを世の人「孔子倒れす」と云ふなり。



宇治拾遺物語 終

萬治二己年初冬日

洛陽今出川書室

林和泉掾 板行

珍書保存會 正宗敦夫主幹

希觀の資料、古寫本、古刻本、參考圖録類の原形複製、主に和紙コロタイプ印刷。會員實費標準價美濃判一枚金五錢。(定價の半額)。非豫約、自由選擇の會員組織。細則御申越次第送呈。

第一刊 熊澤蕃山自筆「孝經小解」……定價十圓  
第二刊 宮内省藏「饅頭屋本筋用集」……定價十二圓  
第三刊 森根園父子書入本「本草和名」定價十五圓  
申込所 東京府落合局區内長崎町一六二長島方  
振替東京三六七三四 珍書保存會

日本古典全集

各期五十册 豫約出版  
一册五十錢 全廿五圓

顧問 上通泰先生  
山田孝雄先生  
間新村 出先生

正宗敦夫 編纂校訂

輓近我邦出版界に一期を劃せる廉價版の始祖として、類書の追跡し能はざる至難なる古典複製に精進する事四年。既に第一期五十册、第二期五十册、及第一期再版五十册の刊行を結了す。内容に就ては學界の巨匠擧つて支持し、推賞する處、既に定評あり。愛書家、研學の士が日常の實用書たるを旨とし、國民必讀の典籍として普及を期せり。現在第三期の半に達し昭和五年早春には第四期新版五十册(價格變更)の豫約を募集せんとす。【内容見本、細則御申込次第送呈】

一、本書は學界の翹望に因り「日本古典全集」中、教科用并に不斷に普及を要する諸册を採り、學徒が日常實用の書として其自由選擇に委せり。  
一、本書の價格は凡そ百頁毎に金二十五錢とし、  
\* 一個を以て此單位を示す。但し特殊の用紙印刷を用ひる實費の嵩む書には例外を設く。  
一、送料は \* 一個につき二錢の割合と均定する。  
一、本書は絶えず新版を加へて學界の要望に添うてゆく。若し書肆の店頭に完備せぬ場合は何卒本會へ直接御照會御注文を願ひたし。

昭和四年十月二十日印刷 宇治拾遺物語  
昭和四年十一月十日發行 \* \* \* 定價金七十五錢

編纂者 正宗敦夫

東京府北豊島郡長崎町一六二

發行者 會社 日本古典全集刊行會

代表社員 長島東一

裝幀者 廣川松五郎

東京府北豊島郡長崎町一六二

印刷所 不二印刷所

印刷者 高瀬清吉



發行所

東京府北豊島郡長崎町一六二

會社 日本古典全集刊行會

振替東京七三〇三二



古典文庫 第一回 (昭和四年秋季) 發表書目 \* 一個(百頁)ニ付定價金貳拾五錢也送料 \* 一個二錢均定

古事記	萬葉集(卷一、卷二、卷三)【近刊】	萬葉集品物圖繪 上	西鶴諸國咄(西鶴集)
萬葉集(卷四、卷五、卷六)【近刊】	萬葉集品物圖繪 下	一目玉鉢(西鶴集)	
萬葉集(卷七、卷八、卷九)【近刊】	御堂關白記 上	諸艶大鑑(西鶴集)	
萬葉集(卷十、十一、十二)【近刊】	御堂關白記 下	西鶴置土産(西鶴集)	
萬葉集【以下全卷嗣出】	紫式部日記	好色盛衰記(西鶴集)	
古風土記集 上(出雲)	清少納言(枕草紙)	古數學書集 上	
古風土記集 中(播磨)	蜻蛉日記	古數學書集 下	
古風土記集 下	後撰和歌集(片假字本)	賀茂眞淵集	
探輯諸國風土記	竹取、大和、住吉、唐物語	玉かつま 上	
延喜式(第一)	宇治拾遺物語	玉かつま 下	
延喜式(第二)	保元物語。平治物語。承久記	本朝度量權衡攷	
延喜式(第三)	義經記	錢幣考遺	
延喜式(第四)	曾我物語	錢幣考遺圖錄	
延喜式(第五)	吾妻鏡(第一)	重訂本草綱目啓蒙(第一)	
延喜式(第六)	吾妻鏡(第二)	重訂本草綱目啓蒙(第二)	
延喜式(第七)	吾妻鏡(第三)	重訂本草綱目啓蒙(第三)	
上宮聖德法王帝說	吾妻鏡(第四)	重訂本草綱目啓蒙(第四)	
校本日本靈異記	吾妻鏡(第五)	ぎやど・べかどる 上	
觀古雜帖。埋麿發香	吾妻鏡(第六)	ぎやど・べかどる 下	
	吾妻鏡(第七)	妙貞問答。顯爲錄。破提字子	
	吾妻鏡(第八)	萬葉集其他 嗣出	



終

